

五反島遺跡発掘調査報告書

—吹田市南吹田下水処理場雨水滞水池設置工事に伴う発掘調査—

平成28(2016)年3月

吹田市教育委員会

序

五反島遺跡は、南吹田5丁目に所在する南吹田下水処理場を中心に広がる遺跡です。昭和42（1967）年、下水処理場の建設工事に伴い発見されました。遺跡は地表面から4～7mの深さにあることから、これまで発掘調査が行われる機会はほとんどなく、昭和61（1986）年度に処理場施設の増設に伴って実施された発掘調査が初めてのものでした。

この発掘調査では、弥生時代から室町時代にかけての遺物とともに川跡や堤防跡が見つかり、特に古墳時代と平安時代の土器や木製品、金属製品が数多く出土しました。それら遺物の中には、瑪瑙製の勾玉や鉄剣、中国唐で製作されたと考えられる銅鏡や鐵鏃など、一般的な集落遺跡からは出土することが稀な遺物が数多く認められ、川辺で行われた祭祀の痕跡ではないかと注目を集めました。

その後、五反島遺跡では、長く発掘調査を行う機会がありませんでしたが、今回、下水処理場内に雨水溜水池の設置工事が計画され、その工事に伴い発掘調査が26年ぶりに実施されることになりました。本書は、この発掘調査の報告となります。調査では前回と同様に川の痕跡とともに大量の遺物が見つかりましたが、また昭和61年度の調査とは時代相や特徴が異なる貴重な資料が数多く確認されました。発掘調査の件数は多くありませんが、五反島遺跡は吹田市の歴史を考える上で間違いなく重要な位置づけにある遺跡です。本書が五反島遺跡の性格を解明していく上で基礎的な資料となれば幸いです。

平成28（2016）年3月

吹田市教育委員会

教育長 梶谷尚義

例　　言

1. 本書は吹田市下水道部において計画された吹田市南吹田下水処理場滯水池設置工事に伴い、吹田市南吹田 5 丁目 34 番で実施した五反島遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査及び資料整理は、吹田市教育委員会文化財保護課賀納章雄・堀口健二が担当し、当課増田真木・西本安秀・中岡宏美の補助を得た。調査及び報告書作成に係る経費は吹田市下水道部によって予算化された。
3. 発掘調査の整理作業は、現地での発掘調査期間中は現場事務所で行い、調査終了後は吹田市岸部北 4 丁目 10 番 1 号、吹田市立博物館内整理室で実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本文の執筆は、第 4 章資料分析(1)を奥田尚氏（橿原考古学研究所特別指導研究員）、第 4 章資料分析(2)を安部みき子氏（大阪市立大学大学院医学研究科）、第 3 章【竈】・【卒塔婆】を西本、遺物觀察表（銭貨）補注を佐藤健太郎（関西大学）、第 3 章【墨書き土器】を佐藤・賀納、他を賀納が堀口の見解をとりまとめながら行った。また、遺物の写真撮影及びレイアウトは堀口が行い、全体の編集を賀納が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高は O.P.（大阪湾最低潮位）を示す。なお、文中では、滯水池調査区の長軸方向を東西、短軸方向を南北として表現した。
6. 遺物実測図の縮尺は基本的に 1/4 としたが、鍔 1 点（2062）を 1/6、石製品の一部を 1/2、銭貨拓本を実寸とした。
7. 発掘調査及び資料整理に際しては、礫資料を奥田尚氏、骨資料を安部みき子氏、貝資料を高田良二氏（西宮市貝類館）に鑑定していただいた。また、木製品年代測定について星野安治氏（奈良文化財研究所）、金属・木製品について山田哲也氏（元興寺文化財研究所）にご教示いただいた他、森内秀三氏・尾野善裕氏をはじめとする歴史土器研究会、上原眞人氏・近藤康司氏をはじめとする摂河泉瓦研究会、小森俊寛氏・久保直子氏をはじめとする古代の土器を研究する会など多くの諸氏からご教示を得た。
8. 発掘調査及び資料の整理作業には以下の方々の参加を得た。
佐藤健太郎、花崎晶子、秋山芳恵、大塚未侑、小川里美、鴨野有佳梨、木舎安紀子、久保沙織、高井明美、田原葉月、椿原佳恵、出口絵莉子、林裕子、平川葉子、本城志乃、万井孝信

目 次

第1章 位置と環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 五反島遺跡と周辺の遺跡	2
第2章 発掘調査の経過	6
(1) 既往の調査	6
(2) 調査の契機	6
(3) 調査の方法	7
第3章 発掘調査の成果	8
(1) 土層序	8
(2) 遺構・遺物の検出状況	14
【川床面】	14
【木杭・ピット】	14
【土器・瓦・礫等検出状況】	22
[A区]	22
[B区]	25
[C区]	32
[D区]	32
[E区・F区・G区]	32
(3) 出土遺物	39
【弥生土器：弥生時代】	39
【土師器：古墳時代】	39
【須恵器：古墳時代】	40
【土師器：飛鳥～平安時代】	43
[A区出土]	43
[B区出土]	50
[C区出土]	52
[D区出土及び滯水池区画不明]	54
[E区出土]	55
[F区・G区出土]	55
【須恵器：飛鳥～平安時代】	57
[A区出土]	57
[B区出土]	77
[C区出土]	83

〔D区出土及び滯水池区画不明〕	87
〔E区出土〕	90
〔F区・G区出土〕	90
【墨書き土器：奈良～平安時代】	93
【黒色土器：平安時代】	95
【瓦器：平安時代～中世】	95
【陶磁器：平安時代～中世】	96
【土師器：中世】	96
【製塙土器等】	96
【竈】	103
【土錘・鞆羽口】	103
【瓦】	104
【金属製品・木製品】	175
〔銭貨〕	175
〔鉄柄付銅杓〕	175
〔鍔・鐸〕	183
〔鍊〕	186
〔斧〕	189
〔刀子・口金〕	191
〔鎌〕	191
〔鉤〕	191
〔釘・鍵〕	197
〔卒塔婆〕	198
〔箸〕	198
〔加工木材〕	198
【石製品】	201
【骨】	201
第4章 資料分析	203
(1) 石材の石種の特徴と採石推定地	203
(2) 五反島遺跡出土の人骨および動物遺存体	209
第5章 まとめ	213
遺物観察表	221
報告書抄録	274

挿図目次

第 1 図	吹田市位置図	1
第 2 図	地形区分図	2
第 3 図	吹田市内主要遺跡分布図	3
第 4 図	調査地位置図	6
第 5 図	調査区画図	7
第 6 図	確認調査坑土層断面図①	9
第 7 図	確認調査坑土層断面図②	10
第 8 図	滞水池調査区北壁土層断面図①	11
第 9 図	滞水池調査区北壁土層断面図②	12
第 10 図	滞水池調査区東壁土層断面図	13
第 11 図	遺構平面図（川床面）	15
第 12 図	遺構平面図（谷状部トーン）	16
第 13 図	遺構平面図（木杭検出状況）	18
第 14 図	調査区東側ピット検出状況	19
第 15 図	調査区東側ピットの方向性	20
第 16 図	木杭実測図	21
第 17 図	遺構・遺物検出状況（A区・B区東側）	23・24
第 18 図	A区・B区東側遺物番号対照図（須恵器）	26
第 19 図	A区・B区東側遺物番号対照図（土師器・瓦・金属器等）	27
第 20 図	調査区東側礫検出状況	28
第 21 図	遺構・遺物検出状況（B区）	29・30
第 22 図	B1区鉄鐵遺物番号対照図	31
第 23 図	遺構・遺物検出状況（C区・B区西側）	33・34
第 24 図	遺構・遺物検出状況（D区）	35・36
第 25 図	遺構・遺物検出状況（E区）	37・38
第 26 図	E区遺物番号対照図	37・38
第 27 図	弥生土器	40
第 28 図	土師器（古墳時代）①	41
第 29 図	土師器（古墳時代）②	42
第 30 図	須恵器（古墳時代）	42
第 31 図	A区出土土師器（飛鳥～平安時代）①	44
第 32 図	A区出土土師器（飛鳥～平安時代）②	45
第 33 図	A区出土土師器（飛鳥～平安時代）③	46

第 34 図	A区出土土師器（飛鳥～平安時代）④	47
第 35 図	A区出土土師器（飛鳥～平安時代）⑤	48
第 36 図	B区出土土師器（飛鳥～平安時代）①	48
第 37 図	B区出土土師器（飛鳥～平安時代）②	49
第 38 図	B区出土土師器（飛鳥～平安時代）③	50
第 39 図	C区出土土師器（飛鳥～平安時代）①	51
第 40 図	C区出土土師器（飛鳥～平安時代）②	52
第 41 図	D区出土・区画不明土師器（飛鳥～平安時代）	53
第 42 図	E区出土土師器（飛鳥～平安時代）①	54
第 43 図	E区出土土師器（飛鳥～平安時代）②	56
第 44 図	F区・G区出土土師器（飛鳥～平安時代）	56
第 45 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①	58
第 46 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②	59
第 47 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③	60
第 48 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④	61
第 49 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑤	62
第 50 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑥	63
第 51 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑦	64
第 52 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑧	65
第 53 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑨	66
第 54 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑩	67
第 55 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑪	68
第 56 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑫	69
第 57 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑬	70
第 58 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑭	71
第 59 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑮	72
第 60 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑯	73
第 61 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑰	74
第 62 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑱	75
第 63 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑲	76
第 64 図	A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑳	77
第 65 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①	78
第 66 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②	79
第 67 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③	80
第 68 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④	81

第 69 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑤	82
第 70 図	B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑥	83
第 71 図	C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①	84
第 72 図	C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②	85
第 73 図	C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③	86
第 74 図	C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④	87
第 75 図	D区出土・区画不明須恵器（飛鳥～平安時代）	88
第 76 図	E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①	89
第 77 図	E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②	91
第 78 図	E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③	92
第 79 図	F区・G区出土須恵器（飛鳥～平安時代）	92
第 80 図	墨書き土器①	94
第 81 図	墨書き土器②	95
第 82 図	黒色土器	97
第 83 図	瓦器	97
第 84 図	陶磁器	97
第 85 図	土師器（中世）	98
第 86 図	製塙土器・器種不明土器	98
第 87 図	竈①	99
第 88 図	竈②	100
第 89 図	竈③	101
第 90 図	竈④	102
第 91 図	土錘・轆羽口	103
第 92 図	格子目タタキバターン	104
第 93 図	瓦①（軒丸瓦）	107
第 94 図	瓦②（軒丸瓦）	108
第 95 図	瓦③（軒丸瓦）	109
第 96 図	瓦④（軒丸瓦）	110
第 97 図	瓦⑤（軒丸瓦）	111
第 98 図	瓦⑥（軒丸瓦）	112
第 99 図	瓦⑦（軒丸瓦他）	113
第 100 図	瓦⑧（丸瓦）	114
第 101 図	瓦⑨（丸瓦）	115
第 102 図	瓦⑩（丸瓦）	116
第 103 図	瓦⑪（丸瓦）	117

第 104 図 瓦⑫ (丸瓦)	118
第 105 図 瓦⑬ (丸瓦)	119
第 106 図 瓦⑭ (丸瓦)	120
第 107 図 瓦⑮ (丸瓦)	121
第 108 図 瓦⑯ (丸瓦)	122
第 109 図 瓦⑰ (丸瓦)	123
第 110 図 瓦⑱ (丸瓦)	124
第 111 図 瓦⑲ (丸瓦)	125
第 112 図 瓦⑳ (丸瓦)	126
第 113 図 瓦㉑ (丸瓦)	127
第 114 図 瓦㉒ (丸瓦)	128
第 115 図 瓦㉓ (丸瓦)	129
第 116 図 瓦㉔ (丸瓦)	130
第 117 図 瓦㉕ (丸瓦)	131
第 118 図 瓦㉖ (丸瓦)	132
第 119 図 瓦㉗ (平瓦)	133
第 120 図 瓦㉘ (平瓦)	134
第 121 図 瓦㉙ (平瓦)	135
第 122 図 瓦㉚ (平瓦)	136
第 123 図 瓦㉛ (平瓦)	137
第 124 図 瓦㉜ (平瓦)	138
第 125 図 瓦㉝ (平瓦)	139
第 126 図 瓦㉞ (平瓦)	140
第 127 図 瓦㉟ (平瓦)	141
第 128 図 瓦㉟ (平瓦)	142
第 129 図 瓦㉟ (平瓦)	143
第 130 図 瓦㉟ (平瓦)	144
第 131 図 瓦㉟ (平瓦)	145
第 132 図 瓦㉟ (平瓦)	146
第 133 図 瓦㉟ (平瓦)	147
第 134 図 瓦㉟ (平瓦)	148
第 135 図 瓦㉟ (平瓦)	149
第 136 図 瓦㉟ (平瓦)	150
第 137 図 瓦㉟ (平瓦)	151
第 138 図 瓦㉟ (平瓦)	152

第 139 図 瓦⑦ (平瓦)	153
第 140 図 瓦⑧ (平瓦)	154
第 141 図 瓦⑨ (平瓦)	155
第 142 図 瓦⑩ (平瓦)	156
第 143 図 瓦⑪ (平瓦)	157
第 144 図 瓦⑫ (平瓦)	158
第 145 図 瓦⑬ (平瓦)	159
第 146 図 瓦⑭ (平瓦)	160
第 147 図 瓦⑮ (平瓦)	161
第 148 図 瓦⑯ (平瓦)	162
第 149 図 瓦⑰ (平瓦)	163
第 150 図 瓦⑱ (平瓦)	164
第 151 図 瓦⑲ (平瓦)	165
第 152 図 瓦⑳ (平瓦)	166
第 153 図 瓦㉑ (隅切瓦)	167
第 154 図 瓦㉒ (平瓦)	168
第 155 図 瓦㉓ (平瓦)	169
第 156 図 瓦㉔ (丸瓦)	170
第 157 図 瓦㉕ (平瓦)	171
第 158 図 瓦㉖ (平瓦)	172
第 159 図 瓦㉗ (平瓦)	173
第 160 図 瓦㉘ (平瓦・丸瓦)	174
第 161 図 錢貨拓本①	176
第 162 図 錢貨拓本②	177
第 163 図 錢貨拓本③	178
第 164 図 錢貨拓本④	179
第 165 図 錢貨拓本⑤	180
第 166 図 鉄柄付銅杓	181
第 167 図 鋸	182
第 168 図 鋤①	183
第 169 図 鋤②	184
第 170 図 鋤③	185
第 171 図 鎌①	187
第 172 図 鎌②	188
第 173 図 斧①	189

第 174 図 斧②	190
第 175 図 刀子・口金・鍤①	192
第 176 図 鍤②	193
第 177 図 鍤③	194
第 178 図 鍤④	195
第 179 図 鍤⑤	196
第 180 図 鉤・釘・鎌	197
第 181 図 卒塔婆・箸・加工木材（木 64）	199
第 182 図 加工木材（木 44）	200
第 183 図 サヌカイト・石鍋他	201
第 184 図 砥石	202
第 185 図 昭和 61 年度検出遺構との位置関係	217・218
第 186 図 五反島遺跡と都城の位置関係	219

表目次

第 1 表 石材の石種と採石地	208
第 2 表 ウシとウマの頭蓋骨の計測値	210
第 3 表 ウシとウマの下顎骨の計測値	211
第 4 表 ウシとウマの四肢骨の計測値ならびに体高の推定表	211
付 表 五反島遺跡の人骨および動物遺存体の同定結果	212

第1章 位置と環境

(1) 地理的環境

吹田市は、大阪府の北部に位置し、東を茨木市・摂津市、南を大阪市、西を豊中市、北を箕面市と接する。吹田市の南側には神崎川が西流するが、神崎川にほぼ沿う形で大阪市と市境をなしている。古代の国郡制において吹田市は摂津国に属するが、郡については2郡にまたがっており、現在の吹田市役所付近を境にして、東側が鶴下郡、西側が豊島郡となる。

その地形については、市域の北側と南側で対照的な特徴をみせる。市域北側の約3分の2は千里丘陵とよばれる丘陵地が占めており、その南側には大阪平野の一端をなす平野部が広がっている。

千里丘陵は、鮮新世末から更新世前半にかけて古大阪湾・古大阪湖に堆積した土砂が隆起して形成したもので、吹田市内では標高80m以下のなだらかな丘陵地となっている。また、市域の東側では丘陵縁辺部に沿って標高10~20mほどの台地状の地形（岸部・千里丘台地）がみられる。

市域南側に広がる平野部については、主に完新世以降、神崎川や淀川など河川による沖積作用によって形成されたもので、吹田市史による地形区分では、千里丘陵南端部付近から東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分しており、ちょうど安威川低地側が鶴下郡、神崎川低地側が豊島郡となる。そして、これら低地部においては、地盤が軟弱で少しの掘削で湧水をみる地点も多い。

また、安威川低地と神崎川低地を挟む形で、JR吹田駅付近から南側一帯にかけては、繩文海進時に潮流によって運ばれた砂によって形成されたといわれる吹田砂堆が広がっている。砂堆部は標高が5m前後となり、平野部の中にあっては微高地となる。さらに、安威川低地側にあって丘陵寄りの場所では、やや締まった粘土層を地山層として確認される地点がある。その土質は千里丘陵のものとよく似ており、丘陵を土砂の供給源として堆積したものであろうと考えられるが、こうした地点は、同じ平野部にあっても水捌けという面では比較的安定しているものといえる。

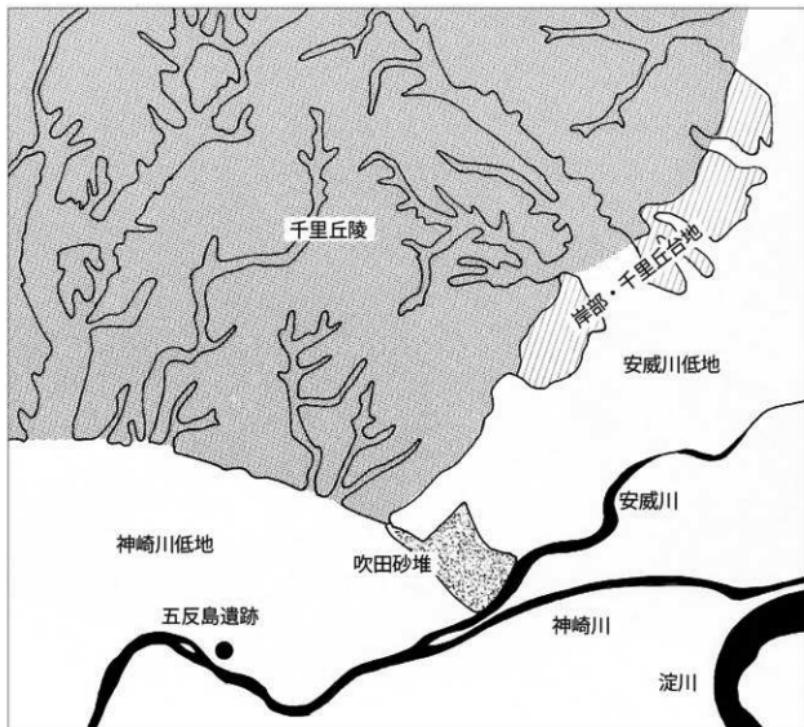


第1図 吹田市位置図

(2) 五反島遺跡と周辺の遺跡

本書で報告する五反島遺跡は、神崎川低地上、かつての豊島郡に位置する。遺跡は、吹田市域の南端付近、南吹田5丁目にある南吹田下水処理場を中心とし、その範囲は、南接する大阪市域にも広がる。五反島遺跡は弥生時代から中世にかけての河床遺跡であるが、ここでは五反島遺跡が位置する豊島郡側の、神崎川低地周辺における弥生時代以降の主だった遺跡を中心にその動向をまとめておく。

まず、弥生時代の遺跡では、五反島遺跡の北方に位置する垂水遺跡、垂水南遺跡、藏人遺跡、榎坂遺跡などが代表的なものとしてあげられる。垂水遺跡は、南側の平野部を臨む標高55mほどの丘陵上に竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が検出されており、高地性集落として知られているが、近年の調査では丘陵南面下の平野部においても弥生時代中期から後期にかけての遺構・遺物が確認されている。垂水南遺跡では、これまでのところ明確な遺構の検出はないが、古墳時代の包含層や河道跡などから弥生中期から後期にかけての遺物が出土しており、周辺に弥生時代の集落の存在をうかがわせる。



注) 土質工学会関西支部・関西地質調査業協会編『新編大阪地盤図』付図2微地形区分図を基に作成。
地形名は『吹田市史第1巻』による。

第2図 地形区分図 (S=1/50,000)



(遺跡名)

- | | | |
|------------|-------------|--------------|
| 1. 五反島遺跡 | 13. 西の庄東遺跡 | 25. 吹田操車場遺跡 |
| 2. 蔽人遺跡 | 14. 浜の堂遺跡 | 26. 中ノ坪遺跡 |
| 3. 櫻坂遺跡 | 15. 元町遺跡 | 27. 片山東屋敷廻遺跡 |
| 4. 家形石棺墓 | 16. 都呂須遺跡 | 28. 原東遺跡 |
| 5. 垂水南遺跡 | 17. 高浜遺跡 | 29. 岸部中遺跡 |
| 6. 垂水遺跡 | 18. 高城B遺跡 | 30. 吉志部遺跡 |
| 7. 垂水西原古墳 | 19. 吹田城跡推定地 | 31. 吉志部瓦窯跡 |
| 8. 北泉遺跡 | 20. 高城遺跡 | 32. 吉志部古墳 |
| 9. 豊嶋郡条里遺跡 | 21. 高畠遺跡 | 33. 七尾瓦窯跡 |
| 10. 出口古墳 | 22. 木傍遺跡 | 34. 七尾東遺跡 |
| 11. 片山公園遺跡 | 23. 片山遺跡 | 35. 似禪寺山遺跡 |
| 12. 西の庄遺跡 | 24. 片山荒池遺跡 | ▲は須恵器窯跡を示す |

第3図 吹田市内主要遺跡分布図 (S=1/40,000)

また、蔵人遺跡では、これまでに弥生時代の明確な遺構は検出されていないが、古墳時代の遺物包含層等に混入する形で弥生時代後期の遺物が多く出土している。榎坂遺跡においても多くの弥生時代後期の遺物が出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての川跡などの遺構が検出されている。

このほか、垂水遺跡の東約 500 m の地点にある北泉遺跡では、丘陵斜面に二次的に堆積する状態ではあるが、古墳時代の遺物とともに弥生時代前期から後期にかけての遺物が多数検出されている。北泉遺跡出土の遺物には、赤塗り土器や撒入土器、銅鏡などの特異なものが多くあった。

次に、古墳時代についてみると、吹田市における古墳の展開については不明な点が多い。榎坂遺跡のすぐ北側標高約 20 m の丘陵上にある江坂素盞鳴尊神社には家形石棺蓋が祀られており、この地に古墳時代後期の古墳が存在したものと考えられているが、吹田市域で確認されている古墳は周辺他市に比べてそれほど多くない。これまでに発掘調査で遺構等を確認した古墳は、吹田市東部に位置する吉志部古墳・新芦屋古墳の 2 基のみであり、これまでに知られている古墳はいずれも千里丘陵上に位置している。

神崎川低地周辺では、垂水遺跡の北約 400 m の丘陵上に前期古墳とみられる垂水西原古墳がある。その実態は明らかでないが、昭和 49 年、造成工事中に赤色顔料塗布の痕跡をもつ石室・石棺の石材とみられる石片が確認されている。また千里丘陵の最南端部付近の出口町においては、古墳時代後期の出口古墳がある。これも大正時代の工事によって既に消失しているが、須恵器や金環などの遺物が伝わっている。そして、出口古墳の北約 80 m に位置する片山公園遺跡では、古墳そのものは確認されていないが、埴輪片が多数出土しており、付近に古墳が存在していた可能性が考えられている。また、出口古墳の南東約 200 m の平地部に位置する西の庄遺跡でも、近年の発掘調査で落ち込み地形内に幅広い時期の遺物が混在する中で埴輪片が数点出土している。

こうした古墳の確認状況に対して、古墳時代の集落跡については比較的良好な資料を得ている。特に神崎川低地においては、垂水南遺跡・榎坂遺跡・蔵人遺跡などが主要な遺跡としてあげられ、垂水南遺跡と榎坂遺跡では建物跡の展開が確認されている。また、特殊な遺物として、垂水遺跡の平地部で落ち込み遺構の埋土中から溶解途中の 4 世紀のものとみられる銅鏡片が出土しており、この銅鏡片がどのような意味をもつか議論すべき資料となっている。

なお、吹田市から豊中市にかけての千里丘陵上では、古墳時代に数多くの須恵器窯が築かれ、須恵器生産が盛んに行われた。吹田市内では、6 世紀前半から 7 世紀前半にかけて盛期をもつが、これまでのところ 56か所の窯跡が確認されている。

さて、古墳時代から以降において、五反島遺跡では飛鳥時代から奈良時代の遺物の出土を見るものの、神崎川低地上の遺跡では、榎坂遺跡・蔵人遺跡等で奈良時代の遺物が少量出土している程度である。ただし、榎坂遺跡では銅製丸鞘や和同開珎、神功開寶などの一般的な集落遺跡からすればやや特異といえる遺物が出土している。このほか、吹田市では全体的にみても平

安時代に至るまで遺跡の数はそれほど多くなく、比較的まとまつた形で遺構・遺物が確認されている遺跡については主に吹田市東部にみられる。市東部に位置する吹田操車場遺跡では飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が比較的まとまって検出されており、片山東屋敷廻遺跡でも奈良時代の建物跡が検出されている。また、後期難波宮へ瓦を供給した七尾瓦窯跡がこの時期の遺跡として特記されるが、このような宮都への瓦供給は、その後平安時代初期にも七尾瓦窯跡の西側約200mに位置する吉志部瓦窯跡において平安宮へ向けての瓦生産が行われている。

平安時代以降になると、吹田市全体で遺跡の展開は多くなる。その一因としては、吹田市域において荘園が多く經營されるようになり、それとともに平安時代から中世にかけて耕作地の開発が盛んになることがあげられる。五反島遺跡周辺では、平安時代に東寺領垂水莊や春日社領垂水西牧などの荘園が成立するが、垂水南遺跡においては、「垂庄」・「中庄」と記された平安時代初頭の墨書き土器が出土しており、成立当初の垂水莊に関連する資料と考えられている。

また、藏人遺跡は、垂水莊の莊域北部に位置するが、これまでの発掘調査では中世の集落や耕作に関わる資料が顕著に認められている。藏人遺跡は、応永10(1403)年の「春日社領樅坂郷名主百姓等申状案」という史料にその名が初出する垂水莊の集落である「藏人村」と重なる地域にあり、藏人遺跡における中世の出土資料についてはこの「藏人村」に関連するものであろうと考えられている。

このほか、樅坂遺跡では、当該時期の縁釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、瓦、製塩土器、水晶など、一般的な集落遺跡とすればやや特異な遺物が出土している。さらに、平安時代から中世にかけての土層内から多くの牛馬の骨が検出されている。この点で、当該時期の樅坂遺跡は、一般的な集落遺跡とは異なり、先述の奈良時代の出土遺物とも鑑みると、寺院の存在が推測されるほか、牛馬骨の出土に着目すると、垂水西牧との関連も考えられる。

ところで、五反島遺跡はかつての豊嶋郡に位置するが、この付近では東西・南北方向の方位軸にほぼ沿うような形での豊嶋郡条里とよばれる条里地割がみられる。昭和57(1982)年度に吹田市文化会館建設に伴い実施した豊嶋郡条里遺跡の発掘調査においては、豊嶋郡条里地割の東限にあたる南北方向の中世の大溝が確認されている。また、樅坂遺跡をはじめ、藏人遺跡、垂水南遺跡などにおいても条里地割に沿った耕作溝などが検出されており、平安時代から中世にかけての神崎川低地における遺跡の動向をみると、荘園經營や条里地割に関連する資料が多く得られている。

第2章 発掘調査の経過

(1) 既往の調査

五反島遺跡は、昭和42(1967)年、南吹田下水処理場の建設現場において、地元住民により和同開珎、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の遺物が採集されたことによって発見された。しかし、これは地表面から3~5mという深さでの工事掘削中の出土であったこともあり、このときに発掘調査が行われることはなく、詳細は不明のままであった。そして、その後、昭和61(1986)年になって、下水処理場内での処理施設の増設工事が計画され、これにともない初めて発掘調査が実施されることになった。

この発掘調査では、地表面から3.5~7mの深さで弥生時代から中世にかけての遺物とともに、川跡・堤防跡等の遺構が検出されたが、とくに古墳時代と平安時代の遺物量が多かった。なかでも、平安時代の遺物については須恵器や土師器などの土器類のほか、中国製の銅鏡（瑞花双鳳麒麟獣貌文鏡）や鉄鎌、鉄鎌、鋤、竈などの特異なものが多数認められ、これらの多くは祭祀に関わるものではないかと考えられている。

(2) 調査の契機

今回の発掘調査は、南吹田下水処理場内において、昭和61年度調査区の東側約50mの地点に雨水溜水池の設置工事が計画されたことにより実施したものである。

調査に当たっては、当該地に遺構・遺物が包含している場合、地表面からかなり深い場所に位置していると予想されることから、まず、平成24(2012)年7月30日に現代盛土層の厚さを確認するための掘削を行った。

その結果、現地表面(O.P.+5m)から約2.2~2.4mの深さ(O.P.+2.6~+2.8m)まで現代盛土層が覆い、その直下に旧耕土層が堆積するのを確認した。このことから、現状地表面から直接掘削を行い、調査を実施することは困難であると判断され、本体工事で必要となる土留壁を施工し、現代盛土層を機械掘削により除去した後に確認調査を行うことになった。

確認調査は、平成25(2013)年2月4日から3月5日にかけて4か所の調査坑(G1区~G4区: 約48m²)を設定し、重機と人力によって掘削を行った。その結果、O.P.-1m付近の深さを中心にして弥生時代から中世にかけての遺物を検出するとともに、川跡と考えられる遺構を確認する



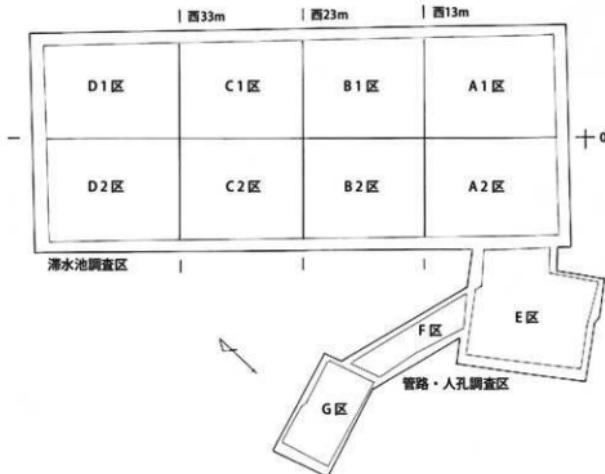
第4図 調査地位置図 (S=1/5,000)

ことができた。これにより、予定の工事が執り行われた場合、滯水池・管路・人孔設置部分について遺跡が破壊されるものと判断されたことから、これら設備設置個所について調査区を設定し、記録保存を目的に発掘調査を実施することとなった。

(3) 調査の方法

発掘調査に当たっては、まず、確認調査で遺物の包含がほとんど確認されなかつた O.P.O m の深さまで重機によって掘削した。その後、滯水池設置部分において平成 25 年 4 月 15 日から人力掘削によって発掘調査を開始した。調査では遺構・遺物の検出作業及びその記録作業を行い、7 月 12 日に滯水池設置部分についての調査を完了した。その後、8 月 1 日からは管路・人孔設置部分について調査を開始した。この部分の調査については、西側人孔部分から始め、管路部分、東側人孔部分へと作業を進め、9 月 17 日にすべての調査を完了した。調査面積については、滯水池設置部分が 664m²、管路・人孔設置部分が 140m² となった。

なお、遺物を取り上げる際の目安として、滯水池部分については調査区を 8 分割し、A 1 区～D 2 区とし、さらに各区画を 4 分割して北東部を①、南東部を②、北西部を③、南西部を④ として出土遺物を取り上げた。また、管路・人孔部分については、東側人孔部分を E 区、管路部分を F 区、西側人孔部分を G 区とし、E 区については、遺物取り上げの目安として南部を E1 区、北部を E2 区とした。ちなみに、確認調査では、調査坑を G1 区 (A1 区内)、G2 区 (B2 区内)、G3 区 (C2 区内)、G4 区 (D1 区内) と呼称したが、これらは本調査における G 区ではないことを断っておく。



第 5 図 調査区画図

第3章 調査の成果

(1) 土層序

調査区の土層序は、約 2.2 ~ 2.4 m の厚さで現代盛土層の堆積があり、この直下の O.P. + 2.6 ~ + 2.8 m 付近で旧耕土層が約 20cm の厚さで堆積していた。旧耕土層以下は、河川堆積物が厚く堆積していたが、旧耕土層直下においては、約 0.5 ~ 1.2 m の厚さで粘土を主体とする土層が堆積し、粘土層以下は 3 ~ 4 m の厚さで砂層が堆積していた。そして、砂層下の O.P. - 0.85 ~ - 1.9 m 付近において黒灰色・暗灰色の砂質土層の堆積を確認したが、この砂質土層中にはマテ貝・カキなどの貝殻が多く含まれており、この砂質土層は、当地が海水域であった時代に形成されたものと考えられる。

河川堆積物である砂層・粘土層についてみると、上位の粘土層については、河川の流速が緩く、ほとんど流れがない状況下での堆積物であると考えられる。河川流域の中にあっても沼澤のような環境下において形成された土層であろうと考えられる。

砂層については、河川がある程度の流速をもって流れる中、あるいは氾濫等の作用で形成されたものと考えられる。砂層は細砂から細礫までが複雑に入り混じて堆積し、その堆積状況から概ね東から西側へ向かっての流れの中で堆積したものと判断できた。しかし、厚く堆積する砂層を分層する作業の中で、土層の時期的なまとまり、個々の流路のまとまり等を区分することは複雑な砂層の重なりのため困難であった。そのため、今回の調査では、層位ごとに掘削を行うことはできず、掘削方法としては、滯水池部分においては O.P.0m から 5 段階に分けて掘削を行い、1 段階目から 4 段階目の掘削土層についてを第 1 層～第 4 層とし、5 段階目は川床面直上付近の掘削となり、「遺構埋土」あるいは「遺構掘削」として遺物を取り上げることになった。また、人孔・管路部分においては、O.P.0m から O.P. - 1m までを「上層」、それ以下を「下層」とし、川床面直上付近を「遺構埋土」・「遺構掘削」とした。

【確認調査土層名（第6図・7図）】



第Ⅰ層

暗灰色シルト質粘土
(旧耕土)



第IV-A層

灰色中砂～灰白色細砂の互層
(河川堆積砂上層)



第Ⅱ層

暗青灰色粘土
(黄色・暗灰色粘土ブロック含む)
(落込み埋土)



第IV-B層

灰白色細砂～黄色粗砂～
淡黄色細礫の互層
(河川堆積砂下層)



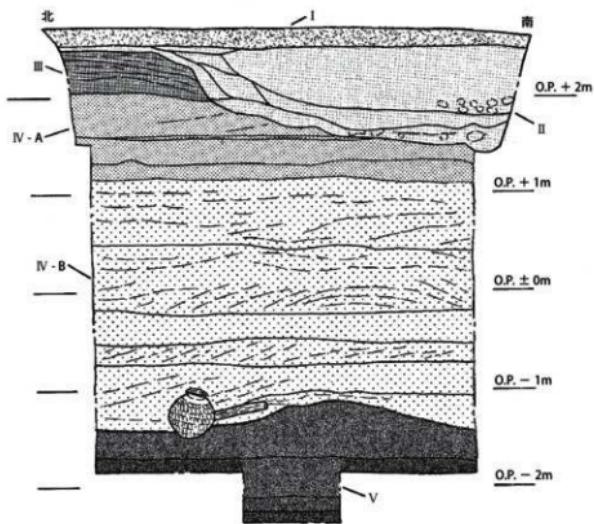
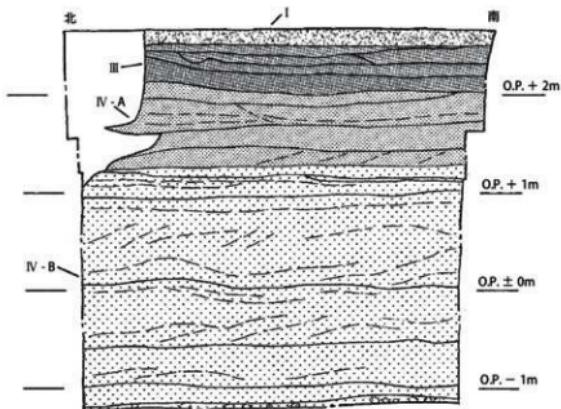
第Ⅲ層

灰色粘土
(一部、灰白色粘土の互層)



第V層

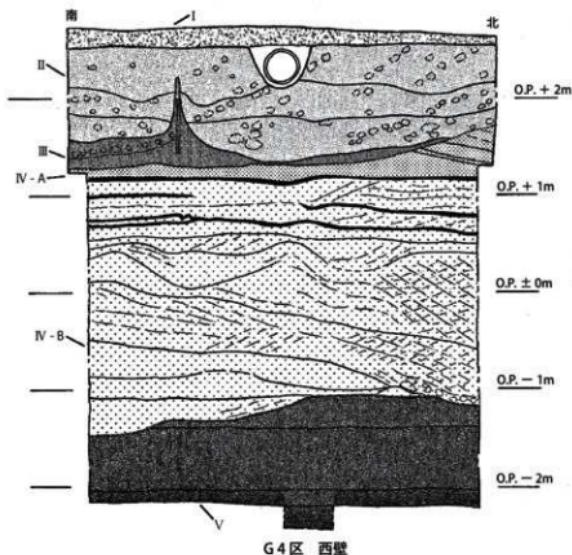
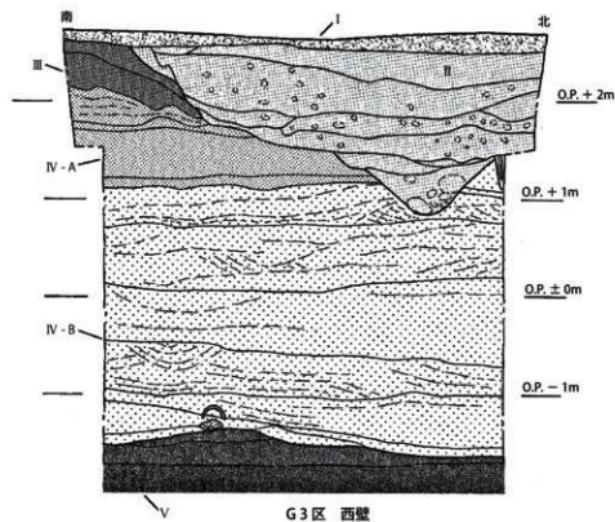
黒灰色・暗灰色砂質土
(川床ベース層)



※遺物取り上げ時の層名とは異なる。



第6図 確認調査坑土層断面図①

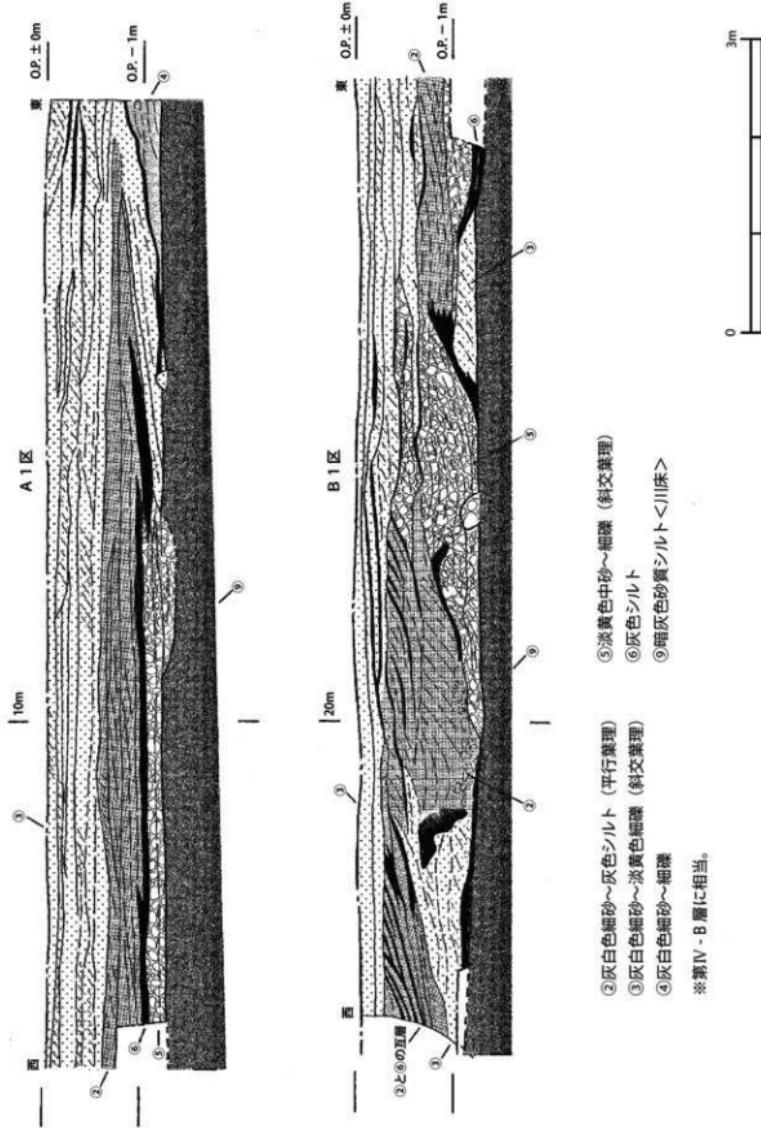


※遺物取り上げ時の層名とは異なる。

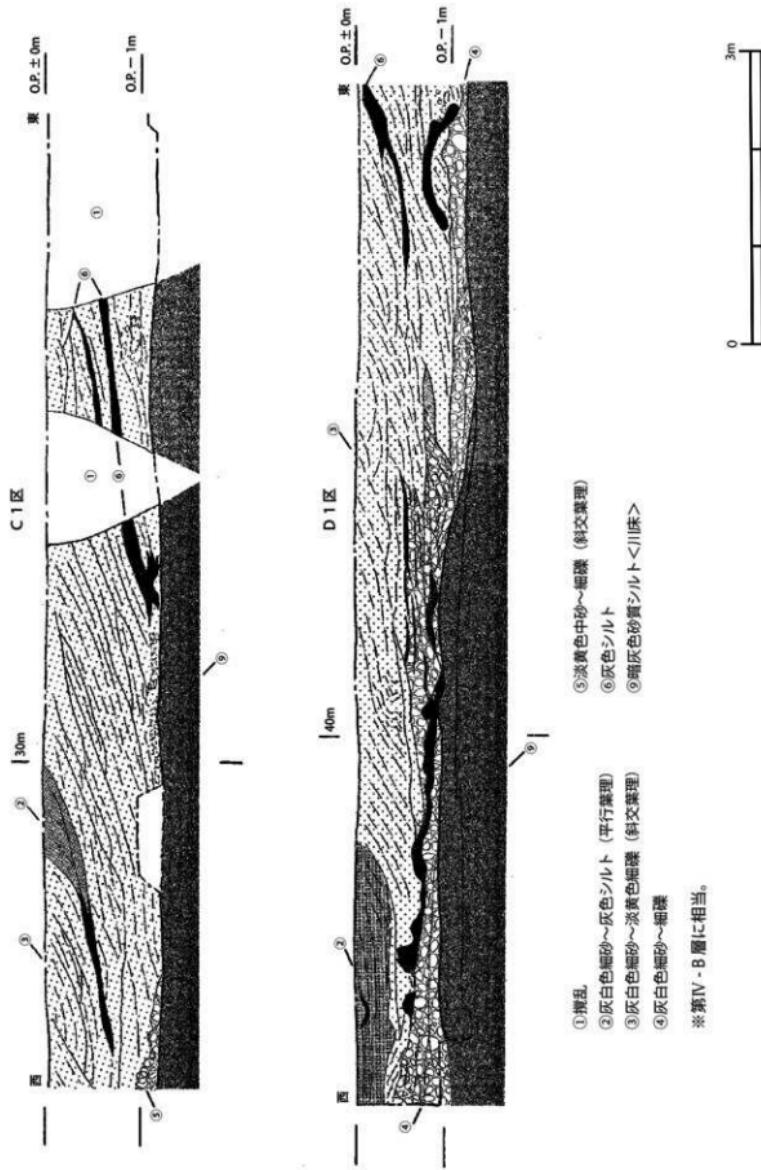


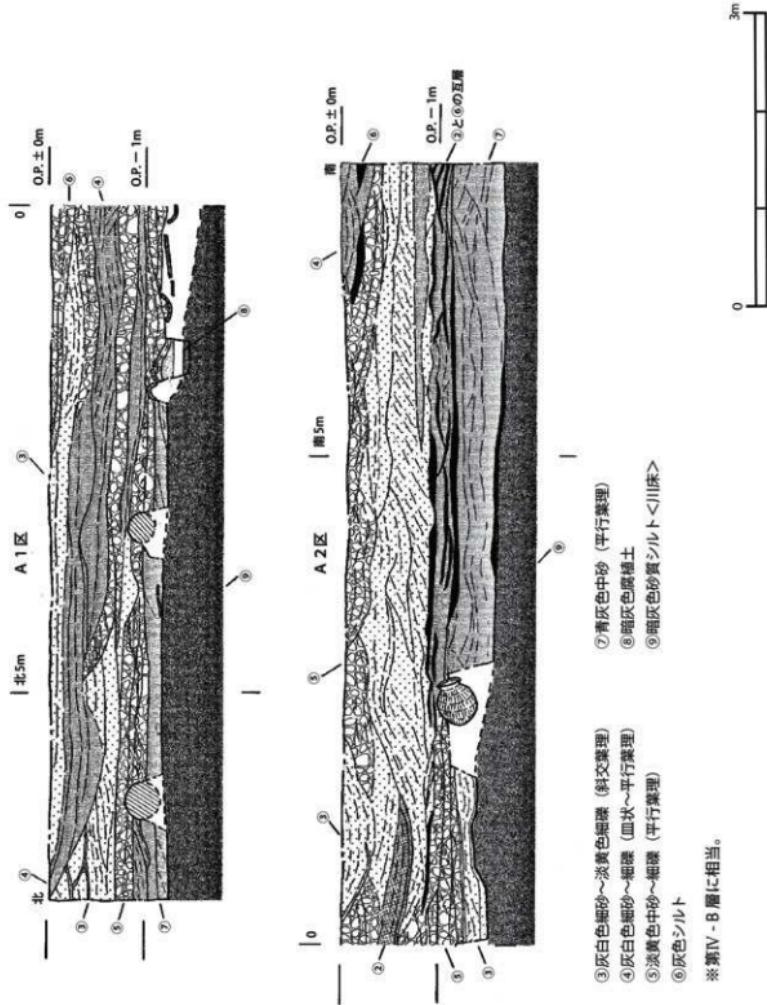
第7図 確認調査坑土層断面図②

第8図 溝水池調査区北壁土層断面図①



第9図 滞水池調査区北壁土層断面図②





第10図 溝水池調査区東壁土層断面図

(2) 遺構・遺物検出状況

【川床面】

O.P.0m から砂層を掘削し、黒灰色・暗灰色砂質土層の上面を目安として精査したところ、O.P. - 0.85 ~ - 1.9 m の深さで、幾筋もの谷状の起伏を認めることができた。これは、河川の流れによる浸食作用で形成された起伏であると考えられ、河川流路の底面、つまり川床を検出したものと考えられる。ただし、これら谷状の起伏それが個々の河川の跡を示しているのではなく、おそらくは当調査地を流域として流れている河川が幾筋かの流路をもち、あるいは大雨等のときどきの状況により流路を変えながら刻みつけた痕跡であると考えられる。そして、この起伏の筋方向は概ね東西方向にのびており、砂層の堆積状況を含めて考えると、河川は東から西方へ流れていたものと考えられる。

また、谷状とはいえないが、A 区においては不定形の土坑状の窪みがいくつかみられ、長さ 2 ~ 5 m 以上を測るものについては 4 か所認められた。これも河川の流れにより形成されたものと考えられる。

なお、調査区内で川床面がもっとも深くなるのが A 2 区南東部及び E 区北部付近 (O.P. - 1.9 m)、そして C 2 区南西部付近 (O.P. - 1.8 m) であり、もっとも高い部分が D 1 区北部付近 (O.P. - 0.85 m) であった。また、A 1 区及び B1 区・C1 区の北側付近においては起伏が少なく、O.P. - 1.15 ~ - 1.3 m 程度のレベルで平坦面が広がる部分もみられた。

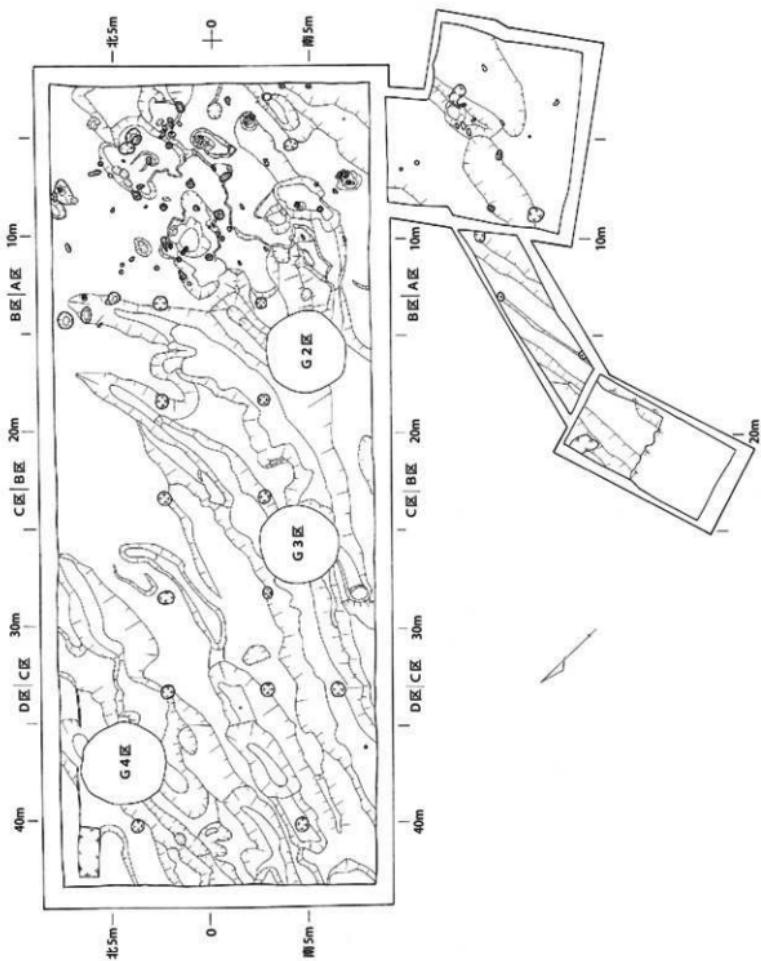
【木杭・ピット】

川床面直上付近において横倒しとなった杭材や川床に打ち込まれた状態の杭が検出されるとともに、杭跡と考えられるピットが検出された。特に、調査区の東側にあたる A 区・E 区でまとまつた出土状況がみられた。

横倒しとなった杭材は、杭と推定できるものを含めて約 20 本検出され、打ち込まれた状態での杭は 5 本確認できた。杭材の太さは、径 10 ~ 12cm 程度、15 ~ 20cm 程度、20 ~ 25cm 程度のものとなり、長さについては約 6 m のものが 5 本、3 ~ 5 m のものが 8 本、この他に調査区の壁で分断されているものの、おそらく 3 m 以上はあろうと推定できるものが 1 本あった。

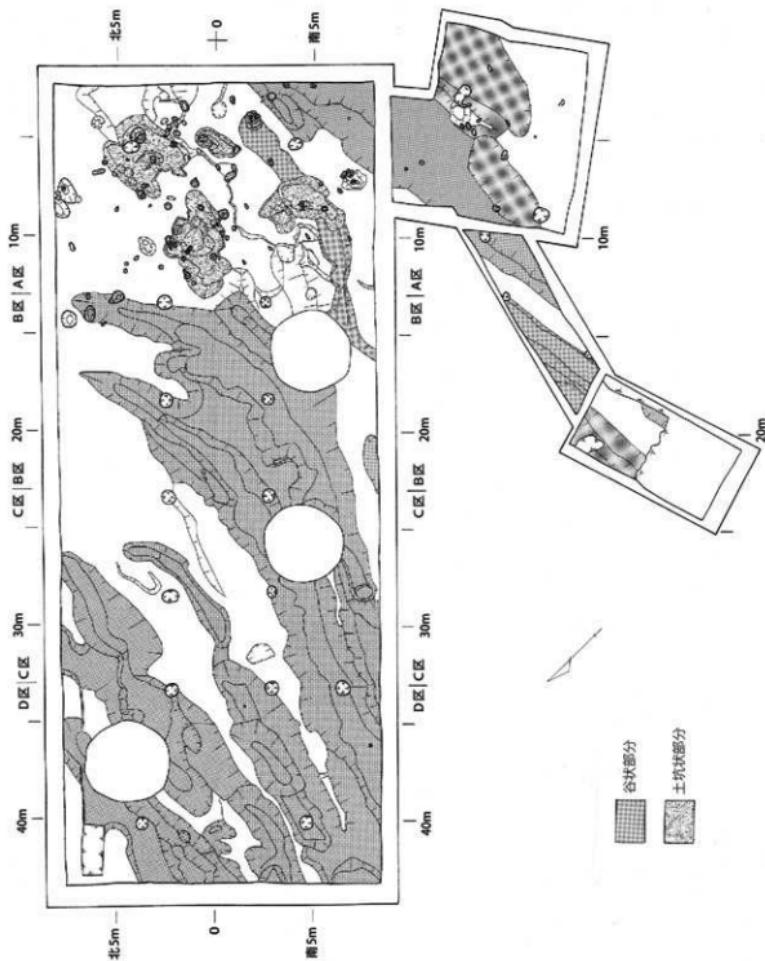
これら杭材のうち、B1 区・C1 区で検出された木 44 は、長さ約 6 m を測り、杭の尖端部は少し欠損している状態であったが、その反対側端部についてはほど加工が施されていた。これは、長さ 6 m の杭上部に何らかの構造物が組まれていたことを示すものといえよう。さらに、E 区南壁中で検出された木 64 は、杭かどうかは明確でないが、径約 16cm を測り、確認できた一方の端部が面取り加工されたものであった。これも何らかの構造物を構成していた材であると考えられる。

また、川床に打ち込まれた杭については、A 1 区で 1 本 (木 51)、A2 区で 2 本 (木 1・木 50)、D2 区で 2 本 (木 52・木 54) 確認できた。このうち、木 1、木 50、木 52 については、径 20 ~ 25cm を測り、木 50 については実測作業時までには上部が倒れてしまったが、それぞ



第11図 遺構平面図(川床面)

第12図 遺構平面図(谷状部トーン)



れ川床面からやや長く突き立つ状態で検出された。川床面からの杭が打ち込まれた深さは、木1で約90cm(尖端部深さO.P.-2.7m)、木50で約110cm(尖端部深さO.P.-2.45m)、木52で約90cm(尖端部深さO.P.-2.5m)を測った。また、木51は径約12cmで、ピット内に斜めに打ち込まれている状態で検出された(尖端部深さO.P.-1.7m)。杭先は北東側に向かって打ち込まれていた。木54については、径約10cmを測り、約40cmの深さ(尖端部深さO.P.-1.7m)で打ち込まれていた。

なお、横倒しになった杭は概ね東西方向に向かって倒れており、ほとんどが尖端部を東側に向けていたことから、打ち込まれていた杭が、東からの河川の流れによって倒れたものではないかと考えられる。また、これら杭については、多くが樹皮をつけたままの状態のものであった。

このように、かなり深くまでしっかりと打ち込まれた杭が認められたが、これに関連して杭跡と考えられるピットも多数検出された。特にA区及びB1区東端部・E区において集中して認められた。検出されたピットについては、川床面に伴う自然の凹凸もあると思われ、明確に杭跡など人為的なものと判別をすることが困難なものもあったが、形状やその深さから人為的なものと考えられるピットについて第14図に示した。

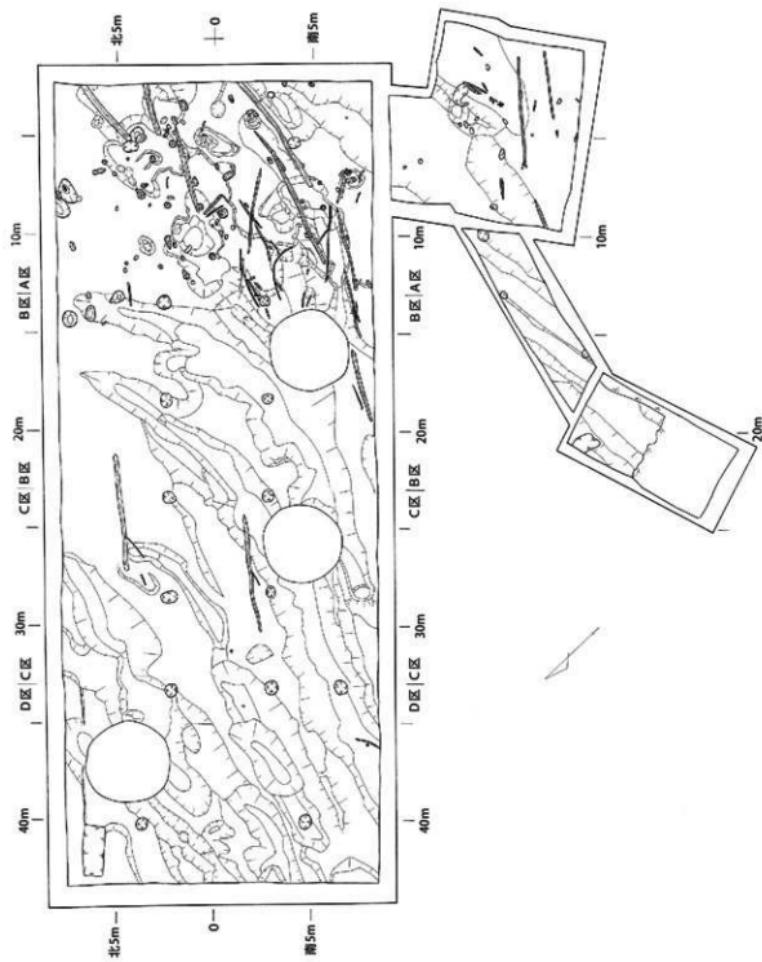
ここで示したピットは、ピットの底面レベルがA区・B区で概ねO.P.-1.45mより深いもの、E区で概ねO.P.-1.3mより深いものとなる。

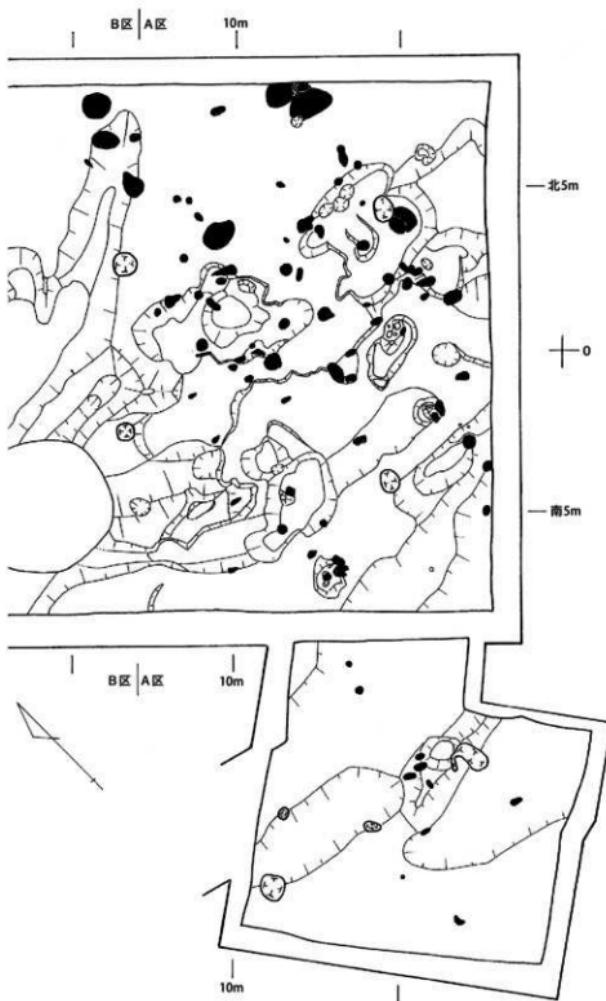
今回検出したピットの中には平面形が細長い楕円形から三角形状を呈したものが比較的多く特徴的にみられた。おそらくは杭を斜めに打ち込んだ痕跡か、あるいは打ち込まれていた杭が水流等の横方向からの力で抜けたことによる形状ではないかと考えられ、これについては人為的に形成されたピットであろうと考えられる。また、ピットの中にはその底面下端が斜め方向に入り込むものがあり、これについては木51のように斜め方向に打ち込まれた杭跡の痕跡であろうと考えられる。そして、A区で検出された斜め方向に底面下端が入るピットでもっとも浅いものの底面レベルがO.P.-1.45mであり、E区では三角形状のピットの底面レベルがO.P.-1.3mを測った。

また、ここで示したピットには底面の深さがO.P.-2m以深のものが7基、O.P.-1.7~-1.9m台のものが36基あった。これらピットの埋土は河川堆積物と同じ砂を基本としていたことから、これらが杭跡であると想定すると、杭が抜けた後に河川堆積物がそこを埋めてしまったものと考えられる。そして、底面レベルがO.P.-2mとなるようなピットについては涌水があり、その底面を見極めることが難しい状況であった。打ち込まれていた木1・木50などは杭の尖端部のレベルがO.P.-2.4m以深となることから、ピットの中には本来さらに深くなるものもあった可能性が考えられる。

さて、これらのピット、そして打ち込まれた杭である木1・木50・木51も含めて平面的にその並びをみると、明確に構造物を構成できるまでの並びは復元できなかったが、川の流れの方向が想定される東西方向に直交する形で、概ね南北方向にピットの大きな並びがあり、川の流れに沿う東西方向にもピットの並びがあることが見て取れる。今回の調査範囲において明確な

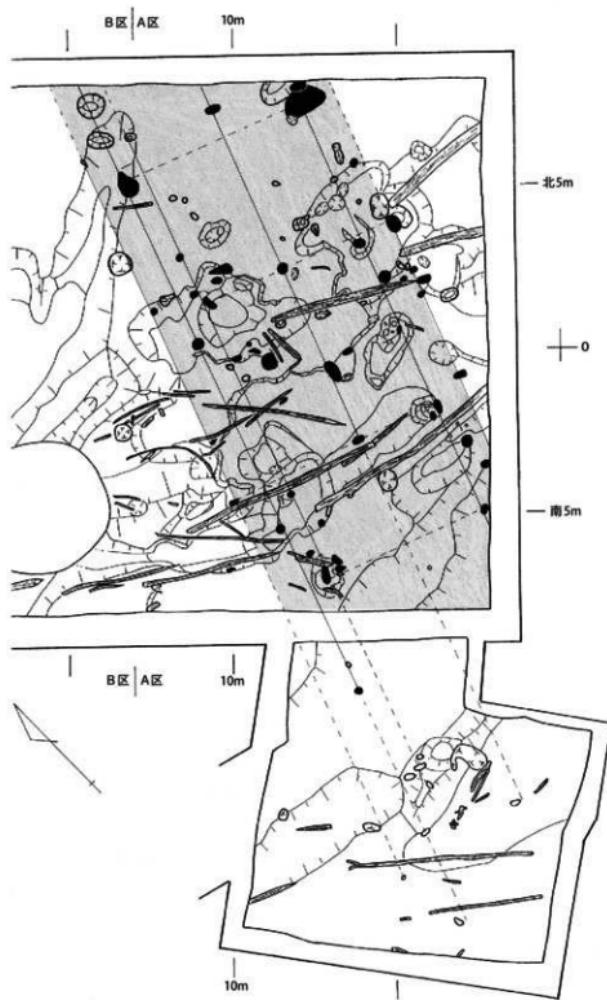
第13圖 遺構平面圖（木坑檢出狀況）





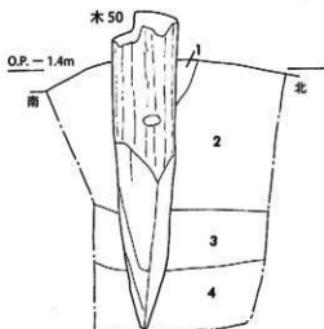
注) ピット : 黒塗り部分 (木1、木50含む)

第 14 図 調査区東側ピット検出状況



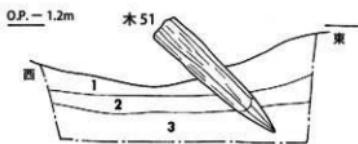
注) ピット底が O.P. - 1.7m 以深のものを黒塗りで示す。(木 1、木 50 含む)

第 15 図 調査区東側ピットの方向性



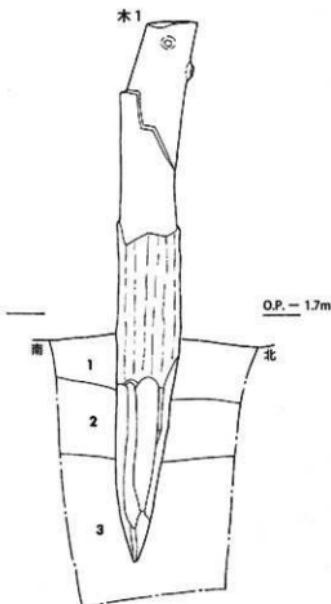
(木 50 土層)

1. 淡黄色細砂
2. 暗灰色砂質シルト (粗い)
3. 暗灰色砂質シルト
4. 暗灰色粘質シルト



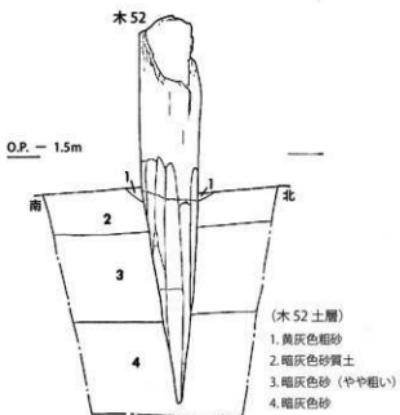
(木 51 土層)

1. 暗灰色砂質シルト (粗い)
2. 暗灰色砂質シルトに青灰色砂質シルトがブロック状に多く混じる
3. 暗灰色砂質シルト



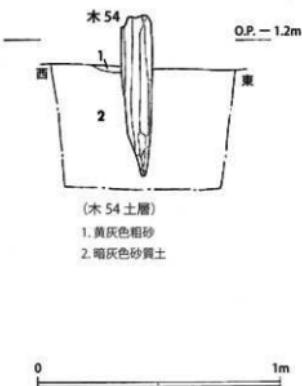
(木 1 土層)

1. 暗灰色砂質シルト (粗い)
2. 暗灰色砂質シルト
3. 暗灰色粘質シルト



(木 52 土層)

1. 黄灰色粗砂
2. 暗灰色砂質土
3. 暗灰色砂 (やや粗い)
4. 暗灰色砂



(木 54 土層)

1. 黄灰色粗砂
2. 暗灰色砂質土

第 16 図 木杭実測図

構造物を復元できる並びまでは確認できなかったが、川の流れの方向に関連するであろうピットの並び、深く打ち込まれた杭、そして、3～6mといった長い杭、またほど加工された杭などの存在は、調査区を含むこの近隣に何らかの構造物があったことはほぼ確実であるといえ、河川との関連で考えると、橋や桟橋等の構築物があったのではないかと想定できる。ただし、これらの杭やピットの時期については判断する資料に欠いており、現段階では明確にできていない。

【土器・瓦・礫等検出状況】

前述の杭と同様に、川床面付近を中心に多数の遺物を検出した。出土遺物は弥生時代から室町時代にかけての時代幅の広いものであったが、飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が多数を占め、次いで平安時代のものが多かった。

その出土状況をみると、川床面に接して古代の遺物が多数まとまって出土する状況であったが、古代の遺物を取り上げると、その下から中世の遺物が出土するなど、時代の異なる遺物が混在する状況がみられた。これは、時期の異なる遺物が川の水流によって流されていく過程で混在していくものもあると思われるが、出土遺物には長い距離を流されてきたとは想定しにくい大型の須恵器甕・壺、瓦などが多数あり、さらに欠損のない完形品がまとまって多く出土した。このことから、すべてが流されてきた結果であるとは考えにくい側面がある。特に、調査区東側にあたるA区・E区においては、飛鳥時代から奈良時代の遺物がまとまった範囲で出土していることから、これら古代の遺物については原位置からそれほど離れず埋没し、河川堆積物に覆われていったものが多いと考えられる。おそらくは、大雨などで強い水流があるような状況下において、重量の軽い遺物（例えば土師器皿など）が水流によって古い時期に堆積していた遺物の下にえぐり込み埋没してしまった状況のものが多くあるのではないかと考えられる。以下に、各区画での遺物の検出状況の概要をまとめてみる。

[A区]

A区では、飛鳥時代から奈良時代の遺物がまとまった状況で検出された。特に須恵器の甕や壺、瓦の出土量が際立って目を引いた。例えば、高さ40cmを超えるような須恵器甕で残存状態の良好なものについては20点出土した。また、瓦については、ほぼ完形の軒丸瓦が2点出土したのをはじめ、完形あるいは完形近くまで復元できた丸瓦が7点、平瓦が33点あり、破片では遺物収納コンテナ箱で50箱以上を数えた。このように、須恵器・瓦の出土が目立ったが、当該期の遺物では土師器の壺や甕なども良好な残存状態で数多く出土した。

また、A区では土器・瓦のほか、金属器・木製品も多数出土したが、A2区南東隅付近では和同開珎が18点まとまって検出された。これは河川堆積物掘削中に認められたが、当初5点の和同開珎が掘削土中に認められ、改めてその掘削箇所を確認したところ、和同開珎が7点と6点それぞれ束ねられたように縦方向に積まれて並んでいる状態のものを検出した。癒着したも



第17図 遺構・遺物検出状況(A区・B区東側)

のもあり、おそらく最初の5点も本来はどちらかに密着していたものと考えられる。さらに、A区中央の木11西端付近では木11下の河川堆積物を掘削していたところ、和同開珎1点、萬年通寶4点、神功開寶23点がまとまって出土した。こちらについては癒着したものは認められず、個々ばらばらの状態で出土した。そして、錢貨が出土した木11西端部付近からは鉄柄付銅釣が検出され、この付近においてはやや特異な遺物がまとまって検出された。

この他、今回の調査では、こぶし大から数十cm大で大きいものでは重さ40kg以上の礫が多数検出された。A区においては3か所で礫がまとまった状況で認められた。五反島遺跡は平野部下流域に位置しており、数十cm大の礫が自然堆積物として上流から流れてきたとは考えられないが、奥田尚氏の分析（第4章第1節）により、これらの礫が各地から運搬されてきたことが判明した。その運搬されてきた理由については、礫自体を必要としたのか、あるいは船のバラスト^(注)のように副次的に運ばれてきたものが遺棄されたという可能性が考えられるが、明確にはわからない。杭やピット等との関連を勘案すると、護岸に使用するためのものという可能性も考えられる。また、この礫自体が運ばれてきた時期を特定することは難しい。

（注）奥田尚氏のご教示による。

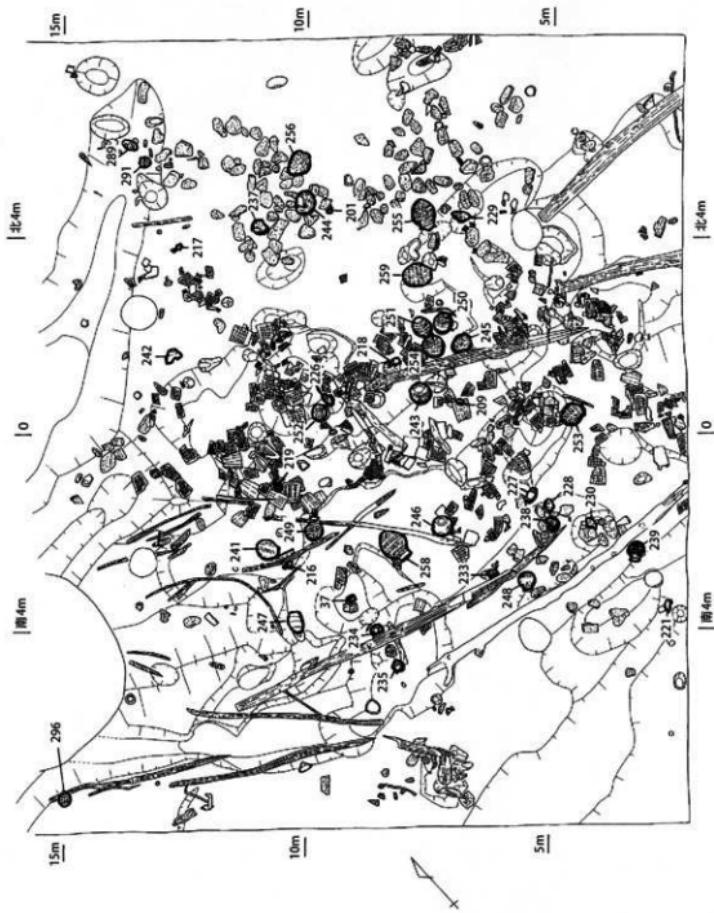
[B区]

B区では、C区とD区においても同様であるが、遺物の密集度はA区と比べて薄くなり、A区で出土したような須恵器甕・壺などの出土点数は少なものであった。例えば、高さ40cmを超えるような須恵器の甕は、確認調査時にB2区に設定した調査坑（G2区）から出土した1点のみであった。しかし、出土遺物全体をみると、A区と比較して小型のものが多くなるが、残存状態の良好なものは多くあった。

B区での特徴的な遺物の検出状況をあげると、まず、B1区の平坦部上において、鎌身から茎まで長さがもっとも残りの良いもので約47cmある長身の鉄鎌がまとめて検出されたことである。これらの多くは矢柄の木質部を残し、平面図上に図化できたものでおおよそ35点あった。そして、この長身タイプの鉄鎌については他の区画からも出土しており、鎌身を残し同様の長身タイプのものと考えられるものが58点あったが、そのうちB1区においては48点出土し、B1区に集中していた。このことから、この長身タイプの鉄鎌はある程度まとめられた状態にあって、それがB1区付近で埋没してしまったものと考えられる。

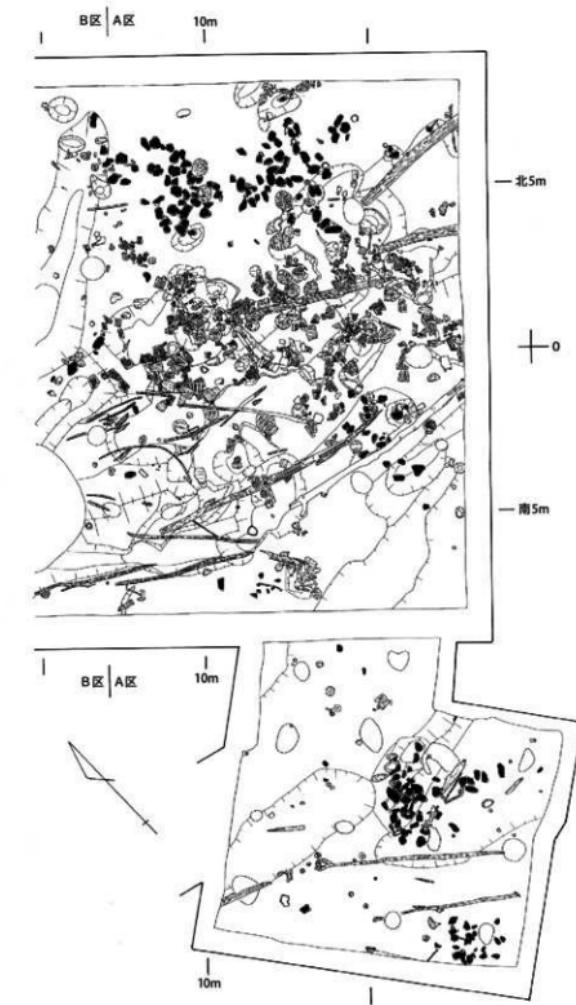
この他、B区で特徴的な状況としては、確認調査坑（G2区）において木製柄から鉄製刃先までがほとんど完存に近い状態で残る鋤が検出されたことがあげられる。さらに、同じくG2区からは柄は遺存していないものの鉄製鋤も出土し、狭い範囲で鉄製刃をもつ鋤・鋤が検出されている。

第18図 A区・B区東側遺物番号对照図（須惠器）



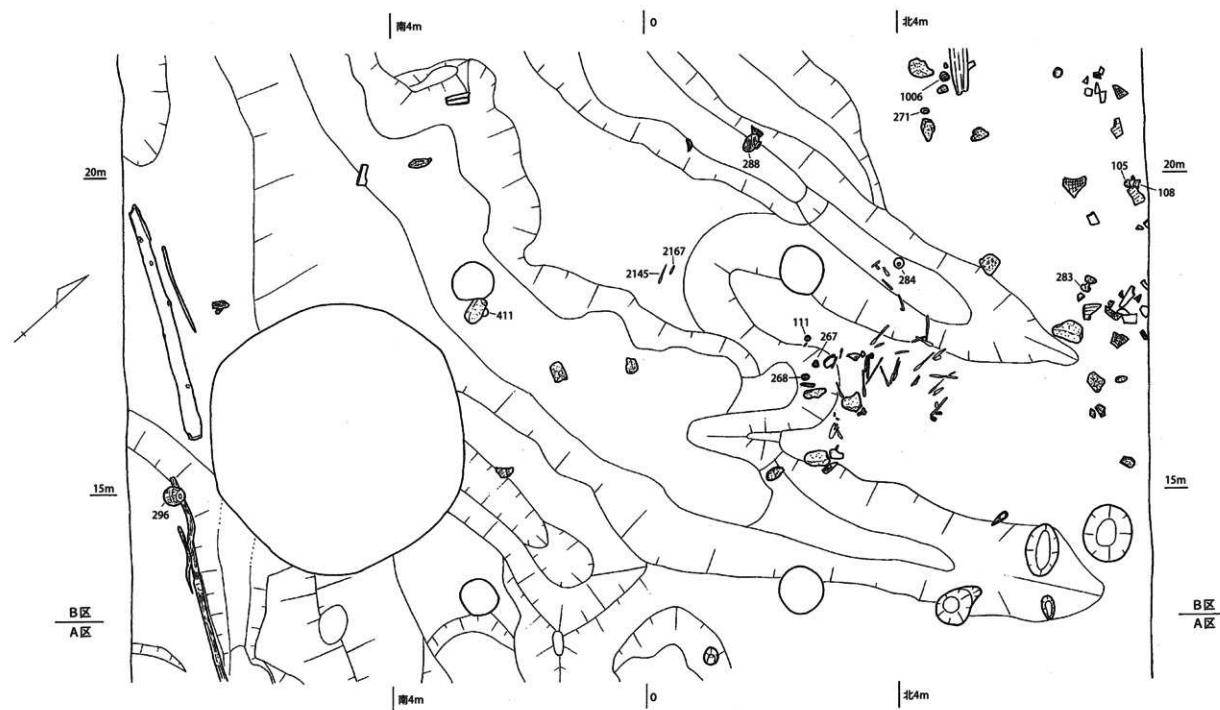
第19図 A区・B区東側遺物番号对照図（土師器・瓦・金属器等）



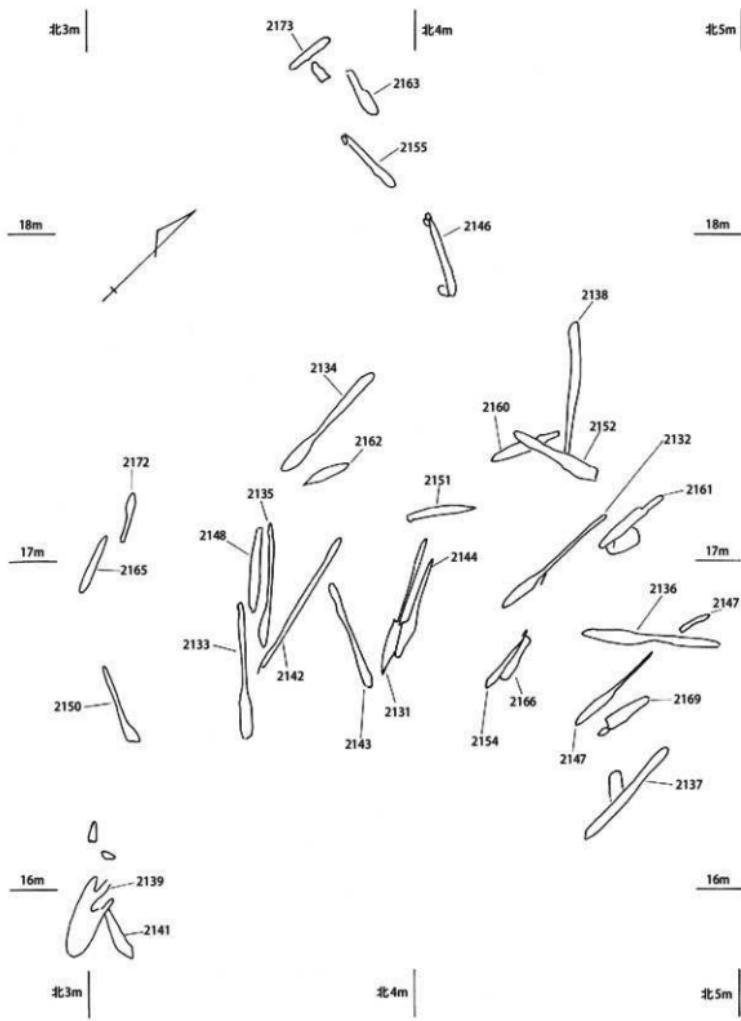


注) 確: 黒塗り部分

第 20 図 調査区東側礫検出状況



第21図 遺構・遺物検出状況（B区）



第22図 B1区鉄鏃遺物番号対照図

[C 区]

C 区では、ほど加工が施された木 44 周辺の平坦部で、比較的小型の遺物が溜まるように出土した。特に、この付近では墨書き土器が比較的まとまって出土した。今回の調査では墨痕の可能性をもつものを含めて墨書き土器関連資料が 22 点出土したが、そのうち 15 点が C 区からの出土であった (C1 区 : 12 点、C2 区 3 点)。これらの墨書き土器については概ね奈良時代から平安時代のものと考えられるが、他の出土遺物についても含めてみると、明確に比率を示すことはできないが、A 区・B 区と比較して平安時代にかかるやや時代の下る遺物の割合が増した感がある。

なお、須恵器の甕についても大型のもので図化できたのは 2 点のみと、須恵器の出土量も比して少なかった。

[D 区]

D 区での遺物出土量は、前記の 3 調査区に比較して少ないものであった。また、C 区と同様に時期相もやや下るもの割合が増す感がある。

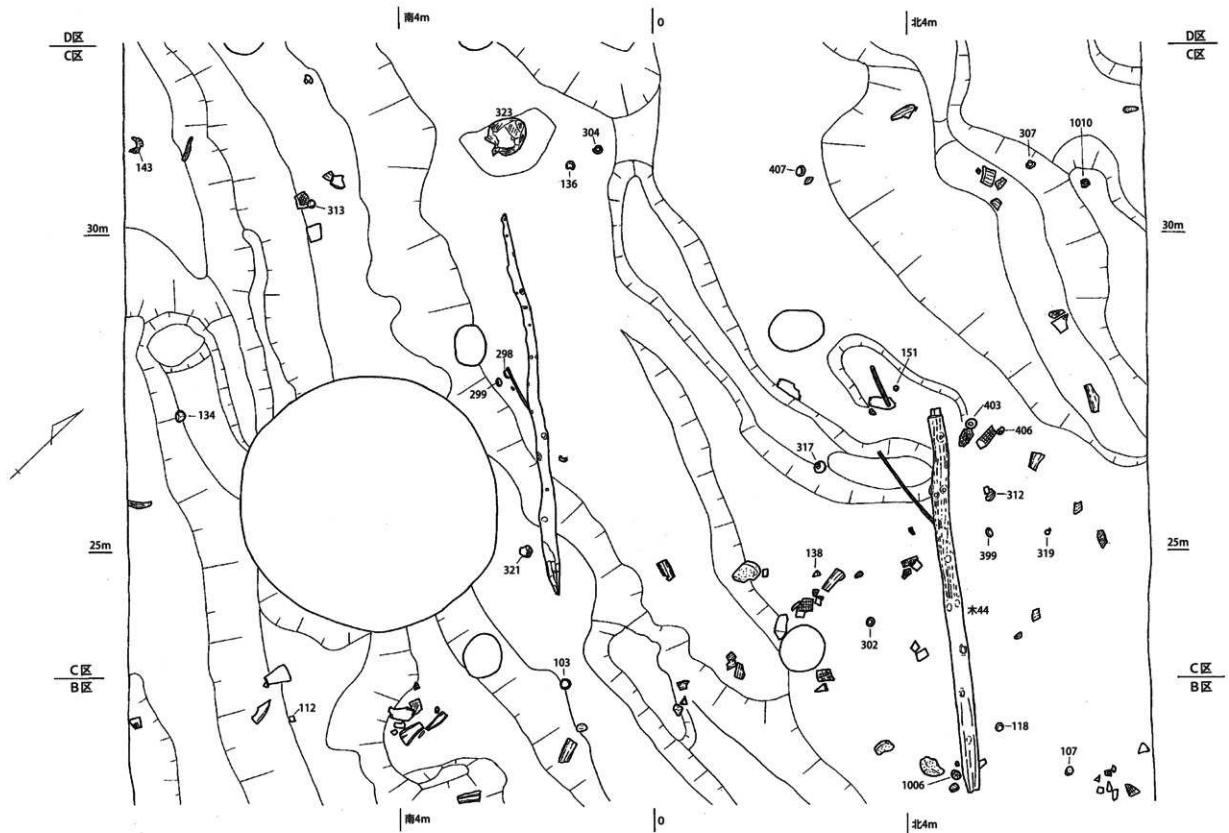
ここで検出された特徴的な遺物としては、人の頭蓋骨が 2 点出土したことがあげられる。D1 区と D2 区でそれぞれやや離れた位置で検出された。そのうち D1 区で検出された頭蓋骨 (骨 5) には脳が残存していた。今回の調査では骨資料が 70 点以上確認できたが、安部みき子氏の分析 (第 4 章第 2 節) によると、牛・馬、そして人の骨が多くを占めていた。

[E 区・F 区・G 区]

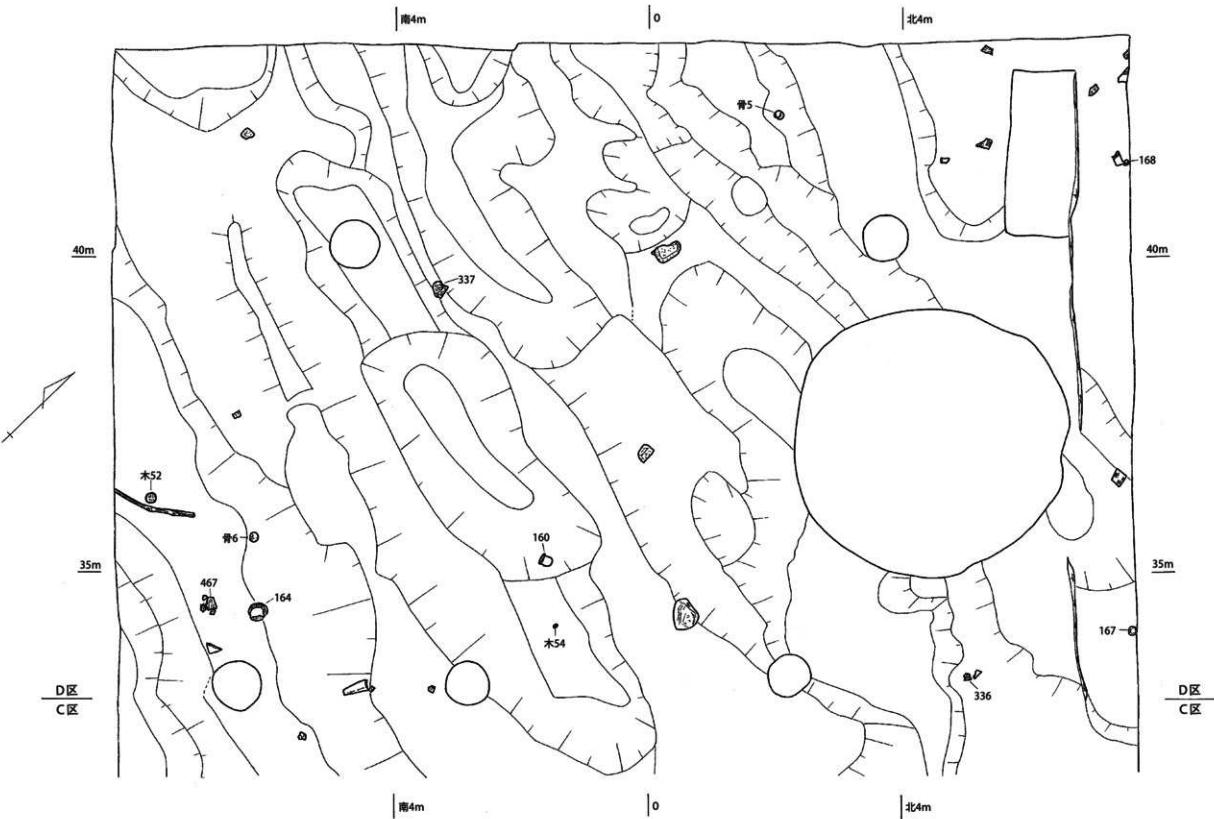
管路・人孔部の調査区での遺物検出状況であるが、F 区・G 区については、調査面積が狭小であったこともあり、遺物の出土量はそれほど多くなかったが、G 区では大型の砥石が 2 点まとめて検出された。

E 区については、A 区の南側に当たり、調査面積に比して多くの遺物が検出された。須恵器の大型甕の出土はなく、瓦の出土も少なかったが、ここでは残存状態の良好な須恵器短頸壺が 15 点まとめて出土し、長頸壺も 4 点検出された。また、A 区でみられたような礫のまとまりが 2 か所認められた。

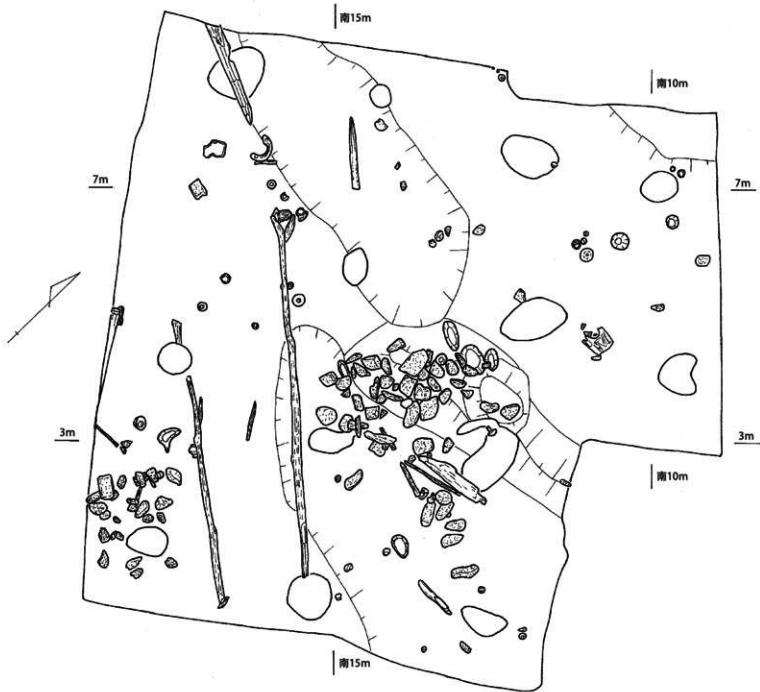
なお、今回の調査では卒塔婆が明確なもので 5 点出土したが、E 区・F 区では欠損しているものの、薄片の卒塔婆が 3 点検出され、そのうち 2 点については室町時代の「文明」という年号 (1469~87 年) が記されていた。



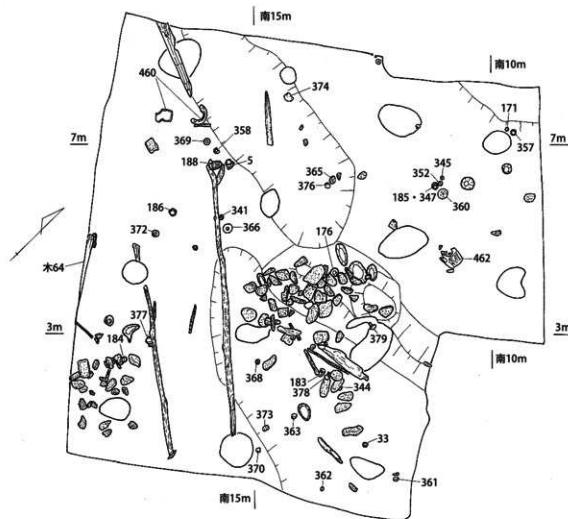
第23図 遺構・遺物検出状況 (C区・B区西侧)



第24図 遺構・遺物検出状況 (D区)



第25図 遺構・遺物検出状況（E区）



第26図 E区遺物番号对照図

(3) 出土遺物

前述したように、各調査区においては出土量の差はあるものの、河川堆積物である砂層中から様々な遺物が出土した。その時代幅は広く、時期の異なる遺物が混在する状況がみられた。そして、土層序の節でも述べたように、複雑な堆積状況をもつ河川堆積物を分層する過程で、土層ごとの時期や一体的まとまりをとらえることは困難であった。そのため、今回の調査では層位ごとに掘削を行って遺物を収集することはできなかった。

このように、遺物を層位的に取り上げることが困難であったことと、異なる時期の遺物が混在していたことなどによって、残存状態の良好な遺物はたいへん多くあったものの、單一層内からの出土遺物のように、資料の時代的一括性という点ではやや希薄な側面があったといえる。そのため、時代によって形態変化の少ない遺物、例えば須恵器甕や壺などについては、その時期を明確に判断しがたいものもあった。

本節では、出土遺物を報告するにあたってある程度の時代枠で括ってまとめたが、細かい時代枠に当てはめることが難しい遺物も多く、特に、古墳時代から平安時代にかけての土師器・須恵器については厳密に時代を線引きして当てはめることが難しいもの多かった。そのため、本節では古墳時代を概ね 6世紀代までのものとしてまとめ、それ以降については、飛鳥時代から平安時代という長い時代の枠組みをもってまとめる結果となった。

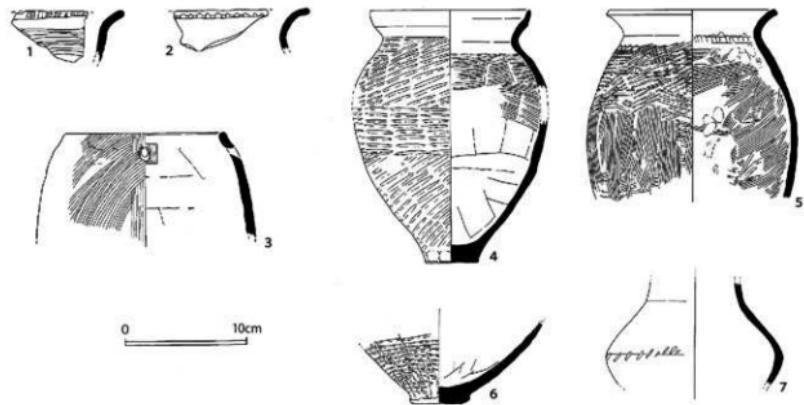
なお、文中・遺物観察表中においては報告者による遺物の年代観を示したが、これも大枠にならざるを得ない側面が多くあった。また、年代観を示すにあたっては個々の遺物の形態観察によったが、調査においては、須恵器の短頸壺、長頸壺などある種類の遺物がまとまって出土する状況が認められ、時代的一括性をもつた一群であると考えられるものもあった。しかし、個々の形態だけをみると、多少の時代差をもって年代観をとらえられるものもあった。これについては、時代的一括性をもつ一群の中での単なる形態差なのか、あるいは時代差のあるものがたまたま一群となって出土したのかなどいくつかの可能性が考えられるが、ここでは今後の検討課題であるということを踏まえつつ、一応年代観を示すことにした。

【弥生土器：弥生時代】

弥生土器は出土量が少なく、図化できるものは多くなかった。1・2は口縁端部に刻み目が施された甕片である。1は残存部で 5条の沈線が認められ、弥生時代前期のものと考えられる。2は弥生時代前期もしくは中期のものであろう。3は無頸壺である。中期のものとみられる。4～6は甕であり、いずれもタタキ調整されているが、5については下位部にハケ調整が認められる。7は長頸壺の体部部分であり、刺突文が施されている。

【土師器：古墳時代】

8～21は壺・甕である。8～11は直口壺で、8～10には密なヘラミガキが施されている。11



1:D1区、2:F区、3:B2区、4・6:A1区、5:E区、7:C1区

第27図 弥生土器

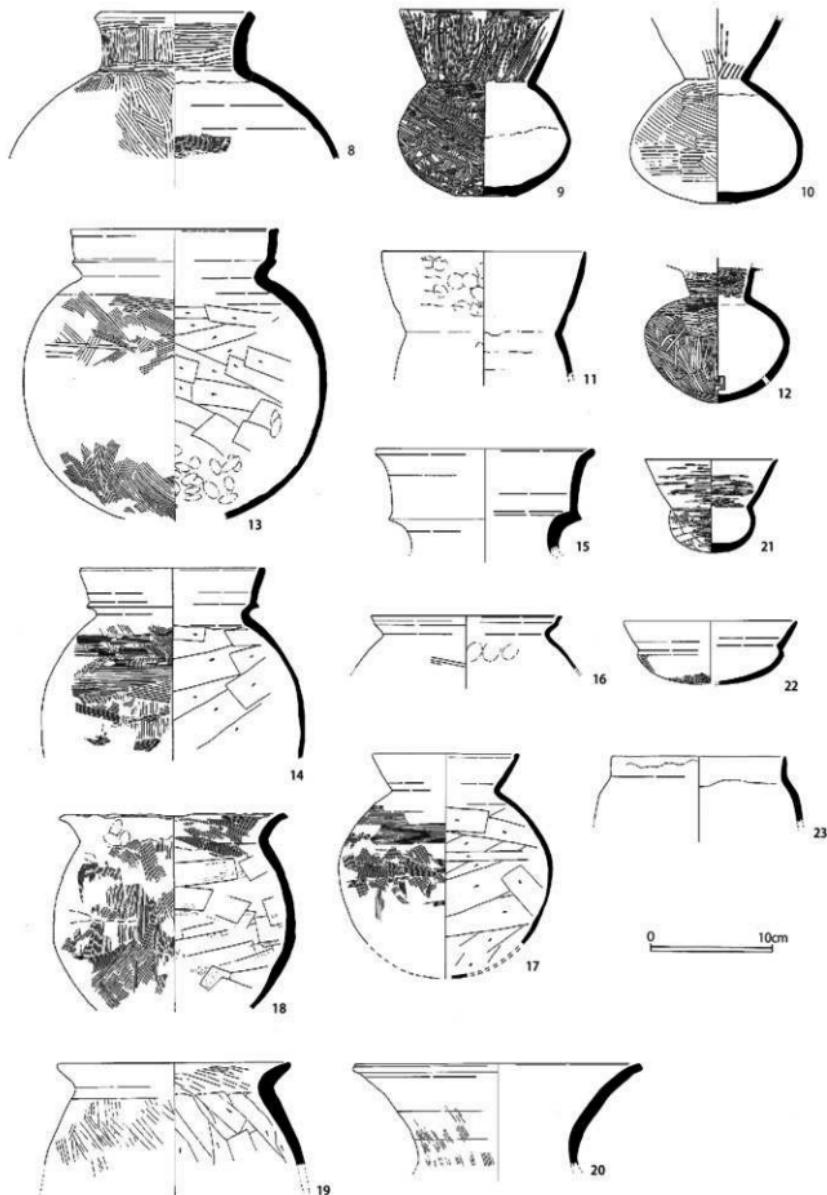
については指オサエとナデ調整により、やや粗雑な作りとなっている。12は小型の広口壺である。口縁部は欠損しているが、精緻なヘラミガキが施されている。体部下部に径約5mmの孔が穿たれている。また20も広口壺であるが、口縁部のみが残る。13～15は二重口縁をもつものである。16は摩耗で調整が不明瞭であるが、東海系の甕である。17は布留式甕である。18は口縁端部がゆるやかに波状にゆがみ、やや粗雑な調整による。19は器壁が厚ぼったい甕であるが、外面はハケ調整・ナデ、内面はヘラケズリされている。21は小型丸底壺である。ヘラミガキが施されているが、体部外面にはヘラケズリ・ハケ調整の痕跡も残る。

22は浅鉢である。体部外面はハケ調整で、ヘラミガキは認められない。23は鉢か壺の破片を図化したもので、全体的にナデ調整されているようであるが、体部外面の摩耗が激しく調整は不明瞭である。なお、23と11の壺については製塩土器の可能性もある。28・29についても鉢である。この2点は調整から古墳時代のものではないかと考えられるが、時期が少し下る可能性もある。

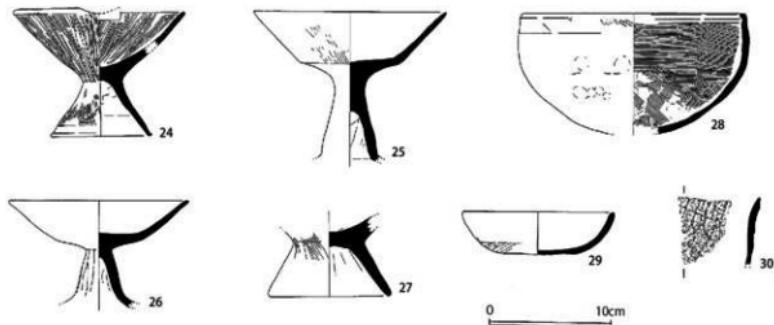
24～26は高坏である。24はヘラミガキが密に施された坏部に注口部をもつ。27は脚台付きの甕か鉢の脚台部である。30は格子目タタキ痕をもつ土器片である。内面はナデ調整されており、韓式系土器の鉢片である可能性が考えられる。

【須恵器：古墳時代】

31～33は坏蓋である。31は退化傾向にある稜がみられるが、32・33に稜は残らない。34は高坏蓋、35は坏身である。36は壺である。体部内面は回転ナデされており、当て具痕は痕跡が残る程度である。37は提瓶である。鉤状の把手をもつ。

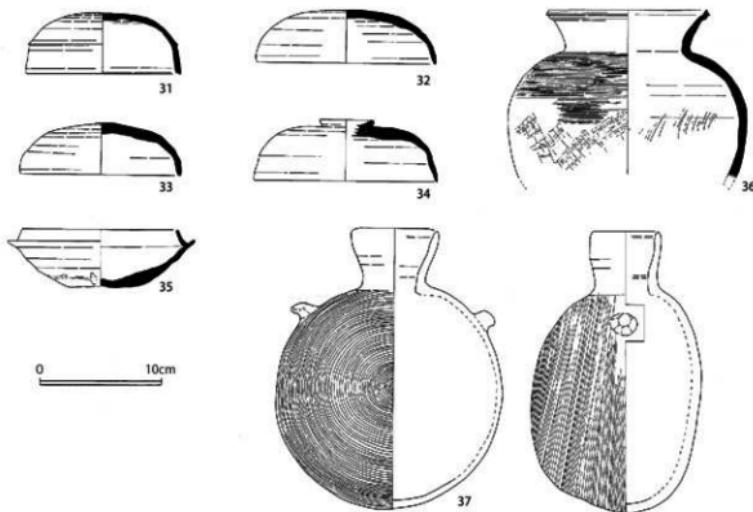


第28図 土師器（古墳時代）①



9・10・21:A1区、8・11:A2区、29:A区、16・17・28:B1区、20:B2区
15:C1区、12・13・18・26・27:C2区、14・25:D1区、22:D2区、23・24・30:E区、19:G区

第29図 土師器（古墳時代）②



31・32・35・36・37:A2区、33:E区、34:G区

第30図 須恵器（古墳時代）

【土師器：飛鳥～平安時代】

【A区出土】

38・40～43・45～48は7世紀から8世紀初頭頃のものと考えられる壺である。38・40は内面に2段の暗文があり、40には底部内面に螺旋状暗文が施されている。38については底部内面に煤が付着し、その部分の調整・暗文の有無は不明である。43・46については、内面の付着物により暗文の有無は不明であるが、他の壺については放射状暗文が認められ、41・42には底部に螺旋状暗文が施されている。

39は鉢である。外面は指オサエとナデ調整、内面はハケ調整とヨコナデによっており、やや粗雑な作りであるが、外面に粗いヘラミガキ、内面に粗い縦方向の暗文が施されている。7世紀の所産であろうか。

44・64は高壺である。44は壺部であり、内面に放射状暗文が施されている。64は脚部であり、高さは低く、14面の面取りがなされている。44は7世紀、64は8世紀のものと考えられる。

49～52はやや大型の皿である。50～52は8世紀中頃までのものとみられるが、49は若干時期が遡ると考えられる。50・51は底部内面に螺旋状暗文が施されている。また、49・51には意図的なものかどうかはわからないが、底部内面に細い線刻が認められる。

53～61は8世紀中頃から9世紀初頭にかけてのものと考えられる壺・皿である。53～55・58には暗文が施されている。58については放射状暗文ではなく、底部内面に螺旋状暗文のみが施されている。59は底部外側に線刻が認められる。

62・63は蓋である。天井部内面には暗文が施されている。8世紀前半の所産であろう。

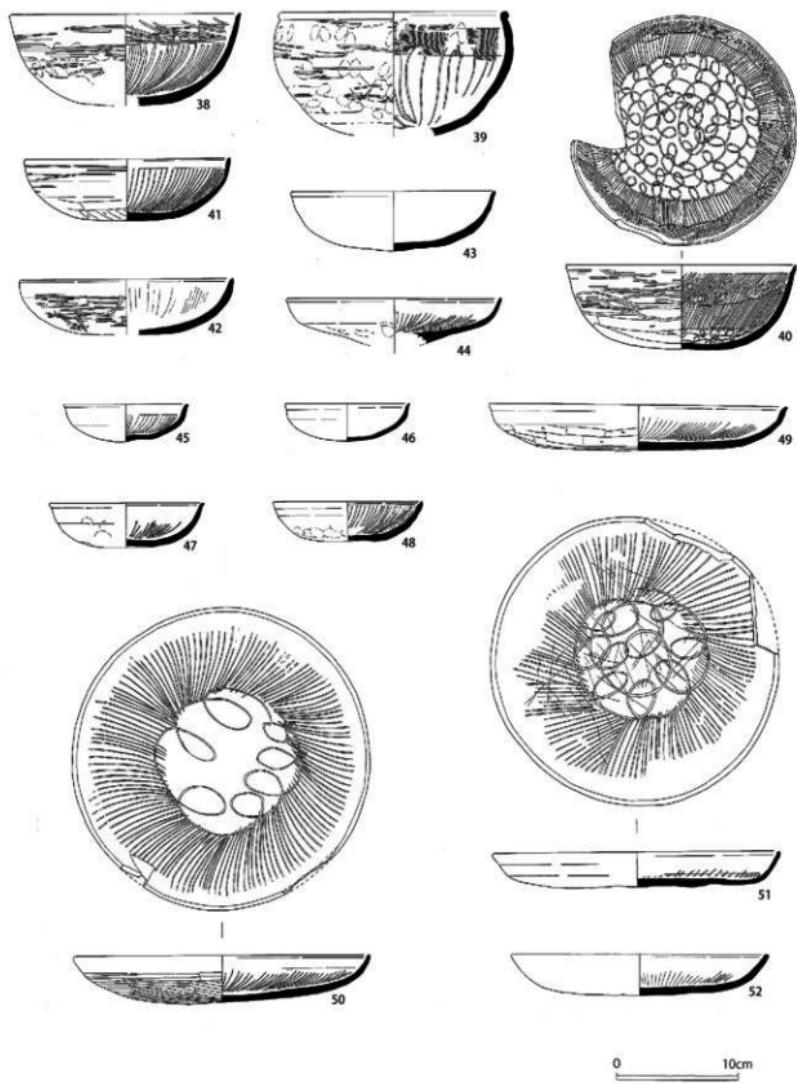
65は甌である。残存部から半月孔タイプの蒸気孔をもつとみられ、6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと考えられる。

66～69・84は鉢である。66は7世紀後半、他は8世紀のものと考えられる。69は注口部をもつものである。

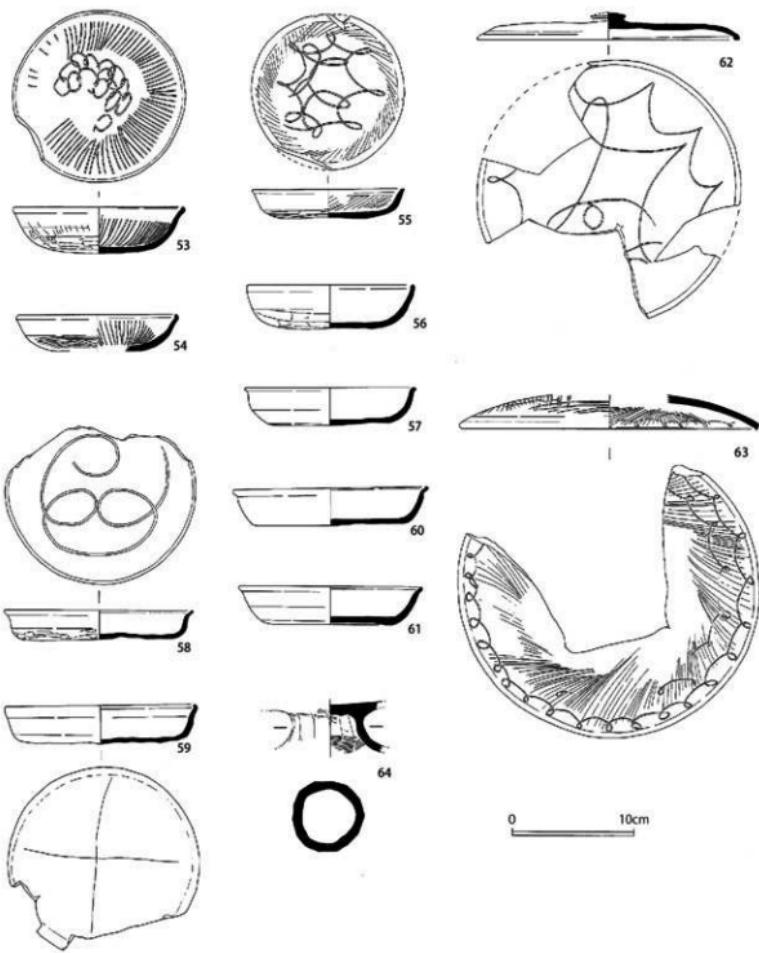
70～82は甌である。72～75・79はやや時期が遡るかもしれないが、概ね8世紀のものと考えられる。

83は羽釜である。外側に開く口縁部をもつ。8世紀の所産であろう。

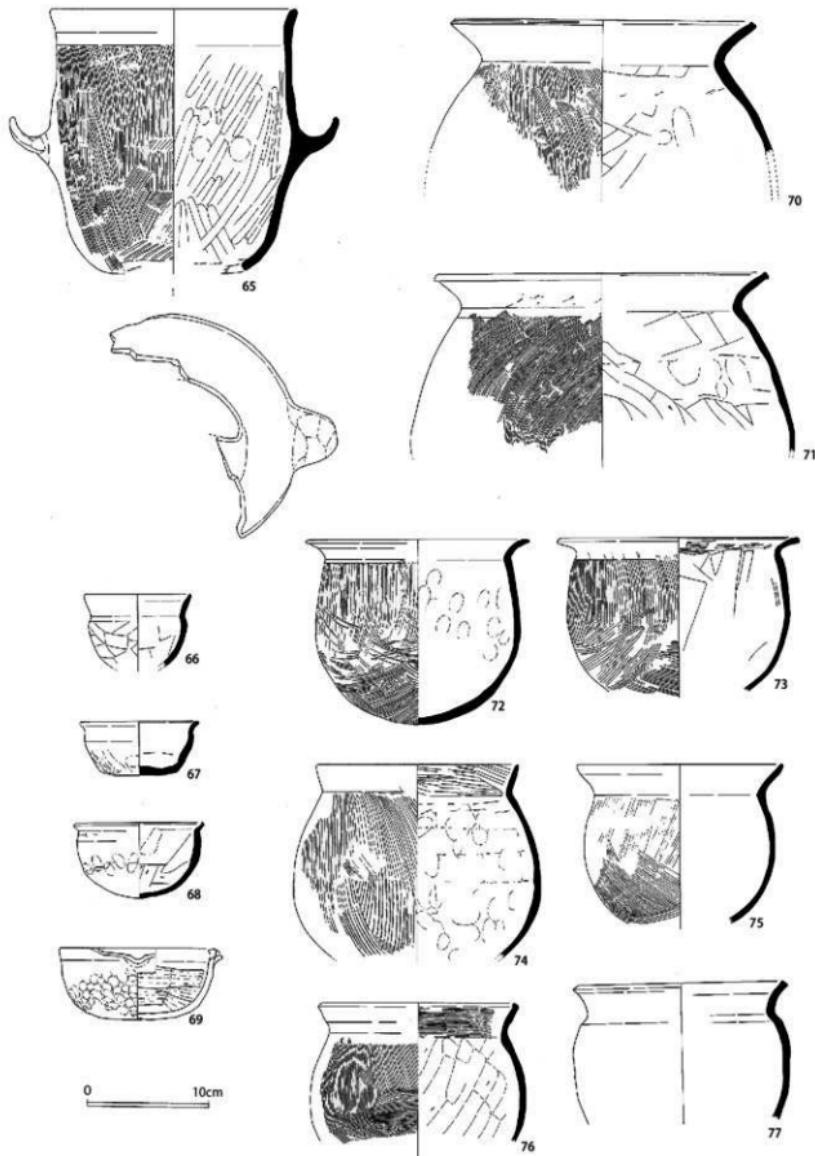
85～99は平安時代に属する皿・壺・塊である。89は底部外側がヘラケズリされ、口縁部が外反して開くものである。類例が見あたらず、時期の判断が難しいが、胎土・焼成などからみて平安時代のものではないかと考えられる。内面に煤が付着しており、灯明皿の可能性もある。93～98については回転台土師器である。98は底部外側が丁寧にナデ調整されており、糸切りやヘラ切り等の痕跡は残らない。99は塊であり、平安時代後期のものとみているが、もう少し時期が下る可能性もある。



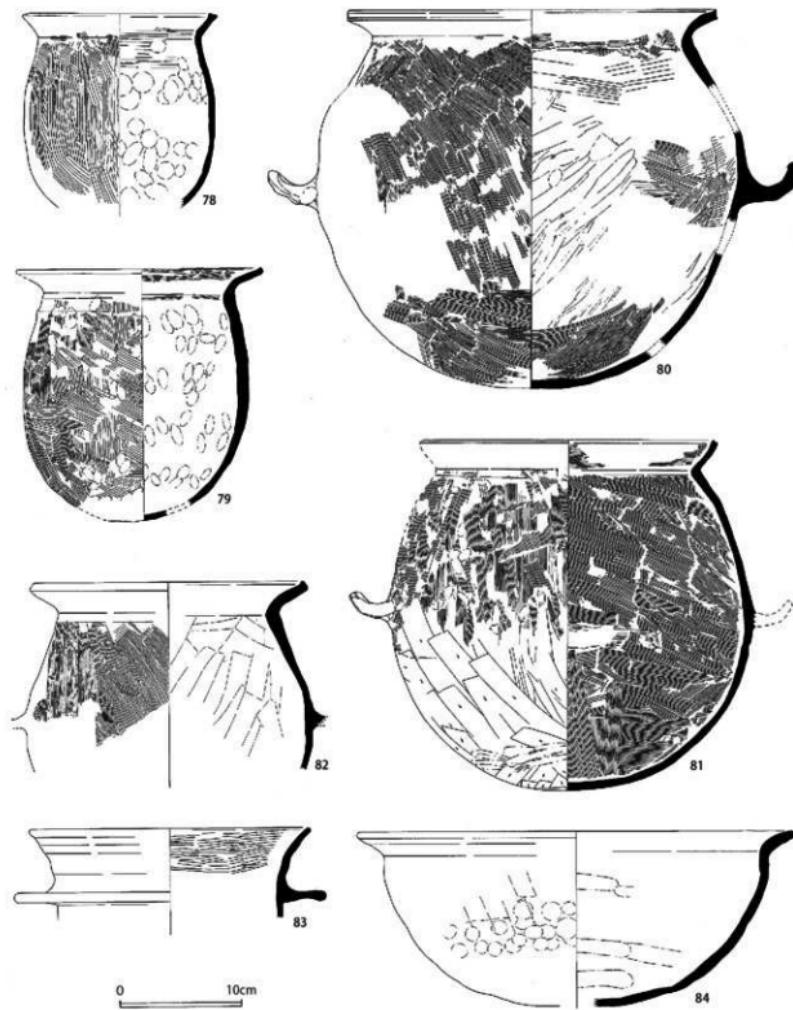
第31図 A区出土土師器（飛鳥～平安時代）①



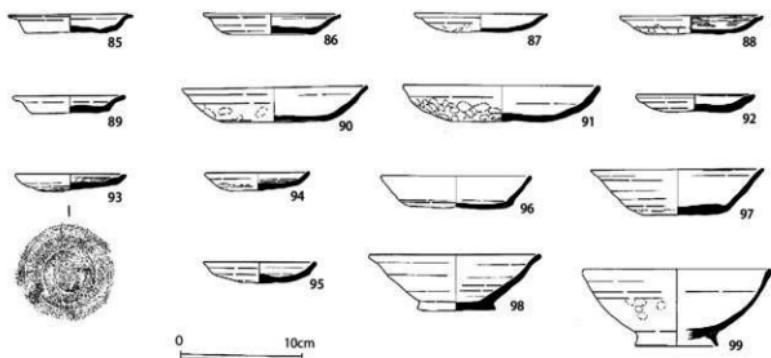
第32図 A区出土土師器（飛鳥～平安時代）②



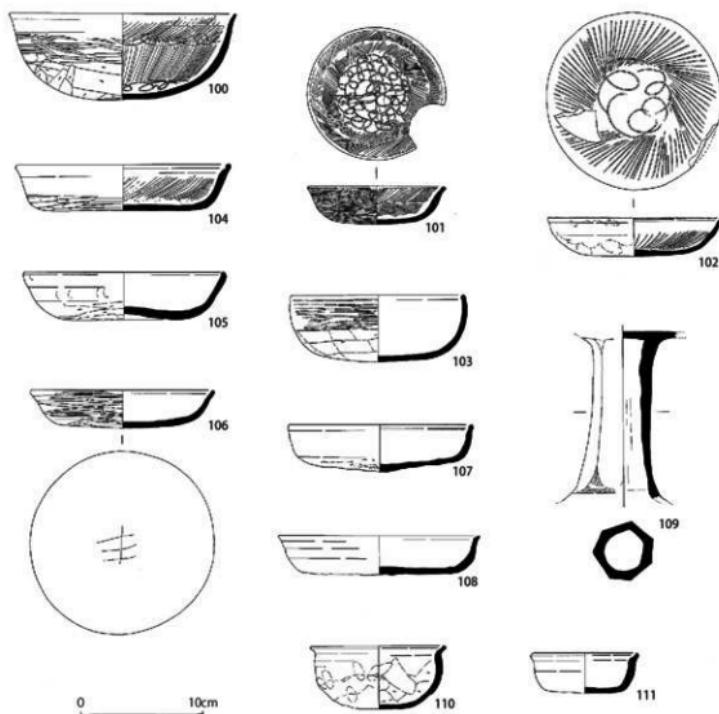
第33図 A区出土土師器（飛鳥～平安時代）③



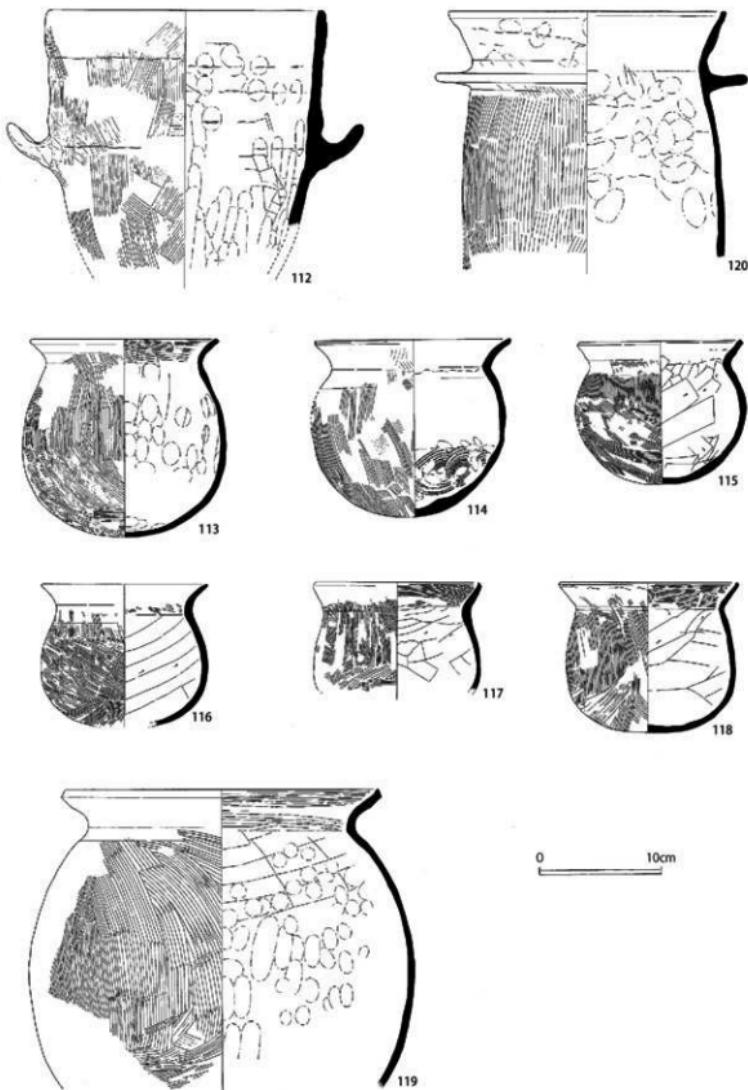
第34図 A区出土土師器（飛鳥～平安時代）④



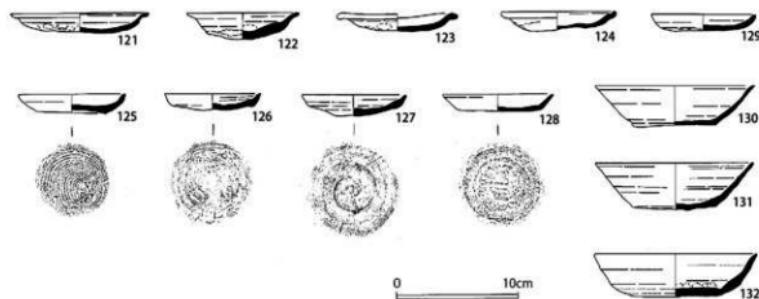
第35図 A区出土土師器（飛鳥～平安時代）⑤



第36図 B区出土土師器（飛鳥～平安時代）①



第37図 B区出土土器（飛鳥～平安時代）②



第38図 B区出土土師器（飛鳥～平安時代）③

[B区出土]

100～108は壺である。100～103は7世紀後半から8世紀初頭にかけてのもので、100・101については2段の暗文と螺旋状暗文が施されている。104は8世紀中頃、105は8世紀中頃から後半にかけてのもので、104については底部内面に螺旋状暗文が認められる。106～108は8世紀末のもので、108についてはもう少し時期が下るかもしれない。106の底部外面には線刻がある。

109は高壺の脚部である。7面の面取りがなされている。わずかに残る壺部底面には暗文が認められる。8世紀の所産である。

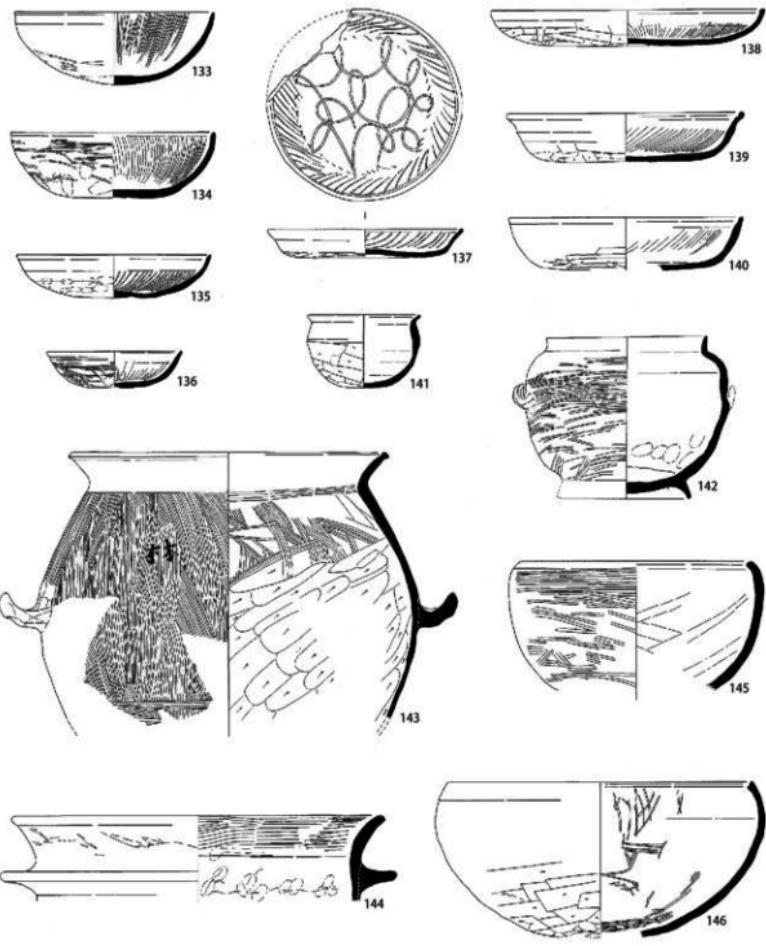
110・111は鉢である。8世紀のものと考えられ、口縁部が短く「く」字状に外側に曲げられたものである。

112は櫃である。底部は欠損しており、蒸気孔の形状は不明である。6世紀後半から7世紀前半のものと考えられる。

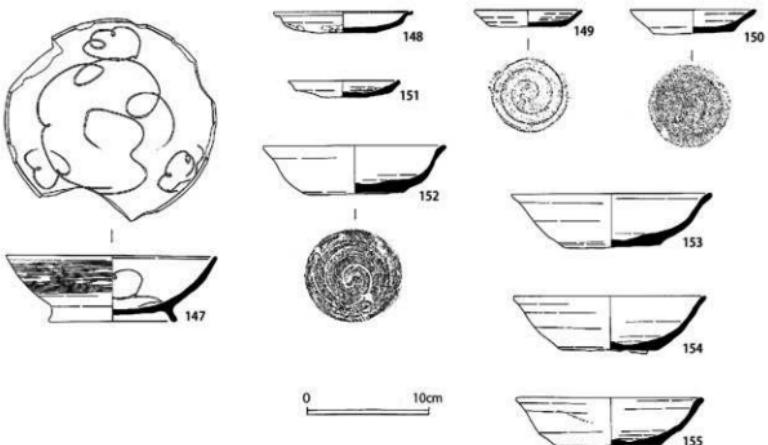
113～119は甕である。113～117は7世紀から8世紀にかけてのもの、118・119は8世紀のものとみられる。114については体部内面に同心円文當て具痕が残る。

120は羽釜である。外側に開く口縁部をもつ。8世紀のものと考えられる。

121～132は平安時代に属する皿・壺である。このうち、125～132は回転台土師器であり、125は底部外面に糸切り痕を残し、他はヘラ切りの痕跡を残す。



第39図 C区出土土師器（飛鳥～平安時代）①



第40図 C区出土土師器（飛鳥～平安時代）②

[C区出土]

133～136は概ね7世紀の壺である。133は全体的に摩耗で調整が不明瞭であるが、内面は縦方向のヘラミガキで調整されており、暗文は認められない。6世紀後半まで時期が遡るかもしれない。134～136は1段の放射状暗文が施され、底部内面に螺旋状暗文は認められない。136については8世紀初頭まで下る可能性がある。

137～140は8世紀中頃から後半にかけての皿・壺である。137・139には底部内面に螺旋状暗文が施されている。

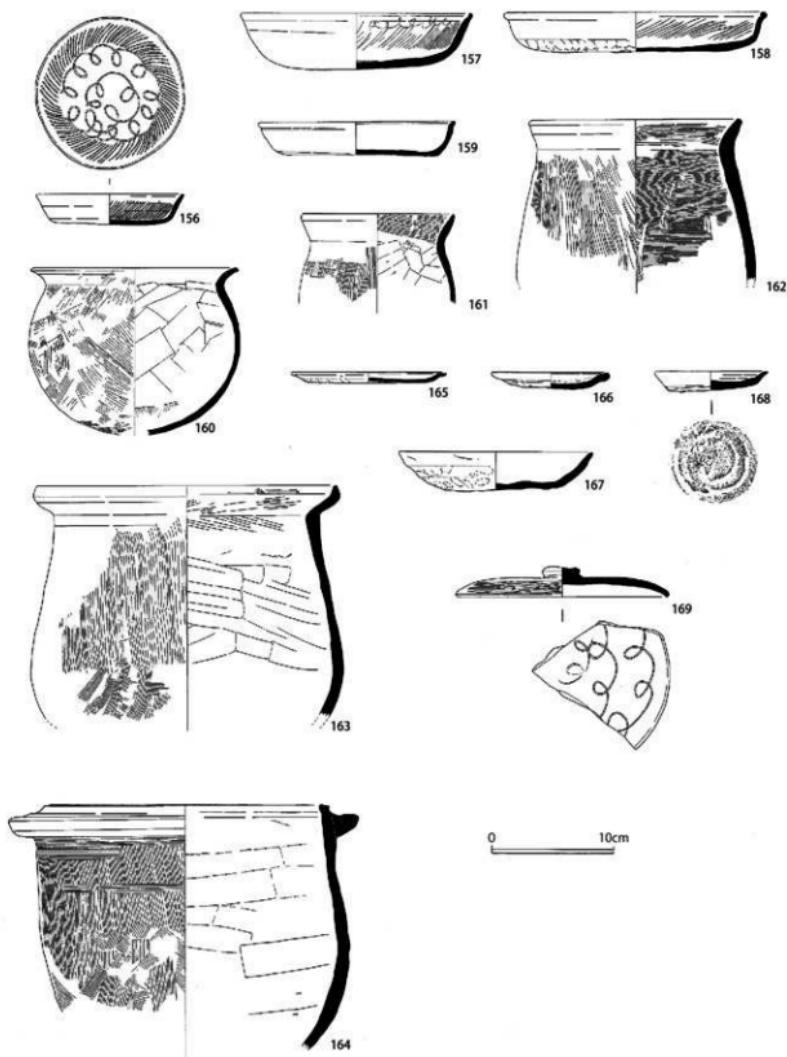
141・145・146は8世紀のものとみられる鉢である。141は口縁部を短く外側へ曲げたものである。145・146は鉄鉢形のものである。

142は短頸壺である。小さな舌状把手をもち、体部外面はヘラミガキで調整されているが、被熱のためか器表面が細かく剥離している。8世紀前半のものだろうか。

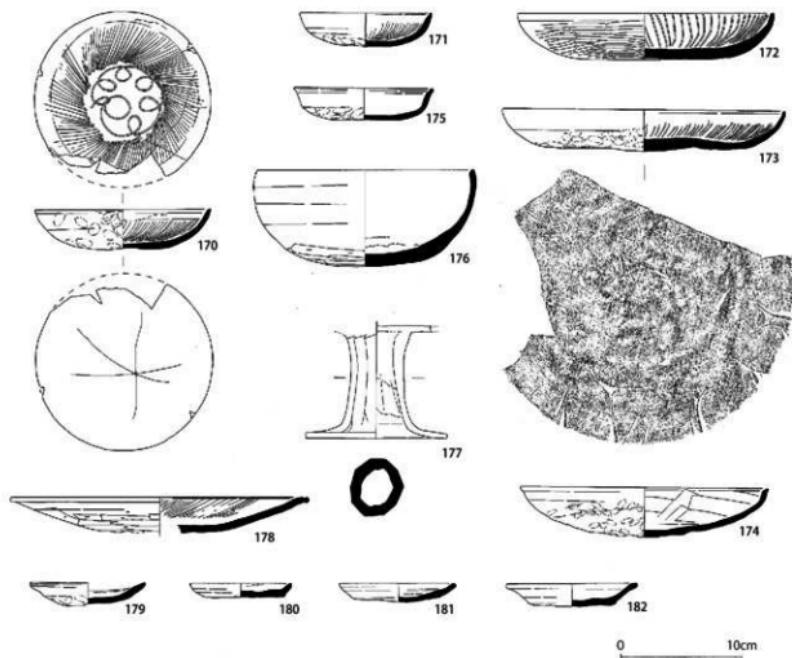
143は甕である。体部に「林」という墨書がある。本来、墨書土器の項目でまとめるべきものだが、本書編集最終段階で墨書が判明したことから、本項目での記載となった。8世紀前半から中頃のものであろう。

144は羽釜である。外側に開く口縁部をもつものである。概ね8世紀のものとみられるが、9世紀にまで下るかもしれない。

147～155は平安時代に属するものである。147は壺である。外面をヘラミガキで整え、内面には暗文が施されている。149～155は回転台土師器であり、すべて底面外面にヘラ切りの痕跡が認められる。



第41図 D区出土・区画不明土師器（飛鳥～平安時代）



第42図 E区出土土師器（飛鳥～平安時代）①

〔D区出土及び滯水池区画不明〕

156・157は8世紀中頃の环である。両者とも底部内面に螺旋状暗文が施されているが、157については付着物で不明瞭である。

158・159は皿で、158は8世紀中頃、159は8世紀末から9世紀初頭にかけてのものと考えられる。158は底部内面に暗文が施されているが、付着物で不明瞭である。

160～163は甕である。160～162は7世紀から8世紀前半にかけてのものとみられ、163は口縁端部が上方にのび、9世紀の所産と考えられる。

164は釜である。いわゆる摂津C型とよばれるもので、10世紀のものであろう。

165～168は平安時代に属する皿である。168は回転台土師器であり、ヘラ切り痕を残すものである。

169は蓋であるが、滞水池調査区内から出土したものの、出土区画が不明であるものである。天井部内面に螺旋状暗文が施されている。8世紀前半のものと考えられる。

[E区出土]

170・171は環である。7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられる。両者とも底部内面に螺旋状暗文が施されており、170については底部外面に線刻が認められる。

172～174は皿である。172は底部内面に螺旋状暗文が認められる。8世紀前半のものとみられる。173は底部外面に複数の線刻があり、植物葉の圧痕かもしれない。8世紀中頃のものであろう。174は作りがやや粗雑であり、外面を指オサ工後に雑なナデによって調整し、内面をヘラ状のものでナデ調整する。7世紀から8世紀のものであろうか。

175は8世紀末から9世紀初頭の环である。

176・189は鉢である。176は体部から口縁部が内傾しながら立ち上がる。8世紀前半から中頃のものと考えられる。189は口縁部が大きく外側に開くものである。体部外面はハケ調整によっており、8世紀のものと考えられるが、口縁部付近にタタキ痕のような痕跡が認められる。

177・178は高环である。177は脚部である。10面の面取りがなされている。8世紀前半から中頃のものであろうか。178は环部である。内面に放射状暗文が施されている。8世紀から9世紀前半にかけてのものである。

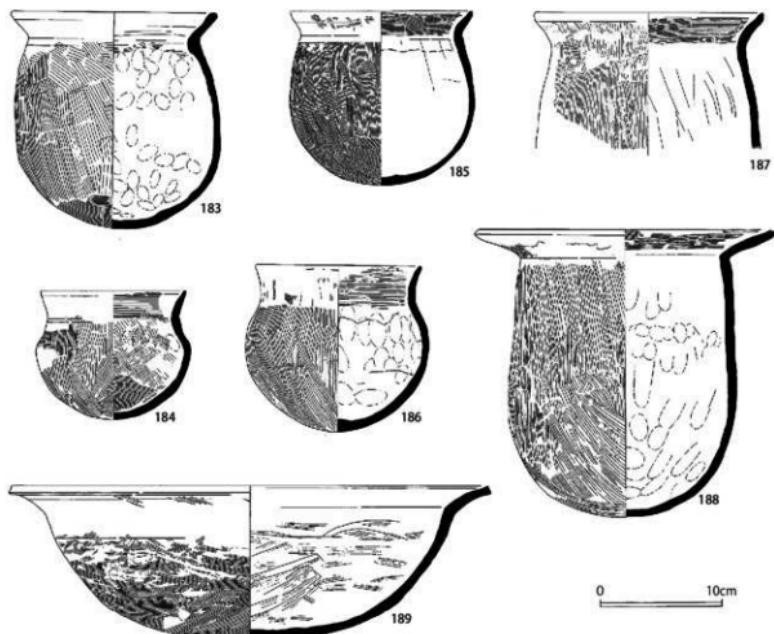
179～182は平安時代の皿である。180～182は回転台土師器であり、底部外面にヘラ切りの痕跡が認められる。

183～188は甕である。183・184は7世紀のものと考えられるが、少し時代が遡るかもしれない。185～187は7世紀から8世紀前半のものであり、188は8世紀前半のものと考えられる。188は体部外面の中央付近を境に下半が煤で覆われており、竈に掛けた痕跡であろうと考えられる。

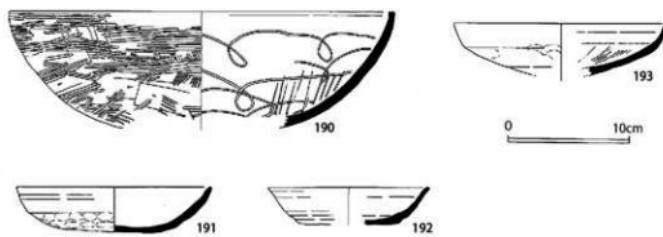
[F区・G区出土]

190～192はF区出土のものである。190は鉢である。内面には口縁部から底部にかけて螺旋状暗文が施されている。外面はヘラミガキにより調整されているが、口縁部付近に縦方向の4本の線刻が認められる。7世紀末から8世紀前半にかけてのものとみられる。191・192は平安時代の皿・环である。192は回転台土師器であり、ヘラ切りの痕跡を残す。

193はG区出土の高环である。环部のみ残るが、内面に放射状暗文が施されている。7世紀のものと考えられる。



第43図 E区出土土師器（飛鳥～平安時代）②



190～192：F区、193：G区

第44図 F区・G区出土土師器（飛鳥～平安時代）

【須恵器：飛鳥～平安時代】

【A区出土】

194～196は7世紀前半の坏蓋である。天井部外面は回転ヘラ切りされており、194は自然釉のため不明であるが、195・196はヘラ切り後に雑なナデ調整がなされている。

197～200は坏身である。197・198は底部外面が回転ヘラ切り後未調整である。199についてはヘラケズリによって整えられている。7世紀中頃から後半にかけてのものであるが、200は8世紀前半まで時期が下るかもしれない。

201～206は坏である。201は高台が高くしっかりとしており、7世紀後半から8世紀初頭のものとみられる。202～205は8世紀から9世紀前半にかけてのもの、206は9世紀前半から10世紀前半のものと考えられる。

207は皿である。底部外面は回転ヘラケズリで整えられており、8世紀前半から中頃のものと考えられる。

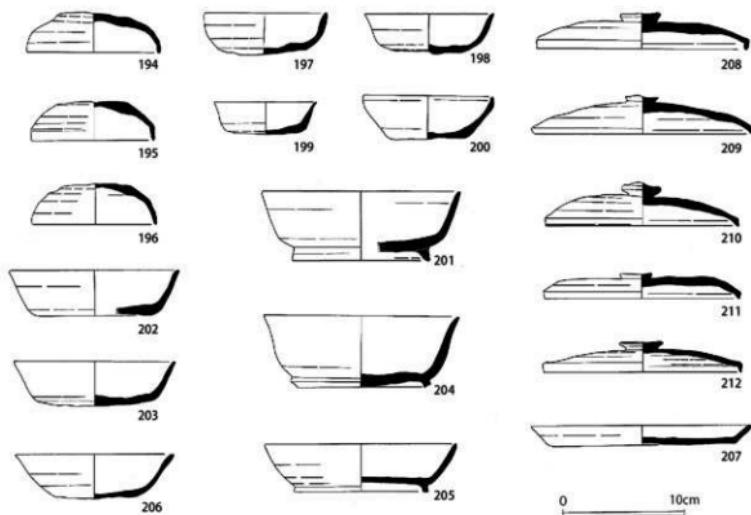
213～215は短頸壺である。213は6世紀末から7世紀前半のものとみられ、脚台部が剥離したとみられる痕跡を底部に残す。214は7世紀後半から8世紀初頭、215は8世紀前半のものと考えられる。

216～220は長頸壺である。216は7世紀前半から中頃のもの、他は概ね8世紀前半のものと考えられる。216は肩部に刺突文が施され、高台部が剥離している。218には意図的なものかどうかはわからないが、肩部付近に波状の短いヘラ描き線が認められる。また、218は壺の中に貝殻が詰まった状態で出土した。貝の種類は、スガイ、クボガイ、ウミニナの3種類で、殻高は1.5～2cm程度で、貝の蓋も含まれていたことから、蓋が付いた状態であったと考えられる。破損している分もあるが、個体数を確認できたものでスガイ171個、クボガイ24個、ウミニナ64個あった。スガイ・クボガイは磯、ウミニナは干潟から磯に生息することから、五反島遺跡とは別の場所で採取されたものが壺に入れられ運ばれてきたと考えられる。これらの貝は食用になり、採取されて陸上にあがったとしても、条件にもよるが、数日から数週間生きるといい、食することを目的に壺に入れられていたのかもしれない。今回出土の壺や甕の中に意図的にと考えられる物が入っていたのは218のみであった(注)。

221～223は平瓶である。221は7世紀中頃から8世紀前半、222は7世紀後半、223は7世紀末から8世紀前半にかけてのものと考えられる。

224は双耳瓶である。口頸部は欠損しているが、8世紀中頃のものとみられる。体部上部に厚く自然釉がかかる。

225は壺の体部である。口縁部・底部が欠損しており、全体形がわからないので、時期の判断は難しいが、これも7世紀から8世紀にかけてのものであろうか。

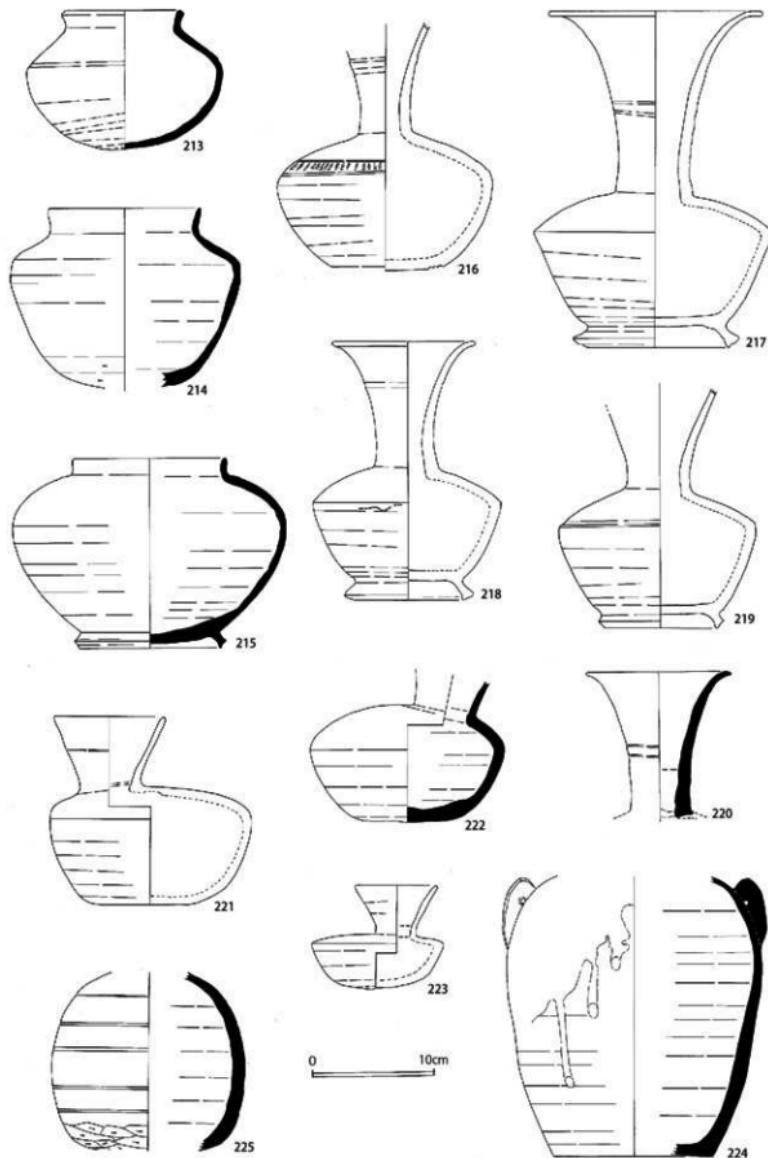


第45図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①

226～231は横瓶である。7世紀末から8世紀前半にかけてのものとみられる。226については、体部に癒着した須恵器蓋を図面上に表現するため、左側を断面図、右側を見通し図として図化した。231は欠損のために明確でないが、他の5点は片面閉塞によって体部は成形されており、ここでは閉塞部を断面側にして図化した。

232～259は甕である。7世紀から8世紀にかけてのものと考えられる。体部外面をタタキ調整の後カキ目が施されているものが多い。また体部内面をナデ消すものもみられ、233・235・246は当て具痕が残る部分もあるが、ナデ消しがされている。特徴的なものをみると、241は口縁部外面に矢印状のヘラ記号が刻まれている。235は口縁部外面にハケ目が残り、口縁部内面には意図的なものかどうかはわからないが、線刻が認められる。また、249にも意図的かどうかわからないが、口縁部外面に線刻がある。239は体部上部に径5mm程度の穿孔があり、254にも体部中央付近に径5～8mm程度の穿孔がある。ともに焼成後にあけられたものである。247・248は円形浮文が付き、247は4か所、248は3か所の円形浮文が付く。253は底部に須恵器蓋が癒着しており、蓋の特徴から8世紀前半のものと考えられる。

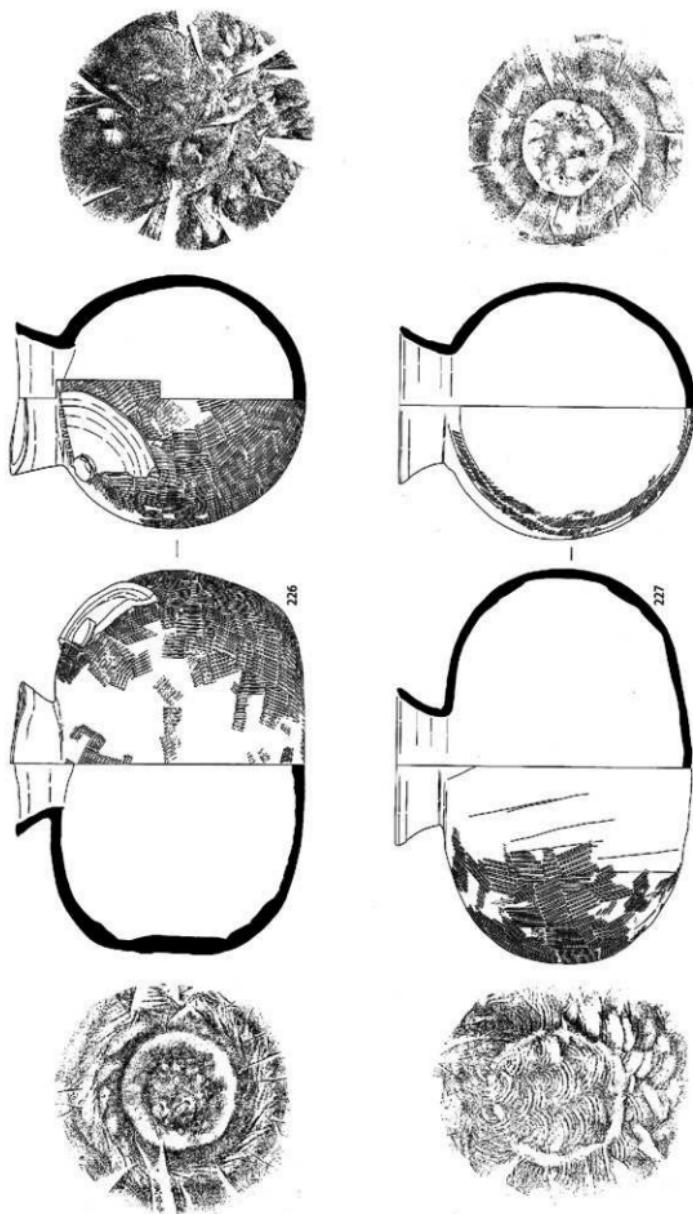
(注)貝の種類・生態等については、高田良二氏からご教示を得た。



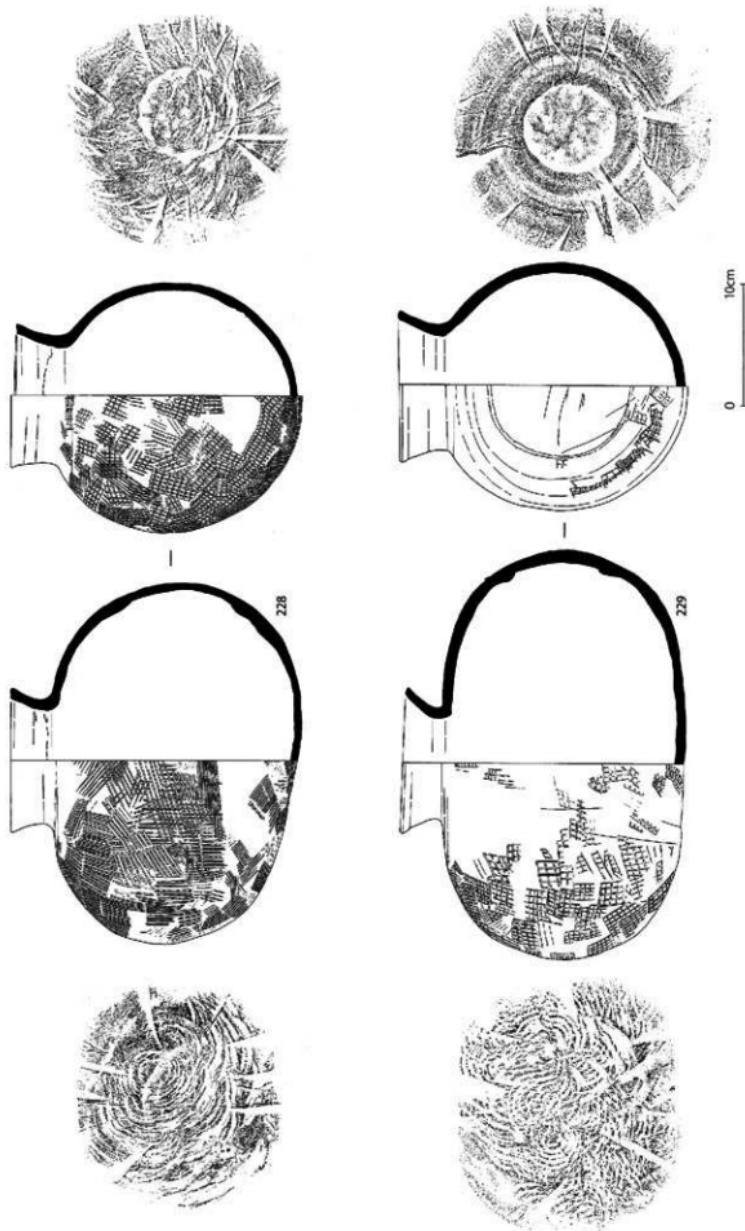
第46図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②

第47図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③

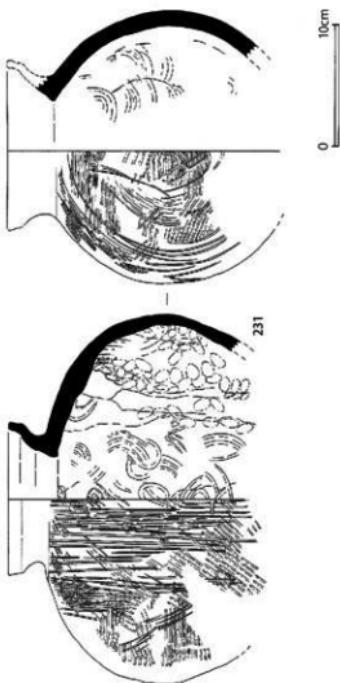
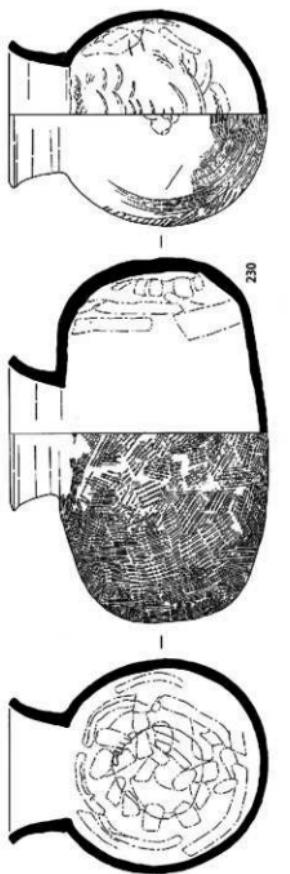
0 10cm

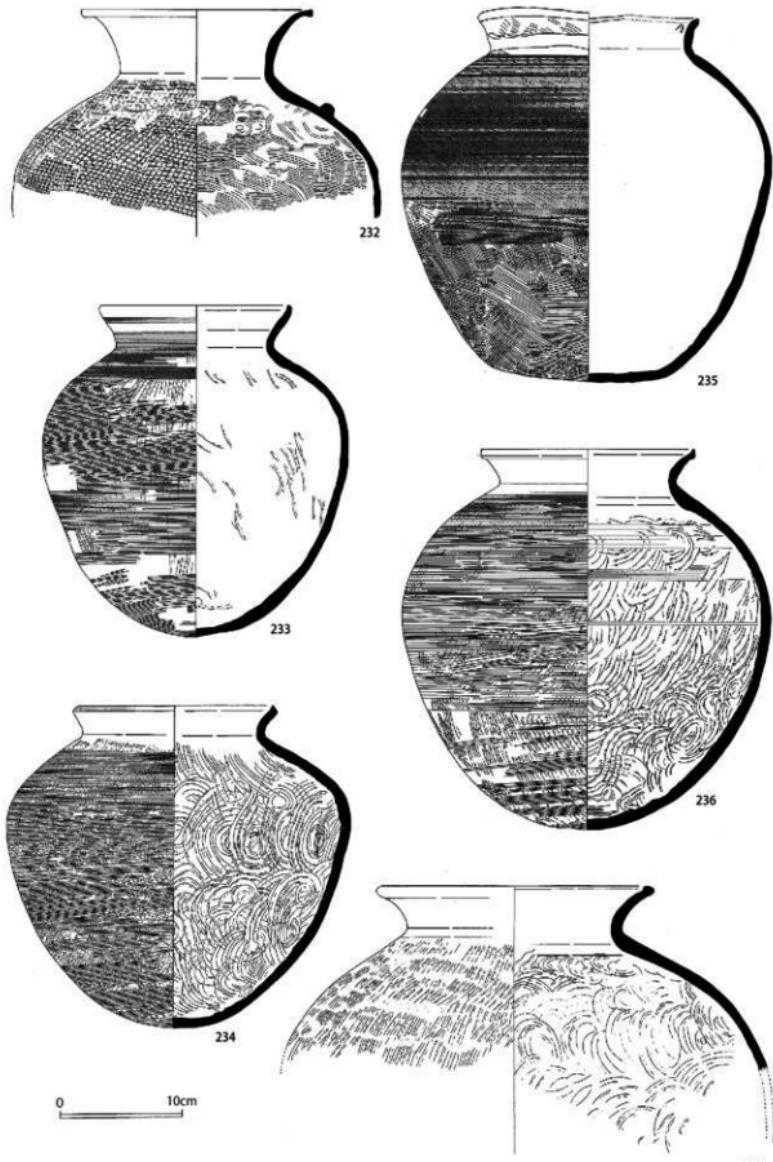


第48図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④



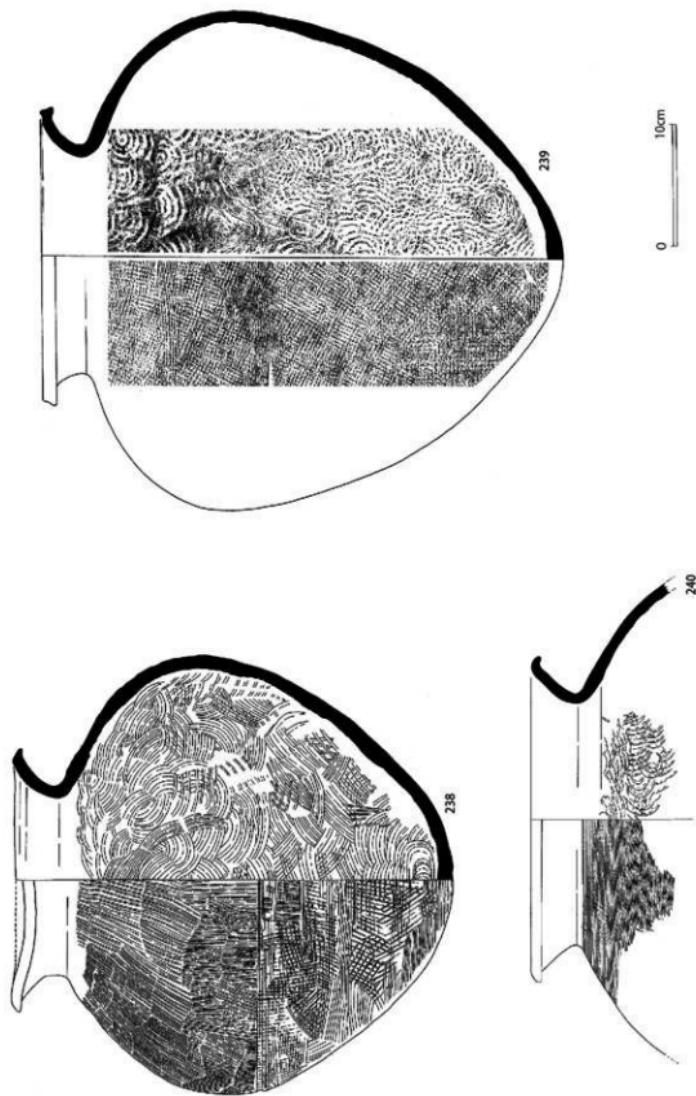
第49図 A区出土須惠器（飛鳥～平安時代）⑤



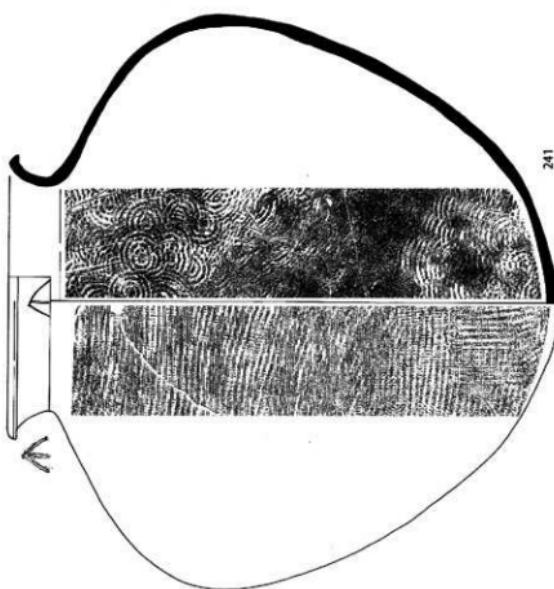
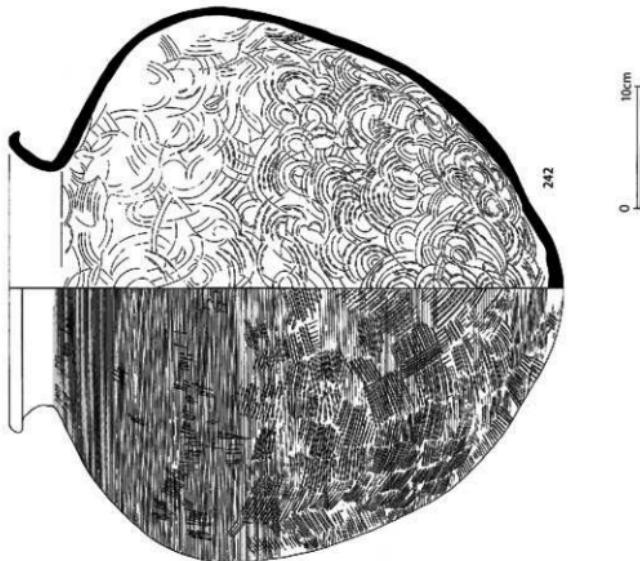


第50図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑥

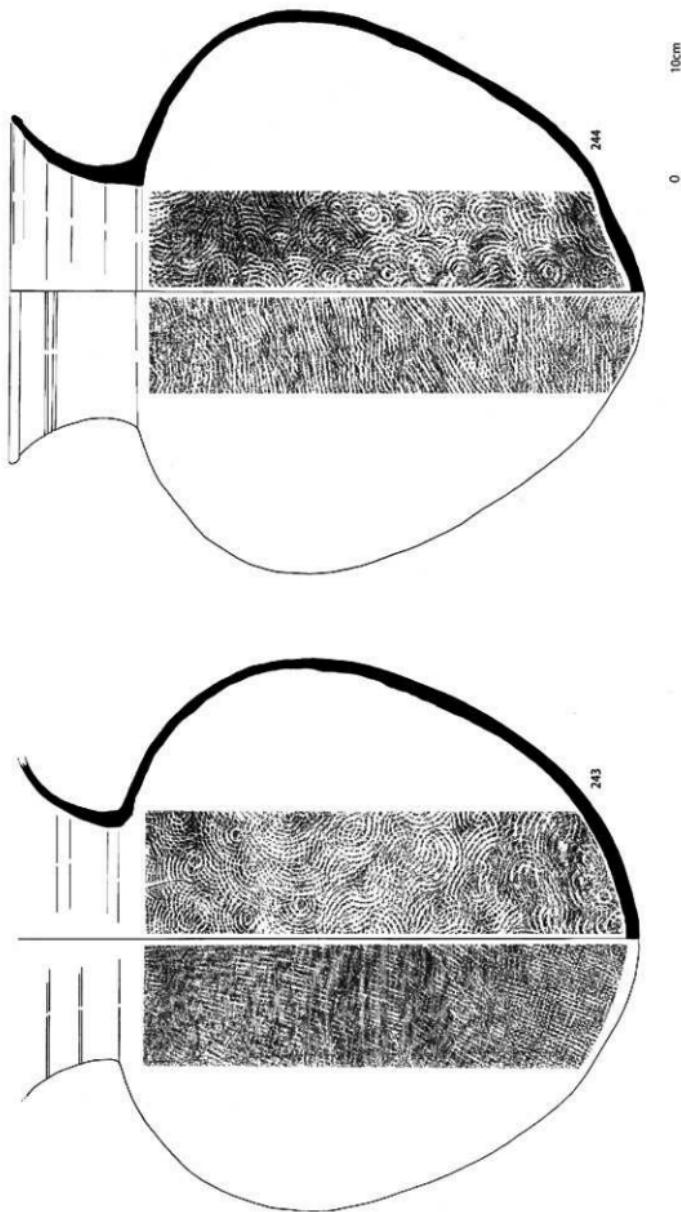
第51図 A区出土須惠器（飛鳥～平安時代）⑦



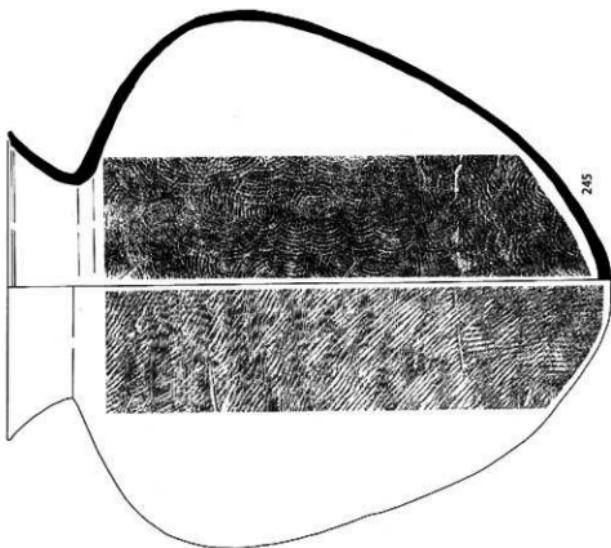
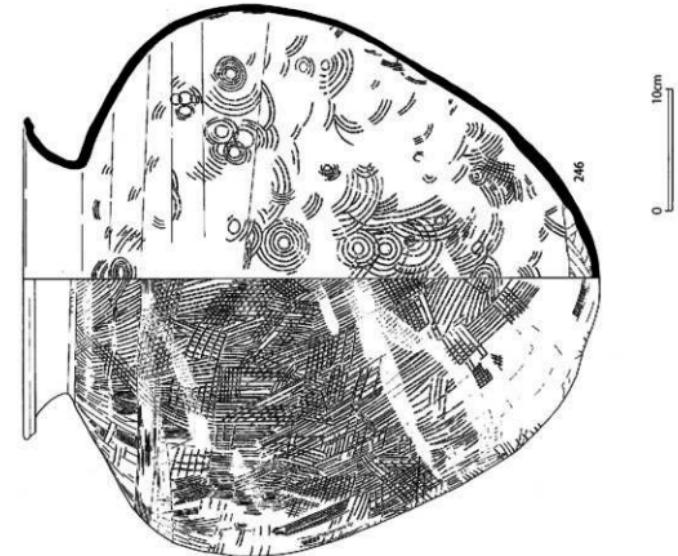
第52図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑧



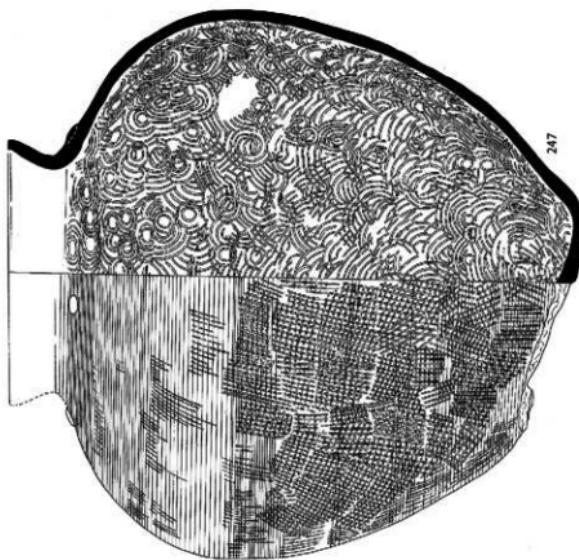
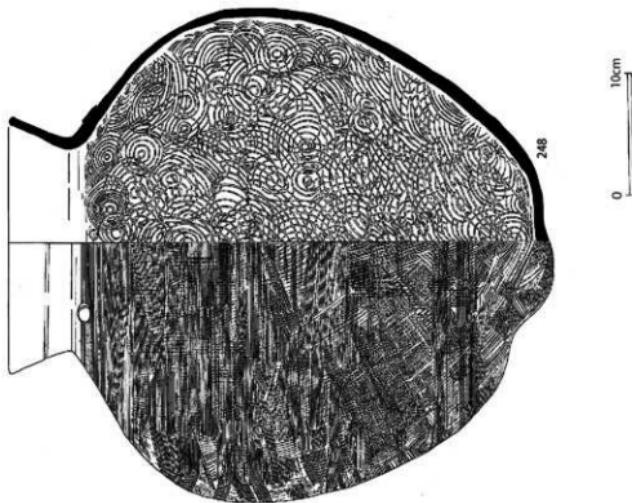
第53図 A区出土須恵器(飛鳥～平安時代)⑨



第54図 A区出土須恵器(飛鳥～平安時代)⑩

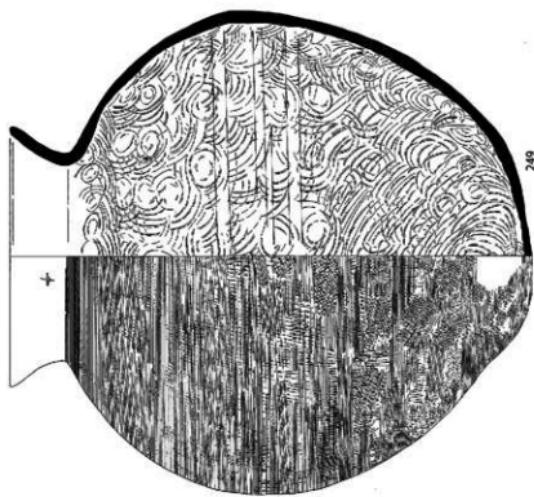
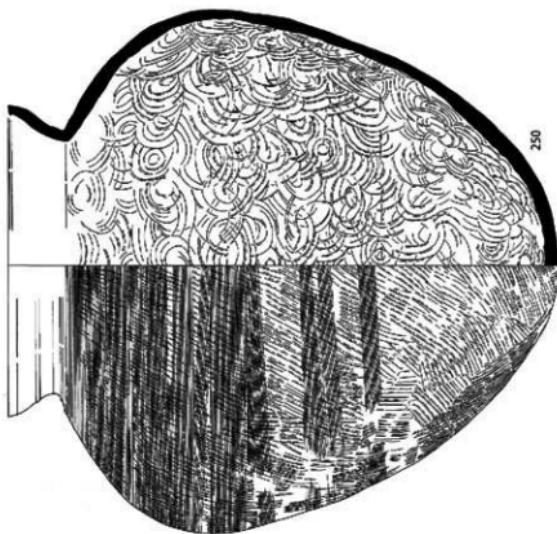


第55図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①

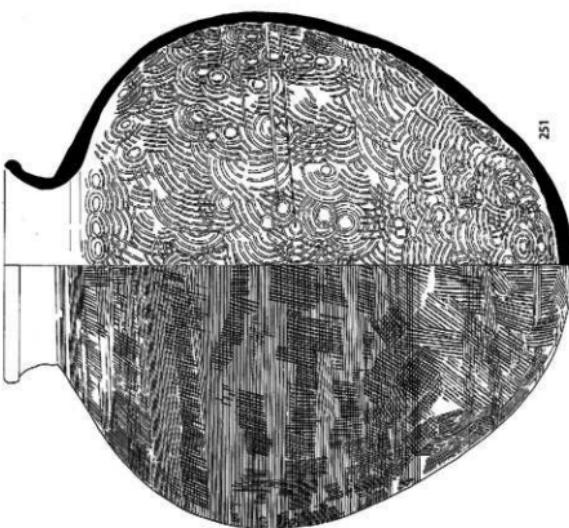
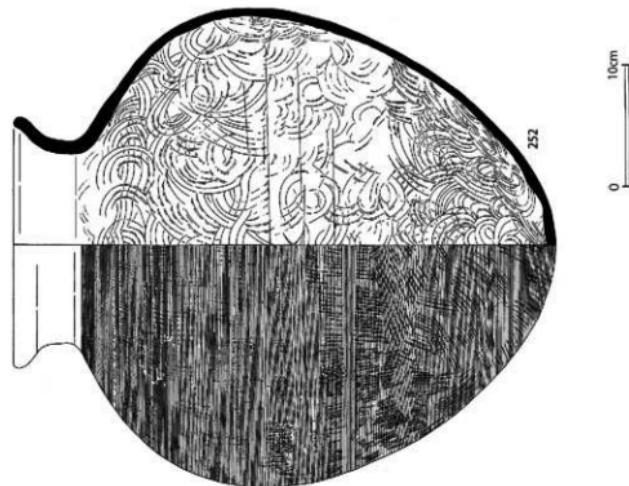


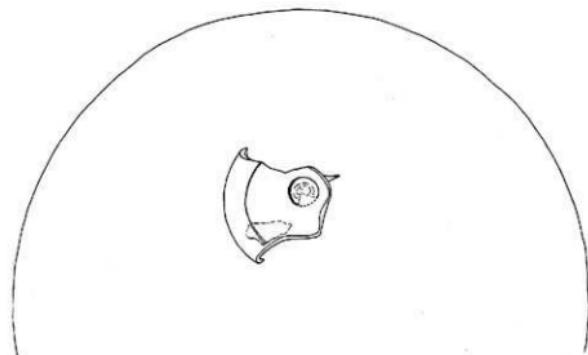
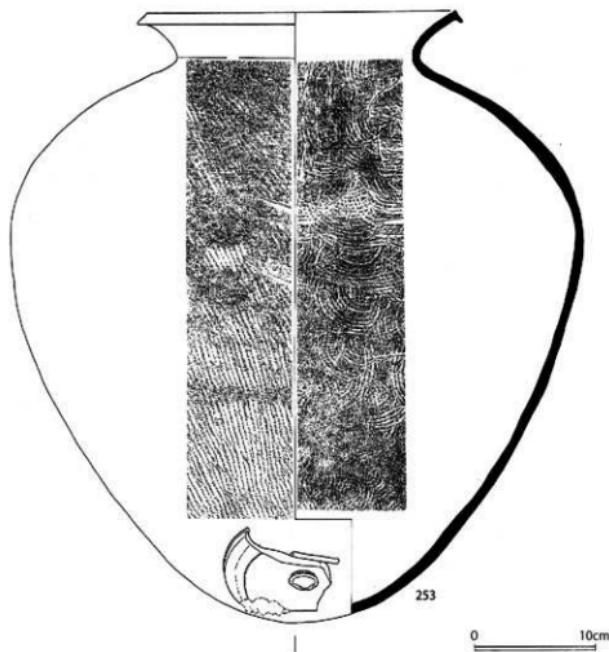
第56図 A区出土須惠器（飛鳥～平安時代）⑫

0 10km

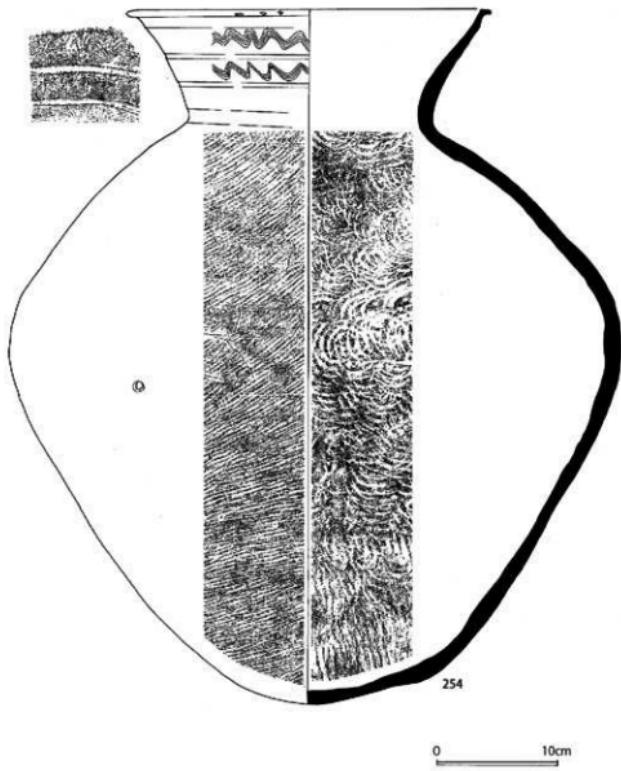


第57図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①

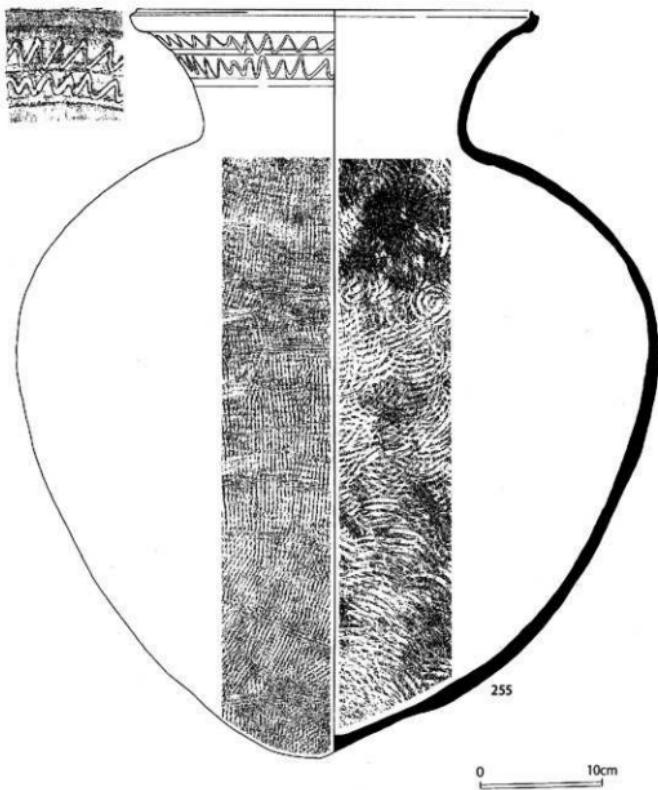




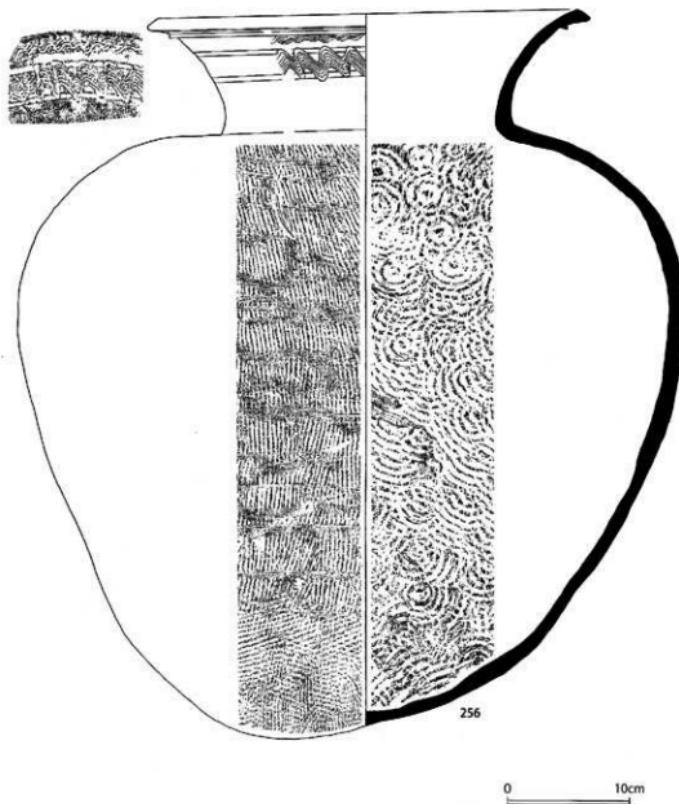
第 58 図 A 区出土須恵器（飛鳥～平安時代）^⑭



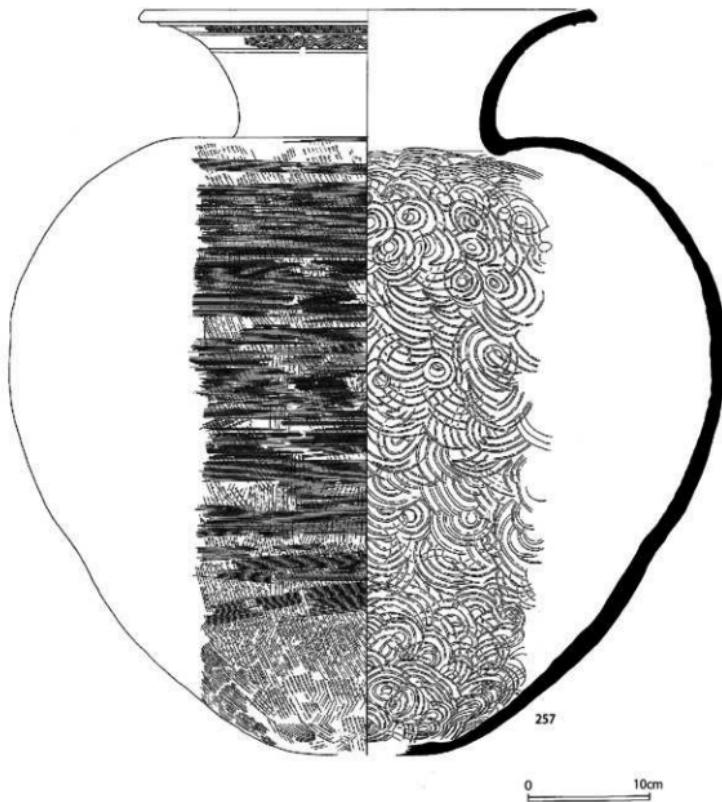
第59図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑯



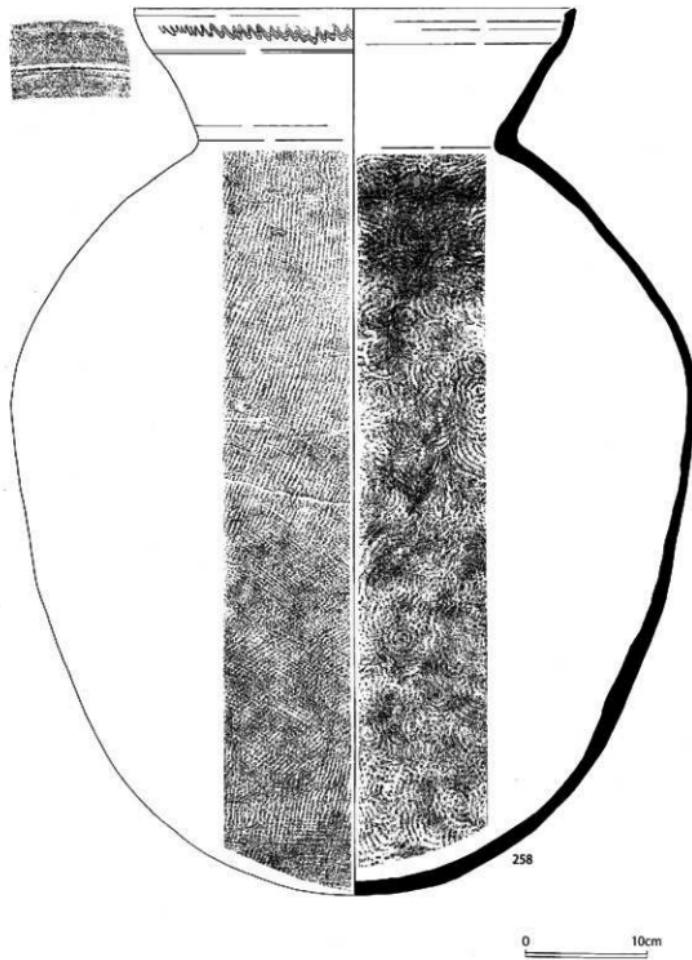
第60図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑯



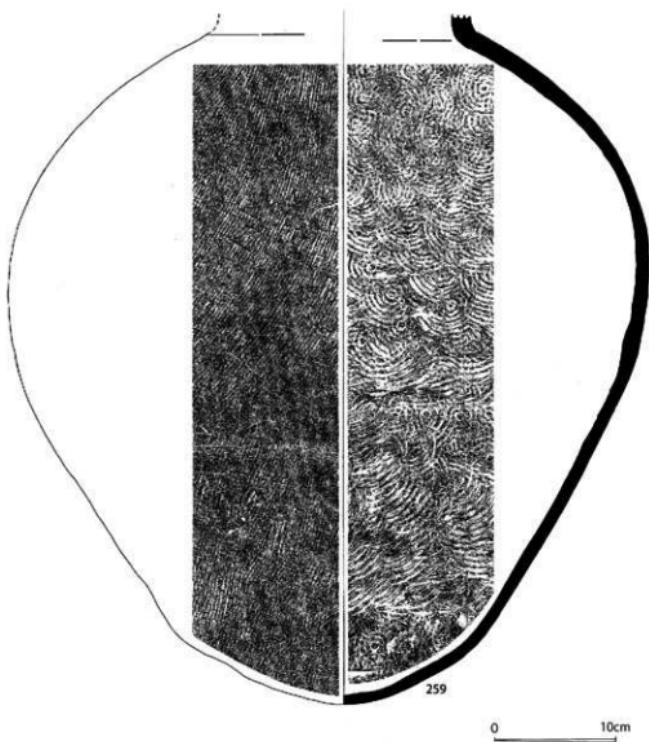
第61図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑯



第62図 A区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑯



第 63 図 A 区出土須恵器（飛鳥～平安時代）^⑯



第 64 図 A 区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑧

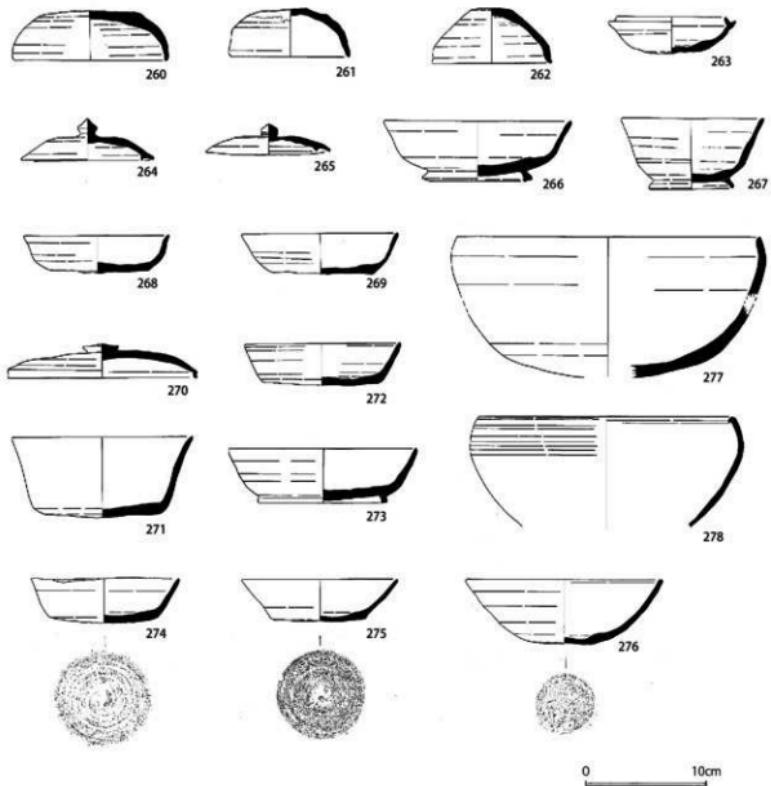
[B 区出土]

260～263は7世紀前半の壺蓋・壺身である。262については器高が高く、口縁部が下方にやや長めにのびる形状から短頸壺等の蓋である可能性もある。

264・265は7世紀中頃から後半の壺蓋である。宝珠つまみを有し、口縁部にかえりが付く。

266・267は7世紀の壺・塊である。ともに高くしっかりとした高台をもつ。267の体部下位には1条の凹線がめぐる。

268・269は7世紀後半から8世紀前半にかけての壺で、271は8世紀前半から中頃にかけての壺となる。270は8世紀前半の蓋である。



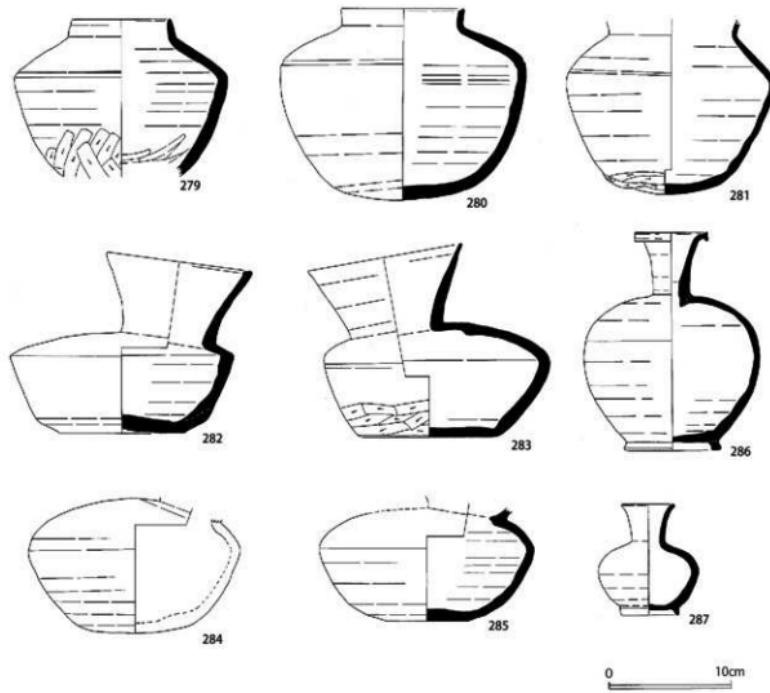
第65図 B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①

272～274は8世紀から9世紀前半にかけての壺であり、275は9世紀中頃の壺、276は平安時代中後期の塊である。276の底部外面には糸切り痕を残す。

277・278は鉢である。8世紀のものと考えられるが、277については時期が少し遡る可能性がある。278は口縁部付近にヘラミガキが施されている。

279～281は短頸壺である。概ね7世紀中頃から後半にかけてのもので、281についてはもう少し時期が下るかもしれない。

282～285は平瓶である。282・283は7世紀末から8世紀前半のものと考えられ、284・



第 66 図 B 区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②

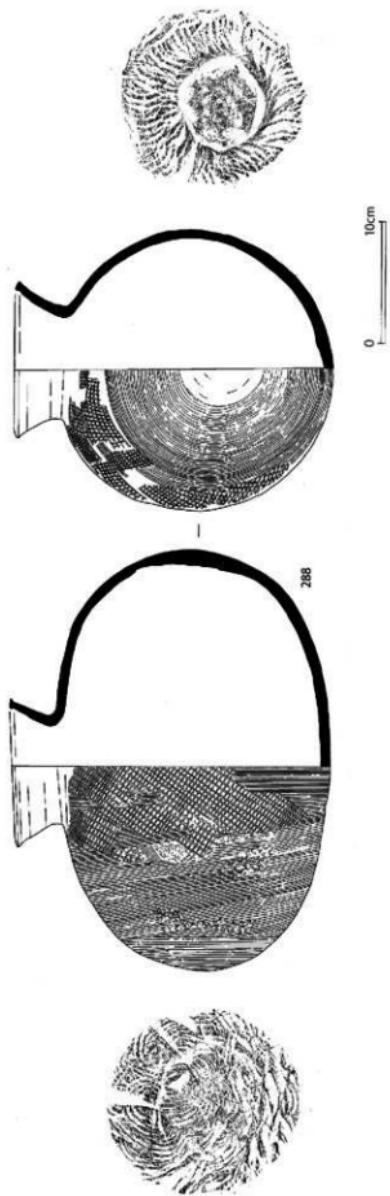
285 については口縁部を欠損しているが、7世紀後半のものではないかと考えられる。

286・287 は壺である。286 は長頸壺であり、8世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。丸い体部から細めの口頸部がのび、口縁端部が上下に肥厚する。287 は9世紀前半のものと考えられる小型の壺である。

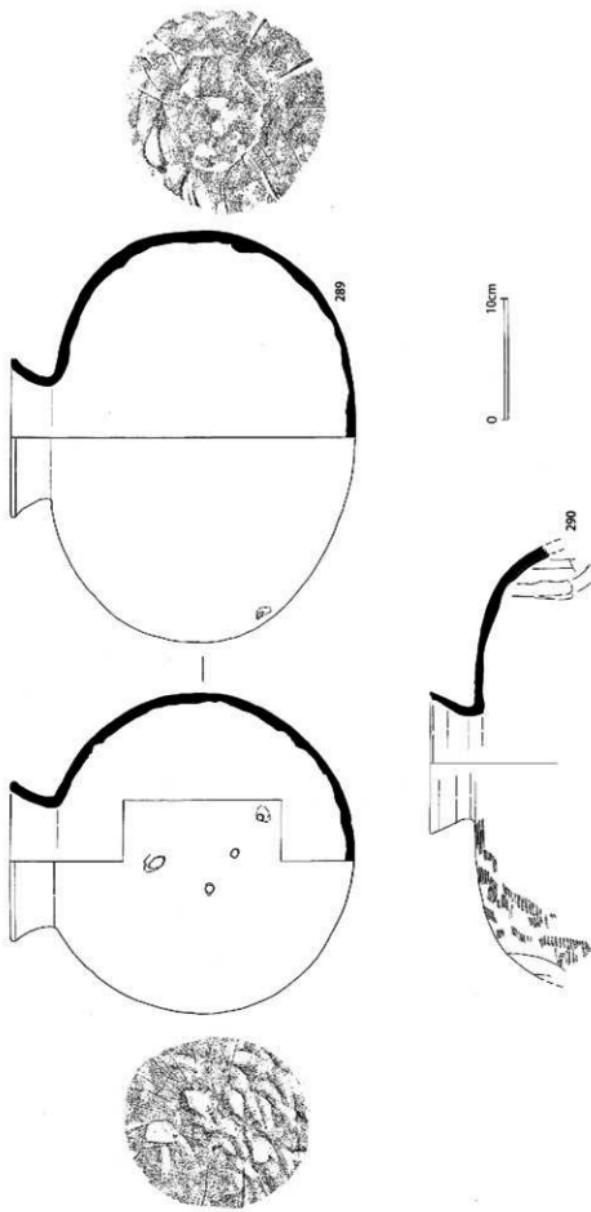
288～290 は横瓶である。7世紀末から8世紀前半にかけてのものとみられる。これらは片面閉塞によって体部を成形されており、ここでは閉塞部を断面側にして図化した。290 については欠損のため閉塞側を反転復元して図化した。289 は体部側面に 4 か所の穿孔があり、焼成後にあけられている。

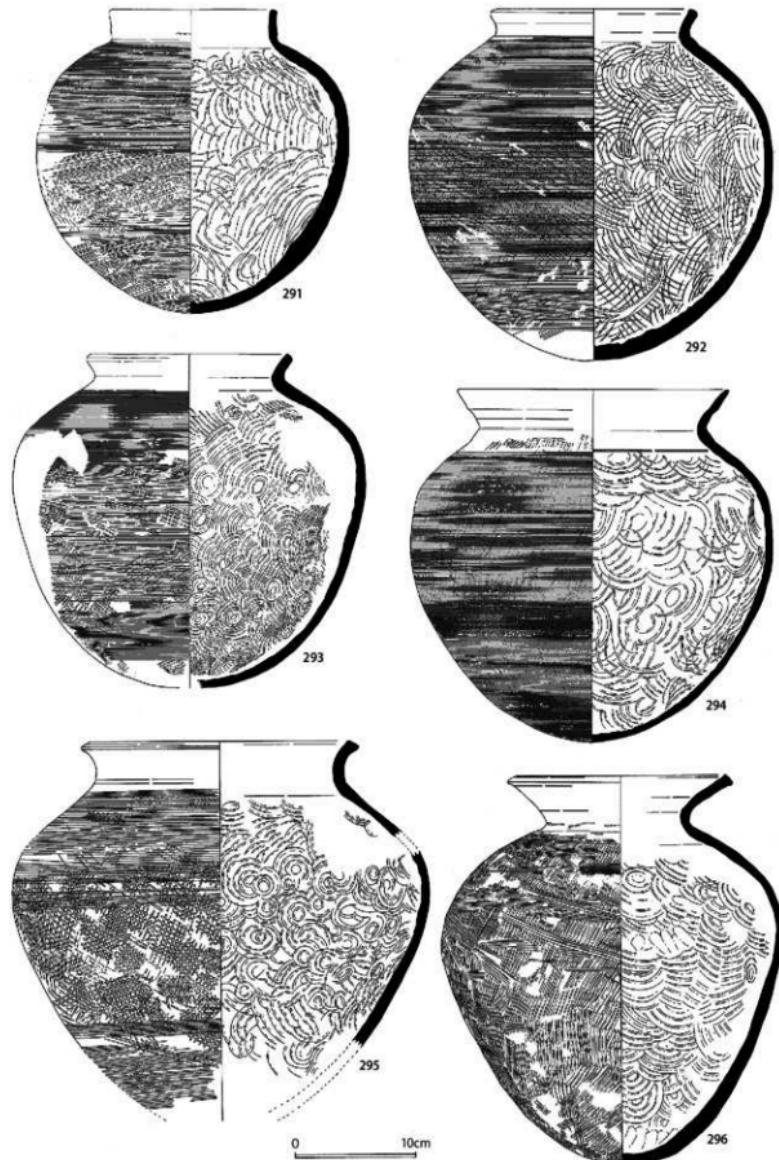
291～297 は甕である。概ね 7 世紀から 8 世紀のものである。体部外面をタタキ調整した後にカキ目が施されている。297 には体部上部にヘラ記号が認められる。

第67図 B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③

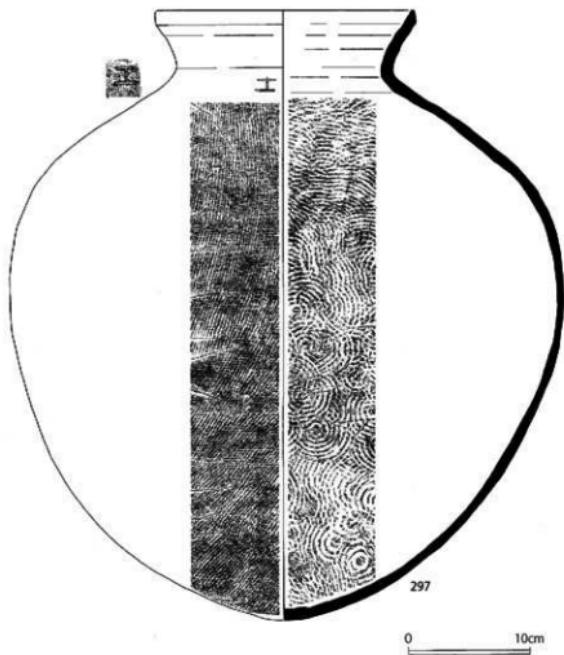


第68図 B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④





第69図 B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑤



第70図 B区出土須恵器（飛鳥～平安時代）⑥

〔C区出土〕

298～303は7世紀の壺蓋・壺身である。298～300は7世紀前半、301～303は7世紀後半のものとみられる。302は土師質の焼成となっている。303は高台が付いていたとみられ、高台部の剥離痕が認められる。

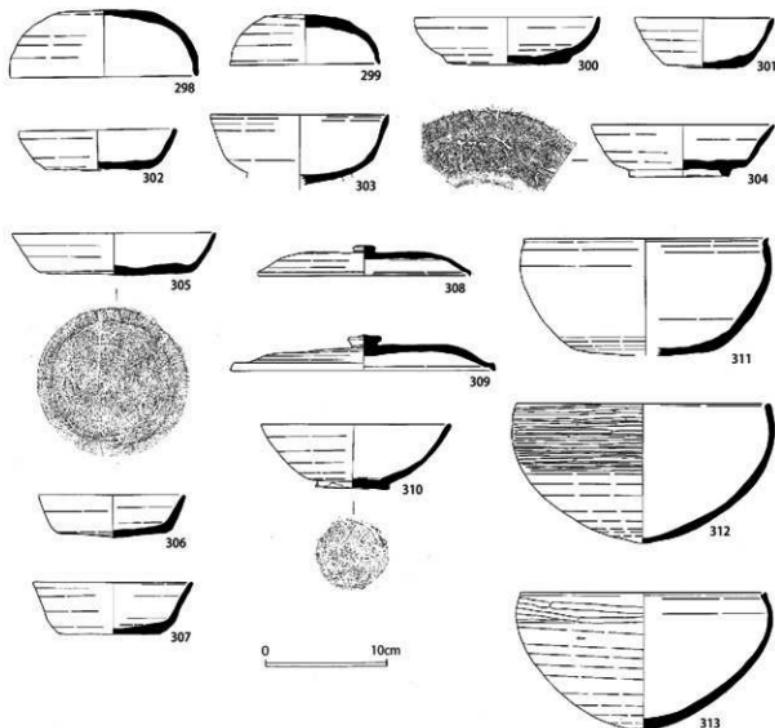
304は7世紀後半から8世紀前半の壺である。体部外面に糸状のものあるいは植物のものとみられる圧痕が付いている。

305は8世紀前半から中頃の壺である。回転ヘラケズリで調整された底部外面にヘラ記号が認められる。

306・307は8世紀から9世紀前半にかけての壺、308・309は8世紀の蓋である。308は8世紀前半、309は8世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。

310は塙である。底部外面に糸切り痕が残る。10世紀後半から11世紀にかけてのものと考えられる。

311～313は鉢である。311は7世紀後半から8世紀前半、312・313は8世紀のものであ



第71図 C区出土須恵器(飛鳥～平安時代)①

る。312・313は口縁部から体部上半をヘラミガキで調整されている。

314は短頸壺である。7世紀前半のものとみられるが、もう少し遡るかもしれない。

315は長頸壺である。口頸部のみで全体形がわからないので、時期の細かな判断は難しいが、他区画で出土している長頸壺と比較してみて、これも8世紀前半のものであろうか。

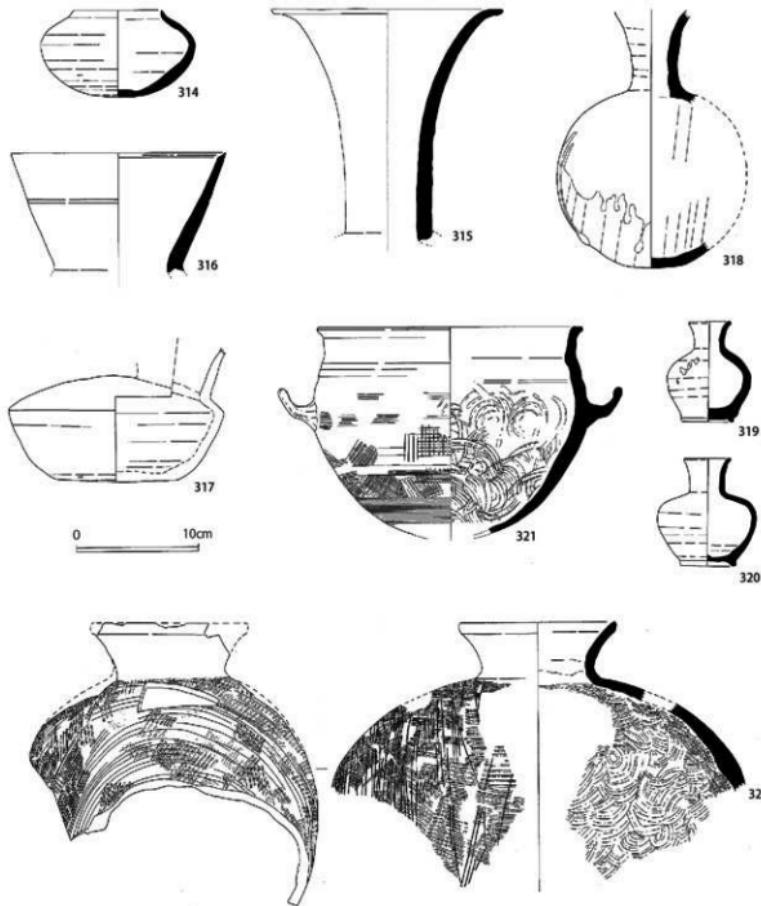
316は壺の口縁部であるが、平瓶の口縁部である可能性が考えられる。平瓶であるならば7世紀から8世紀のものであろう。

317は平瓶である。口縁部が欠損しているが、7世紀末から8世紀前半のものとみられる。

318は長頸壺で、フラスコ形瓶とよばれるものである。体部は縦方向のナデ調整によって成形され、球体の体部に細い口頸部が付く。7世紀前半から8世紀初頭にかけてのものである。

319・320は9世紀前半のものと考えられる小型の壺である。

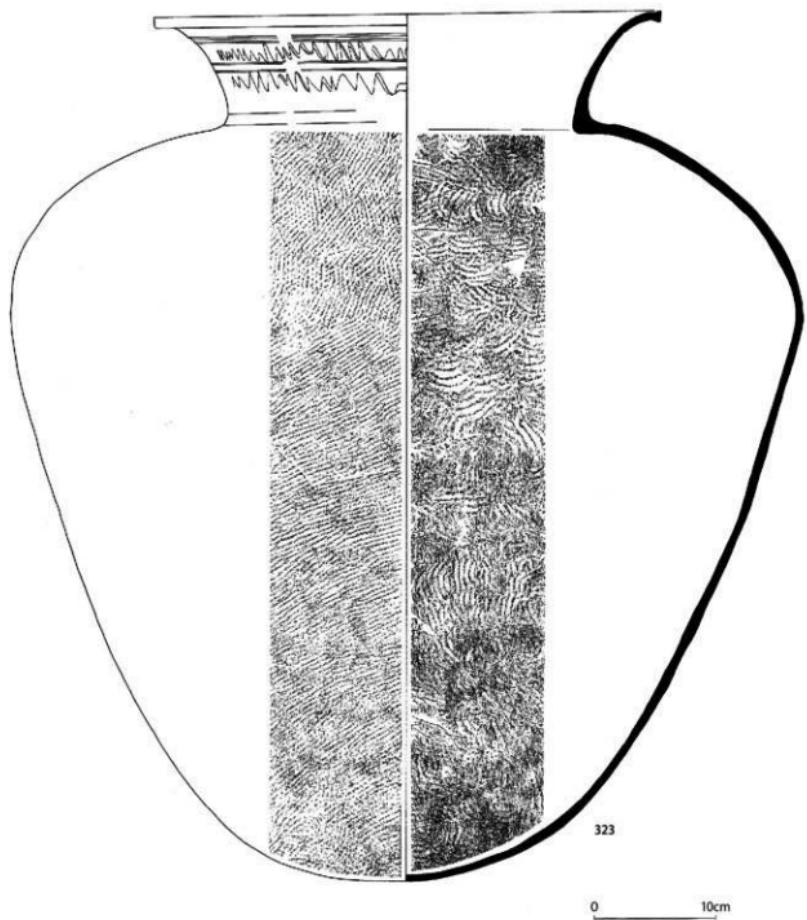
321は把手付きの壺である。7世紀から8世紀のものと考えられる。口縁部はわずかに外へ開く程度である。



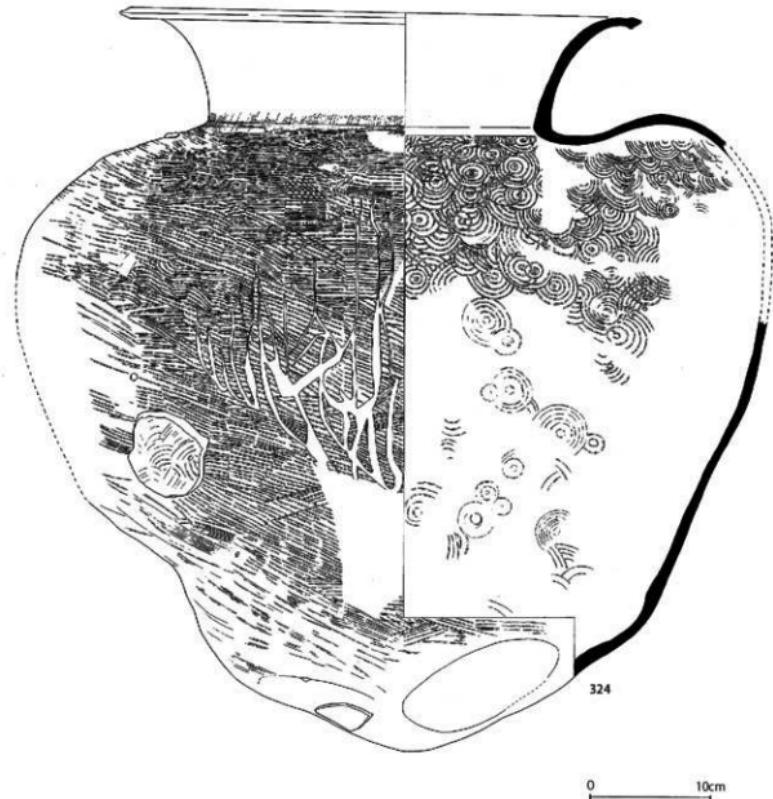
第72図 C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②

322は横瓶である。体部の閉塞部は残っておらず、反転復元で図化した。他の横瓶と同様に7世紀末から8世紀前半のものであろうか。

323・324は甕である。7世紀から8世紀のものである。両者とも体部外面はタタキ調整によっており、カキ目は認められない。324は内面を一部ナデ消ししているが、當て具痕が残る。また、体部中央に焼成後にあけられた穿孔が1か所あり、他2か所にも穿孔のような痕跡がみられるが、体部の欠損によって不明瞭である。



第73図 C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③



第74図 C区出土須恵器（飛鳥～平安時代）④

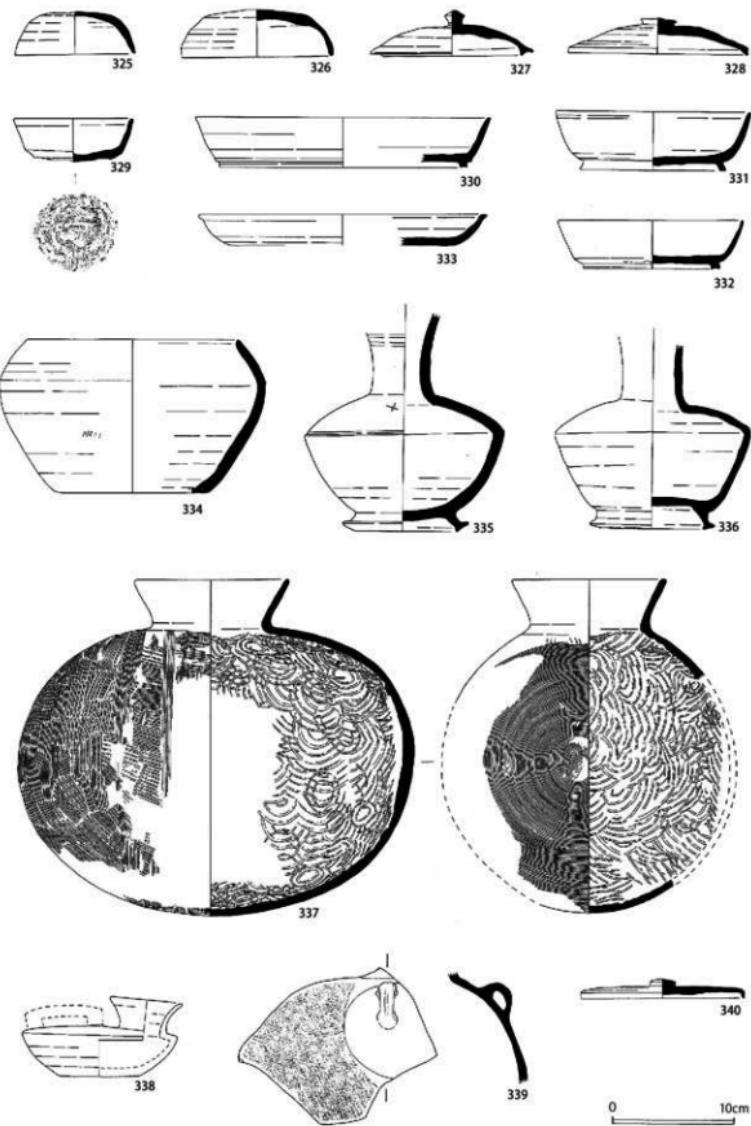
[D区出土及び滯水池区画不明]

325～327・329は7世紀の壺蓋・壺身である。325・326は7世紀前半、327・329は7世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。327は宝珠つまみを付け、口縁部にかえりを有する。329の底部外面にはヘラ記号が認められる。

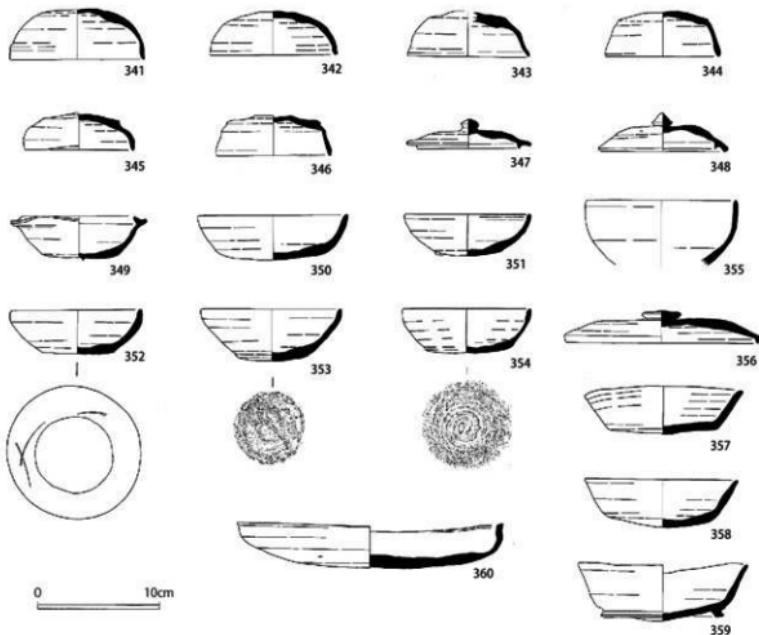
328蓋である。8世紀前半のものと考えられる。

330～333は8世紀を中心とする壺・皿である。330は7世紀後半から8世紀、331は8世紀、332は8世紀末から9世紀前半にかけての壺と考えられる。333は8世紀前半から中頃の皿である。

334は鉢である。7世紀末頃のものとみられ、体部上位から口縁部にかけて内傾する形状を



第75図 D区出土・区画不明須恵器（飛鳥～平安時代）



第76図 E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）①

している。

335・336は長頸壺である。ともに口縁部が欠損しているが、8世紀前半のものと考えられる。335の体部にはヘラ記号が認められる。

337は横瓶である。7世紀末から8世紀前半のものとみられる。片面閉塞によって体部が成形されており、ここでは閉塞部を断面側にして図化した。

338は平瓶である。体部に把手の剥離痕があり、把手が付いていたようである。8世紀前半から中頃のものと考えられる。

339は環状把手付きの壺の破片である。7世紀から8世紀にかけてのものと考えられるが、把手付近に残る円形の癒着痕が壺のものならば小型の壺であり、7世紀のものと考えられるであろうか。

340は滯水池調査区内から出土したものの、出土区画が不明の蓋である。8世紀のものと考えられる。

[E区出土]

341～354は7世紀の环蓋・环身である。341～346・349は7世紀前半、347・348・350～354は7世紀中頃から後半にかけてのもので、354については8世紀前半まで時期が下るかもしれない。352は体部外面にヘラ記号が2か所認められる。

355は7世紀のものと考えられる塊である。瓦質に近い焼成となっている。

356～360は8世紀以降のもので、356は8世紀前半の蓋、357～359は8世紀から9世紀前半にかけての环、360は8世紀前半から中頃にかけての皿である。

361～375は短頸壺である。361～367は7世紀前半のもので、361については時期がもう少し遡るかもしれない。366は瓦質に近い焼成となっており、被熱によるものなのか外表面が広く細かく剥離している。367は肩部に刺突文が施されている。368～371は7世紀中頃のもので、371はもう少し時期が下る可能性がある。369には体部下位から底部外面をヘラ状のもので細かくナデ調整したような痕跡がみられる。372～375は8世紀前半のもので、372・373については8世紀初め頃のものだろう。375は高台が付き、体部上半部に自然軸が厚くかかる。

376は短く「く」字状に開く口縁部を有する壺である。7世紀から8世紀のものであろうか。

377～380は長頸壺である。377・378は7世紀末から8世紀初めにかけてのもの、379・380は8世紀前半のものと考えられる。379については体部下半部が回転ナデ後、縦方向にナデ調整されている。

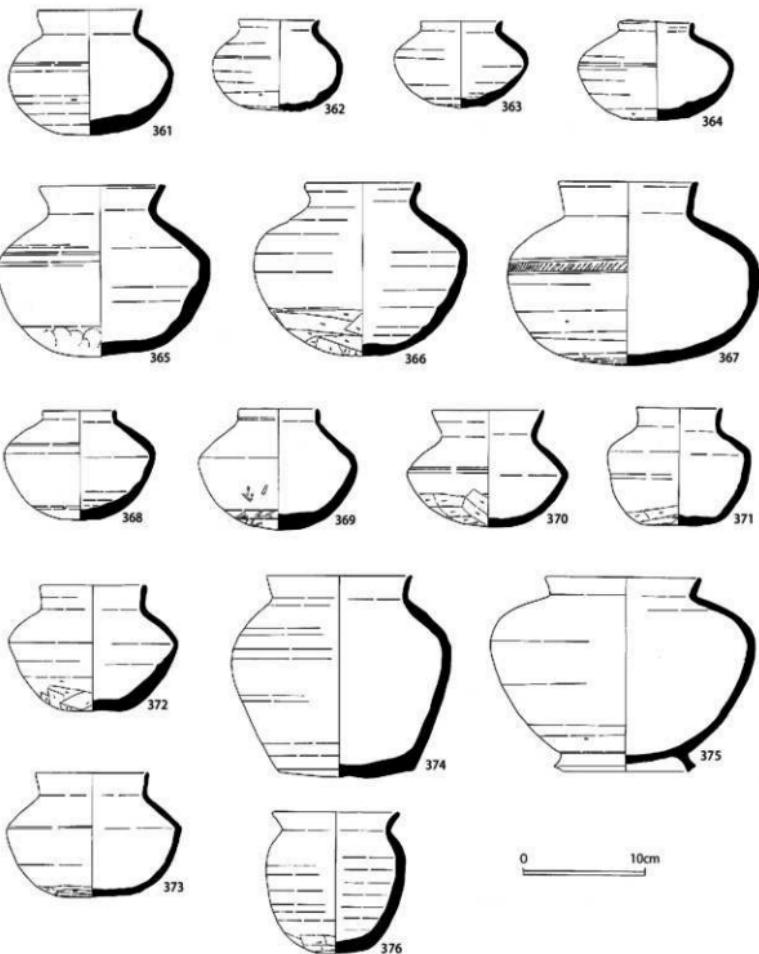
381は平瓶である。7世紀前半から中頃のものである。

382は壺の口頸部である。口縁端部が上方へ肥厚する。9世紀から10世紀初め頃のものと考えられる。

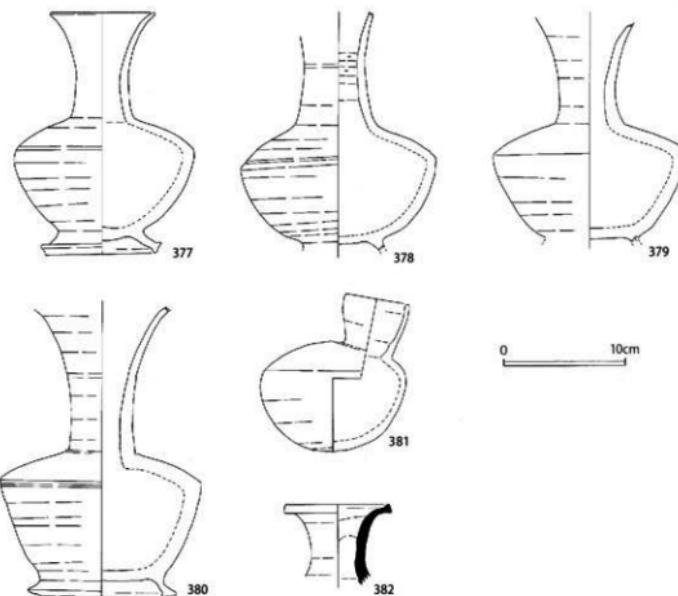
[F区・G区出土]

383～386はF区出土のものである。383・384は8世紀の环であるが、384は9世紀前半まで下るかもしれない。385は7世紀後半から8世紀初め頃のものとみられる短頸壺である。386は壺で、9世紀中頃から後半にかけてのものとみられ、底部外面に糸切り痕を残す。

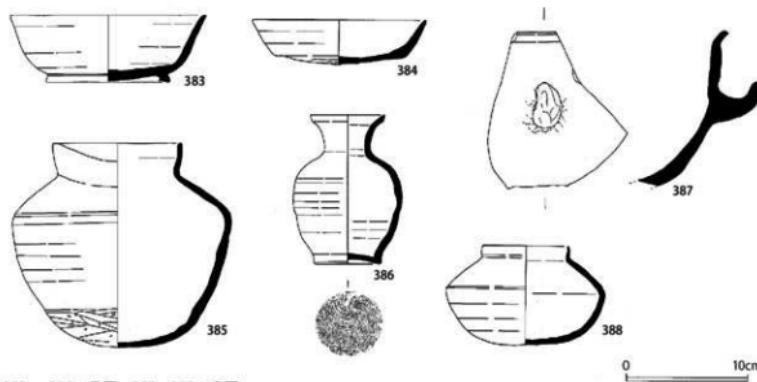
387・388はG区出土のものである。387は把手付きの甕である。把手を中心とした破片であるが、7世紀から8世紀にかけてのものではないかと思われる。388は短頸壺である。7世紀中頃のものと考えられる。



第77図 E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）②



第78図 E区出土須恵器（飛鳥～平安時代）③



383～386：F区、387・388：G区

第79図 F区・G区出土須恵器（飛鳥～平安時代）

【墨書き土器：奈良～平安時代】

ここでは、先述の「林」と墨書きされた土器器甕（143）を除く、墨書き、墨痕をもつ土器・須恵器をまとめた。これらは奈良時代のものも含むようであるが、概ね平安時代に属するものであった。E区・G区を除く各区画から出土したが、C区からの出土が多かった。

まず、C区以外の区画から出土した墨書き土器をみると、389・390はA区出土のものである。389は須恵器坏で、体部と底面外面にそれぞれ墨書きがある。底部の文字については欠損もあり判読できていないが、一部「人」のような部分がみえる。体部の文字については1文字とすれば「醜」と読みそうであるが、2文字とみれば「酉戌」と読める可能性がある。390は土器器坏で、体部外面に記号と思われる墨書きがある。ともに8世紀末から9世紀初頭にかけてのものと考えられる。

391～393はB区出土のものである。391・392は須恵器坏、393は壺か鉢の破片と考えられる。391は底部外面に「申」と墨書きされている。392は底部外面全体に墨痕があり、転用硯として使用されたものと考えられる。393は墨書きの部分で器体が割れており、その文字あるいは記号の内容は不明である。393の時期は判別できないが、391・392については8世紀末から9世紀初頭にかけてのものと考えられる。

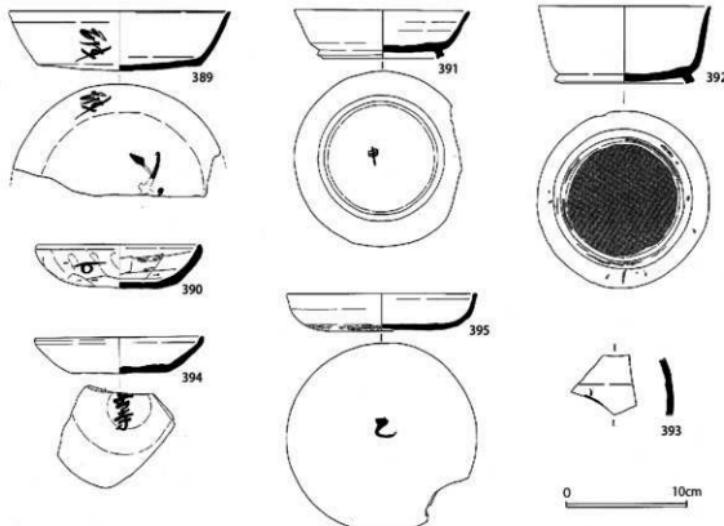
394はD区出土の10世紀前半の須恵器坏である。底部外面に「○寺」との墨書きがあり、上の文字については欠損のため不明瞭であるが、残存部が「垂」という文字の下の部分に似ている。仮にこれが「垂寺」であるなら、平安時代、五反島遺跡周辺には垂水莊や垂水西牧という莊園が成立しており、垂水という地名を冠する寺院が五反島遺跡近辺に存在したということになる。ただし、現時点ではこれが「垂」であるとは断定しがたい。また、この坏には底部内面にも墨痕のような痕跡が認められる。

395はF区出土の土器器坏である。底部外面に「乙」か「巳」と読める墨書きがある。8世紀末から9世紀初頭にかけてのものである。

396～409はC区出土のものである。396は土器器坏である。8世紀末頃のものと思われるが、もう少し遡るものかもしれない。底部外面に「中」という墨書きがある。

397～399は8世紀末から9世紀初頭にかけての土器器坏である。それぞれ底部外面に墨書きがあり、397は「堤」と読める。398は「安寺」と墨書きされたものである。「安寺」という文字から五反島遺跡周辺における古代寺院存在の可能性をうかがわせる資料である。399は記号が書かれたものであるが、同じ底面上に意図的なものかどうかはわからないが、2条の線刻が認められる。

400～403は須恵器坏である。400は8世紀末から9世紀初頭にかけてのものとみられ、底部外面に墨書きがあるが、墨書きの部分で欠損しており、文字の内容は不明である。401・402は8世紀前半から9世紀初頭のものとみられ、401については体部外面に墨書きがある。2文字か3



389 : A2 区、390 : A1 区、391 ~ 393 : B2 区、394 : D1 区、395 : F 区

第 80 図 墨書土器 ①

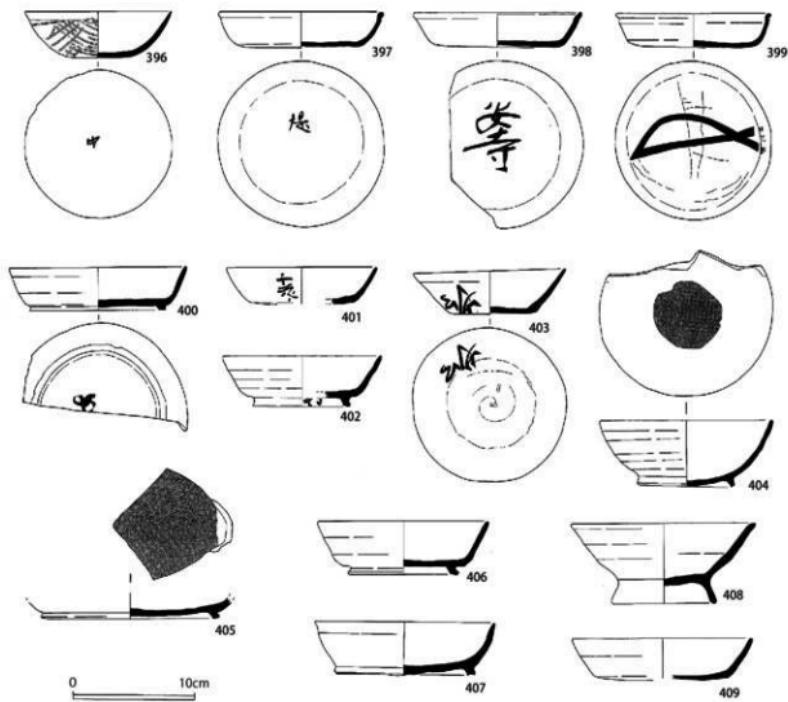
文字のようであり、最初の文字は「十」あるいは「千」とも読めるが、あとは判読できていない。402 については残存部が少ないが底部外面に墨痕がある。転用硯と考えられる。403 は 9 世紀のものであるが、体部に「加」と読める墨書がある。

404 は 9 世紀から 10 世紀にかけての土師器塊である。底部内外面に煤あるいは墨痕がつく。これが墨痕ならば転用硯の可能性が考えられる。

405 ~ 407 は 8 世紀から 9 世紀初頭にかけてのものと考えられる須恵器坏である。405 は底部内面に、406 は底部外面に墨痕がある。405・406 は転用硯として使用されたものと考えられる。407 については口縁部付近内面に部分的に墨痕がつく。転用硯の可能性があるが、墨痕のつき方が部分的であることから断定できない。

408 は土師器塊である。10 世紀後半から 11 世紀前半にかけてのものと考えられる。底部内外面に墨痕があり、転用硯の可能性が考えられる。

409 は 8 世紀から 9 世紀初頭にかけての須恵器坏である。これについては、墨痕の可能性がある 1 本の短い線が体部外面にあるのみで、明確に墨書土器であるとは断定しがたいが、一応、墨書土器の項目でまとめた。



第81図 墨書き土器②

【黒色土器：平安時代】

410～413は内黒、414～418は両黒の塊である。410は9世紀のもので、内面に螺旋状暗文が施されている。411～413は10世紀後半のものと考えられる。410・411は内面のみにヘラミガキが施されている。

両黒の414～418は10世紀後半から11世紀前半にかけてのものと考えられる。内外面がヘラミガキで調整されているが、特に414～416のヘラミガキは密である。

【瓦器：平安時代～中世】

419～427は塊である。419は12世紀前半から中頃のもので、内外面とも密なヘラミガキが施されている。420～427は内面のヘラミガキは雑になり、外面にヘラミガキは施されていない。420は13世紀前半から中頃、421～427は13世紀中頃から後半にかけてのものでは

ないかと考えられる。

428は短い口縁部が付く小型の壺である。残存部において体部外面はヘラミガキがなされ、弧状の暗文が施されている。15世紀のものと考えられる。

【陶磁器：平安時代～中世】

今回の調査では、陶磁器の出土量は全体的な割合からみるとかなり少なく、また小片ばかりで図化できるものが少なかった。

429は緑釉陶器壺である。削り出し平高台をもつ底部の小片であるが、釉は薄い黄緑色、胎土は軟質で黄橙色をしている。9世紀のものと考えられる。

430は灰釉陶器壺である。灰白色の釉がかかる。10世紀のものと考えられる。

431・432は白磁である。431は壺の底部片である。残存部では底部内面のみに施釉が認められる。432は皿で、口縁端部には釉がかからない口禿皿である。

433は青磁壺である。オリーブ色がかった緑色の釉がかかる。

434は常滑焼の甕である。口縁部小片であるが、13世紀中頃から14世紀にかけてのものと考えられる。

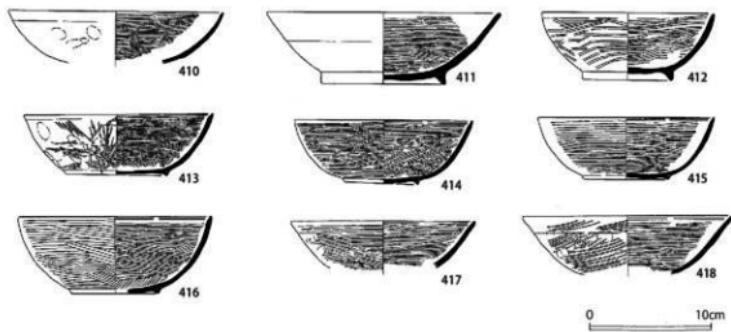
【土師器：中世】

ここでは鎌倉時代から室町時代にかけてのものと考えられる土師器をまとめたが、図化できたのは皿ばかりとなった。435は12世紀から13世紀にかけてもので、底部には内外面とも指頭痕が多く残る。436～440は13世紀後半から14世紀前半にかけてのものであるが、438はもう少し時期が下るかもしれない。また438は成形後に底部に粘土を充填した痕跡が認められる。441は14世紀前半のもの、442は14世紀代のもので「へそ皿」となる。443・444は14世紀後半から15世紀前半にかけてのもので、444は「へそ皿」となる。445～447は15世紀後半のものと考えられる。

【製塙土器等】

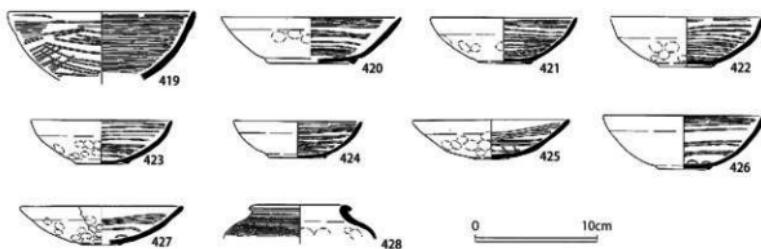
448～458は製塙土器である。448・449は底部で、脚台部のみで全体形は不明であるが、古墳時代のものであろうか。450～456は体部から口縁部にかけて内傾するもので、450～452・454は屈曲気味に内傾する。456については口縁端部が内側に折りこまれている。これらは、6世紀から7世紀にかけてのものと考えられるが、456については7世紀のものであろうか。457・458は体部から口縁部にかけて外側にむかって開くものである。7世紀から8世紀にかけてのものと考えられるが、457は器壁が厚いことから埴輪等の鍛冶関係資料の可能性も考えられる。

459は土師質に焼き上がっており、粗製の土師器壺とも分類できるが、類例がみづからず、時期も不明である。一見、コップ形製塙土器や近世の焼塙壺にも似るが判断しがたい。



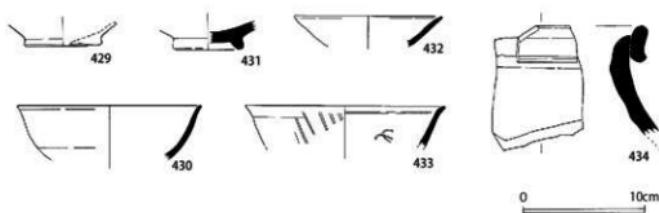
410・416～418：E区、411・415：B2区、412：C2区、413：D2区、414：A2区

第82図 黒色土器



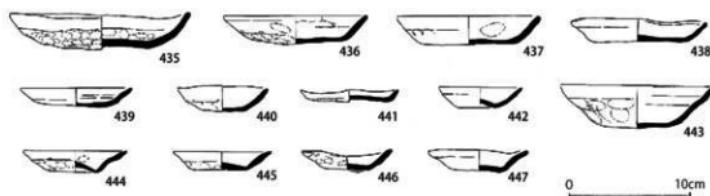
419：C1区、420・425～427：F区、421～424：E区、428：D2区

第83図 瓦器



429：B2区、430：A2区、431：C2区、432：A1区、433：D2区、434：F区

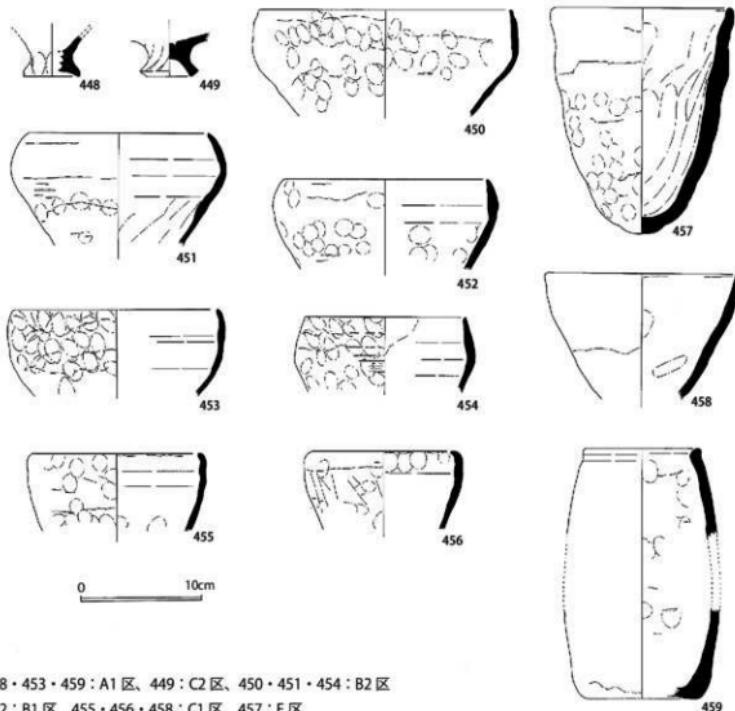
第84図 陶磁器



435・447:A1区、436:A2区、437:E区、438:C2区、439・440・442・444:B1区

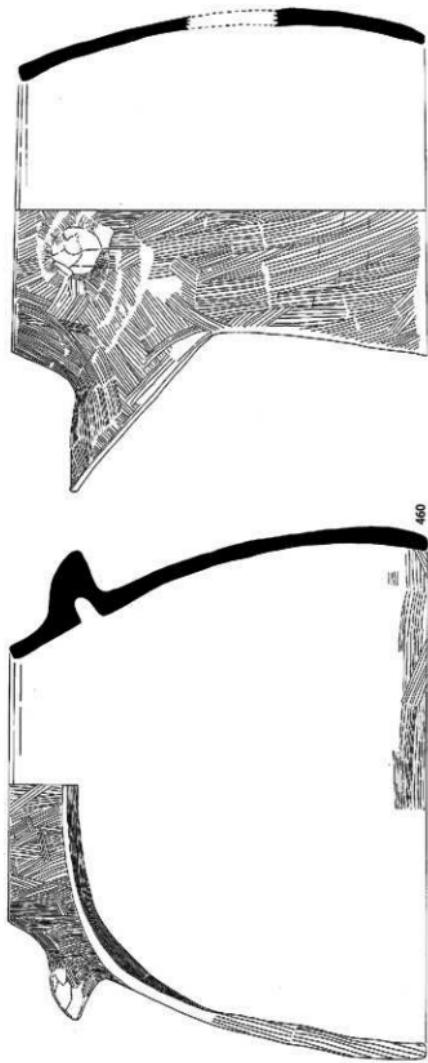
441:G区、443:B2区、445:D1区、446:A区

第85図 土師器(中世)



第86図 製塩土器・器種不明土器

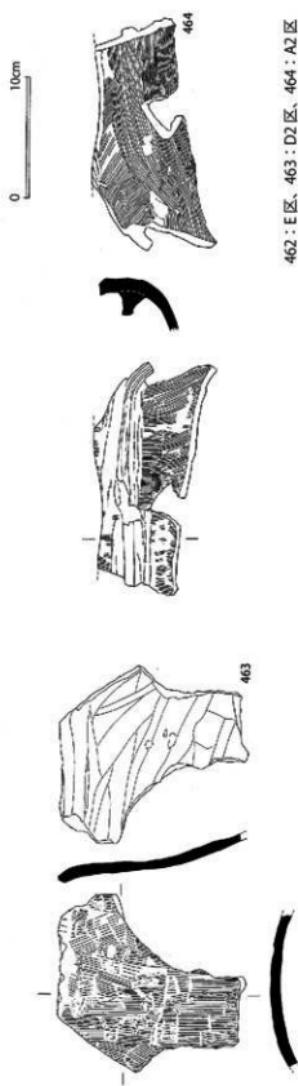
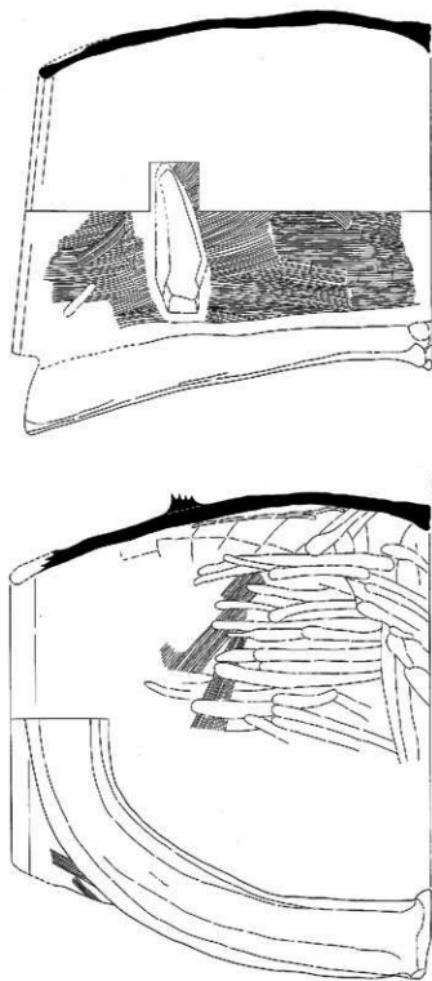
第87図 薦①



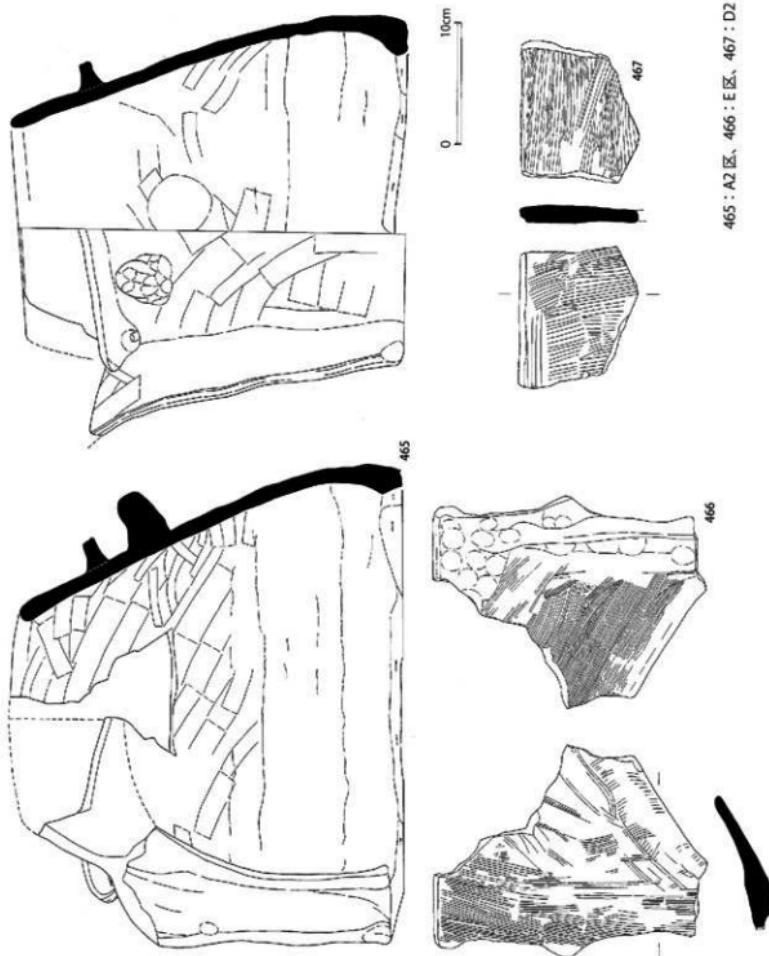
460 : E区
461 : G区

10cm

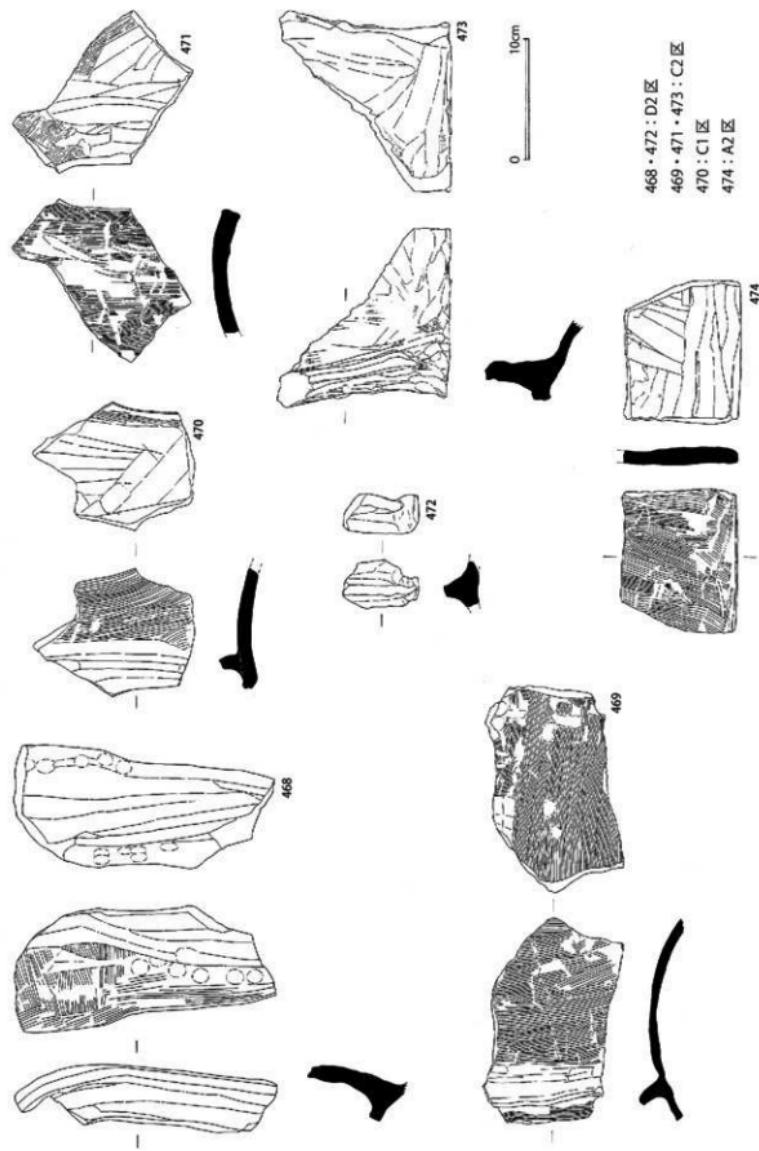
第88図 獣②



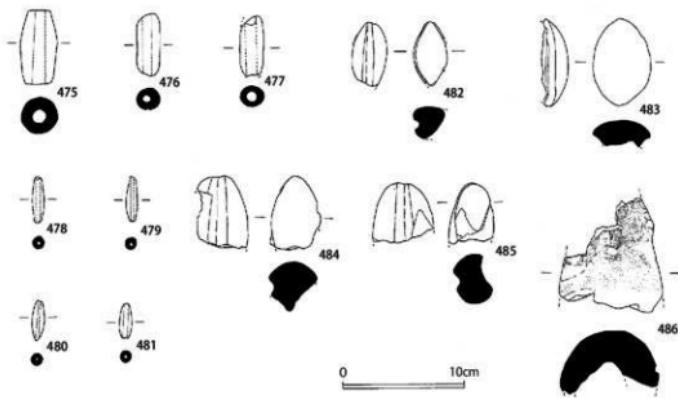
第89図 罩(③)



465 : A2区、466 : E区、467 : D2区



第90図 著(4)



475・478・479・486 : A1 区、476・480・482 : A2 区、477・481 : B1 区、483 : C1 区、484・485 : B2 区

第 91 図 土錐・轆羽口

【竈】

竈資料が比較的多く出土し、ほぼ全形近くまで復元できた 3 点 (460・462・465) と破片 12 点を図化した。これらは、曲げ底系 (460・464・465) と付け底系 (461・462・465・468～473) に分類できるが、463・467・474 は不明である。

460 は体部外面にタテハケが施され、体部上半部に左右均等に下向きの角状の把手が付く。胎土は非河内系である。461 は焚口外面付近に煤の付着が顕著である。胎土は金雲母を多く含み、粗い。底部は立ち上がりが短く、角張った形状を呈することから稻田編年第 4 段階 (平安時代以降) の所産と考えられる。462 は体部外面にタテハケが施され、左右に把手が付く。底高は掛口高とほぼ同じことから稻田編年第 2 段階 (7 世紀頃) の所産と考えられる。464 は掛け口及び底部が遺存する。曲げ底の上に付底が巡る珍しいタイプで、五反島遺跡第 1 次調査資料に類例がある。465 は底部の上に水平方向に凸帯を巡らす。凸帯の左右 2か所に 1 対の円孔が施されている。内外面ともハケは施されていない。466 は掛け口及び底部の一部が残る、曲げ底系である。467 は掛け口部破片、468・470 は焚口部と底部破片で、469・471 は焚口部破片である。472～474 は基部破片で、472 は脚状の突起が付いて裾あきとなる。なお、胎土が暗褐色を呈し、金雲母、角閃石を含むことから生駒西麓産と考えられるもの (462・466) もある。

【土錐・轆羽口】

475～485 は土錐である。475～481 は管状のもの、482～485 は有溝のものとなる。概ね古代のものと考えられるが、細かな時期の特定は難しい。

486 は轆の羽口である。先端部付近の破片であり、熔解物が付着する。時期は特定できないが、今回の調査では、鉛滓が少量出土しており、この羽口資料との関連も考えられる。

【瓦】

今回の発掘調査では瓦が大量に出土し、特に A 区において集中した。その多くは 7 世紀後半から 8 世紀初期にかけてのものと考えられ、平瓦では凸面に格子目タタキ痕を有するものがほとんどであった。縄目タタキ痕をもつ平瓦も数点出土したが、時期は格子目タタキのものより下ると考えられる。

7 世紀後半から 8 世紀初期のものと考えられる瓦についてみると、軒丸瓦が出土し、単弁蓮華文で八弁の瓦当が 9 点、十六弁のものが 1 点検出された。八弁蓮華文の瓦当（1001～1009）については、その蓮弁の中にさらに忍冬文が飾られている。1001・1002 についてはほぼ完形のものとなるが、1002 については外縁がやや歪んだものとなっている。瓦当文様を観察すると、1008 の内区径が他の 8 点より 1cmほど小さく、中房径が若干大きいものとなっており、今回出土した八弁蓮華文軒丸瓦の瓦当については 2 種類あることが確認できた。

また、1008 を除く瓦当の外区には範傷が認められたが、1001～1005 については範傷が瓦当の正面右側に、1006・1009 は下側に、1007 は上側に認められ、瓦当が 90 度ずつ異なる位置で丸瓦部と接合されているものがあることを確認できた。さらに、1005 には他の瓦当に認められる傷の一部がなかった。これは、ここで出土した瓦当の製作過程において範傷が新たに生じる状況があったことを示すものとなる。また、1006・1007 については、瓦当面に指頭痕がつき、花弁に押しへこんでいる部分が認められた。

十六弁蓮華文の瓦当（1010）については 1 点のみ出土した。八弁蓮華文の瓦当が平瓦や丸瓦とともにややまとまりがある状況で出土したのに対して、十六弁蓮華文（1010）は C 1 区において遺物出土のややまばらな地点で出土した。八弁蓮華文のものと異なり、中房が高く張り出し、外縁よりも高く前面に張り出している。また、瓦当の厚さは八弁蓮華文のものより半分ほど薄いものである。

この他、軒丸瓦資料としては瓦当の剥離痕が残る丸瓦片（1011）がある。1011 は剥離痕の幅が約 4cm あり、おそらく八弁蓮華文の瓦当が剥離したものと考えられる。

また、軒丸瓦ではないが、方形の飾り瓦と考えられる破片（1012）が 1 点出土した。蓮華文と考えられる花弁の一部が残り、蓮弁の中に格子目タタキ状の文様がみられる。上位部と想定される外縁は剥離している。種類としては、方形軒瓦、隅木蓋瓦、垂木先瓦等の可能性が考えられる。蓮弁中の格子目タタキ状の文様をみると、格子目タタキの平瓦に通じるものと考えられ、これも 7 世紀後半から 8 世紀初頭のものではないかと考えられる。

次に 7 世紀後半から 8 世紀初頭のものと考えられる丸瓦、平瓦についてみると、ここでは残存状態の良いものや特徴的なものを図化した。

1013～1032 は丸瓦である。1013～1030 は全長が把握できるものである。その長さは 36 ～ 41.6cm を測り、幅については、広端部が残るもので広端幅 11.6 ～ 17.0cm の 10cm 台のものと、



第 92 図 格子目タタキパターン

21.0～24.8cmの20cm台のものがあり、歪み気味のものが多く、形に不揃いさが見受けられる。そして、厚さは1.1～1.8cmを測るが、1030については厚さ3.3cmを測り、他の丸瓦の約2倍の厚さをもつ。

これらの調整をみると、概ね凸面はナデ調整、凹面は布目痕・糸切り痕がみられる。そして、凹面の両側に縦方向の粘土接合痕をもつものが多くあり、1016～1024・1030に接合痕が確認できた。この接合痕は軒丸瓦1002にも認められるが、これは桶巻作りの際、2枚の粘土板を両側から桶に巻いたときにできた接合痕であると考えられる^(注)。

この他、丸瓦の破片であるが、1031は凹面に残る布目痕が別の布で継ぎはぎされた痕跡をもち、方形に継ぎはぎされた部分は、周りの布目よりも目が若干細かくなる。また、1032は、凹面に複数の接合痕があり、瓦の成形時に、何らかの理由で細かく粘土を充填していった痕跡であろうと考えられる。

次に平瓦であるが、今回出土した平瓦の格子目パターンは概ね3種類に分けられ、格子目が1cm角前後もしくは部分的に1cm×1.5cm前後のもの(格子目A)、格子目が1.5cm角前後のもの(格子目B)、格子目が菱形で1辺約2cmのもの(格子目C)があった。この中では格子目Aが数量として多数を占め、他は少數であったが、格子目Bが格子目Cよりも多かった。

1033～1065は全長を把握できるものであり、その長さは39.4～41.3cm、残存するもので広端幅30～36.5cm、狭端幅22.7～27.1cmを測るが、広端幅のほとんどは33cm前後、狭端幅のほとんどは25cm前後であり、丸瓦よりも形が揃っているようにみられる。

これらの調整をみると、凸面は格子目タタキ痕があり、1033～1064は格子目Aのもの、1065は格子目Bのものとなる。そして狭端部付近をナデ調整、少数であるが広端部についてもナデ調整するものが認められる。凹面については布目痕・糸切り痕が残るものが多いが、ナデ調整、もしくはヘラケズリによって布目痕等がほとんど消されているもの(1036・1065)もある。また、ヘラケズリの削る方向に向かって連続した筋目(段差)が付いているもの(1050・1058～1065)が認められ、削る際に生じたものと考えられる^(注)。

この他、全長が残るものではないが、1066は焼成後に狭端部がほぼ直線状に打ち欠かれており、何らかの理由により意図的に瓦の長さを短くしようとしたものではないかと考えられる。その長さは36.2cmを測る。格子目Bのものである。凹面はヘラケズリにより布目がほとんど残らない。

また、道具瓦となるが、隅切瓦(1067)がほぼ完形で1点出土した。長さは41.1cm、広端部は26.9cmを測り、格子目Bのものである。確認できた道具瓦はこの1点となる。

この他、破片ではあるが、特徴的な平瓦をみると、1068は格子目Cのものである。格子目Cは破片のものしか出土していない。凹面は残存部でナデによって布目痕は消されている部分が多い。1069は格子目Bの上に格子目Cのタタキが施されているものである。この資料から格子目Bと格子目Cが併用されていたことがわかる。

1070～1073は格子目Aの破片であるが、1070は凸面格子目上の一
部（拓本右上隅）に布目痕がつくものである。1071・1072は、凸面端部付近をナデ調整によって格子目が消された部分に線刻が施されているものである。1072は部分的（拓本左下隅）に線刻が認められるだけであるが、1071については格子目状の線刻が残存部で全体に施されている。1073については、凸面側・凹面側のほぼ同じ部分に縦方向に粘土接合痕が認められる。おそらく成形時の粘土板の接合痕か、もしくは粘土をつぎ足した痕跡ではないかと考えられる。

さて、丸瓦では歪み気味のものがみられたが、今回の調査では、完全に歪み、瓦製品としては失敗作といえるものが比較的多く出土した。その一部ではあるが、1074は丸瓦、1075は平瓦である。これらは波打ったような形状となり、完全に焼き歪んだものである。また、焼成時に瓦どうしが癒着したものもみられる。1076・1077は平瓦が癒着したもので、1076は4枚分、1077は3枚分の瓦が癒着しており、これをみると、凸面どうし、凹面どうしが面を合わせて癒着し、窯での焼成時の瓦の並べ方がうかがえる。これらの歪んだ平瓦1075～1077については格子目Bのものである。

以上、7世紀後半から8世紀初頭にかけてのものと考えられる瓦についてみてきたが、先述のように、これらよりも時期が下るとみられる瓦も少量出土している。1078～1080は凸面に縄目タタキ痕を有する平瓦である。破片であるが、比較的残存部の大きい1078をみると、狭端幅が22cmであり、格子目タタキのものよりもやや小型となる。側縁部の形状から一枚作りによると考えられる。そして、1078の凹面には布目痕が全面にみられるが、同じ縄目タタキ痕をもつ1079・1080の凹面については布目痕も残るが、ナデ調整が施されている。

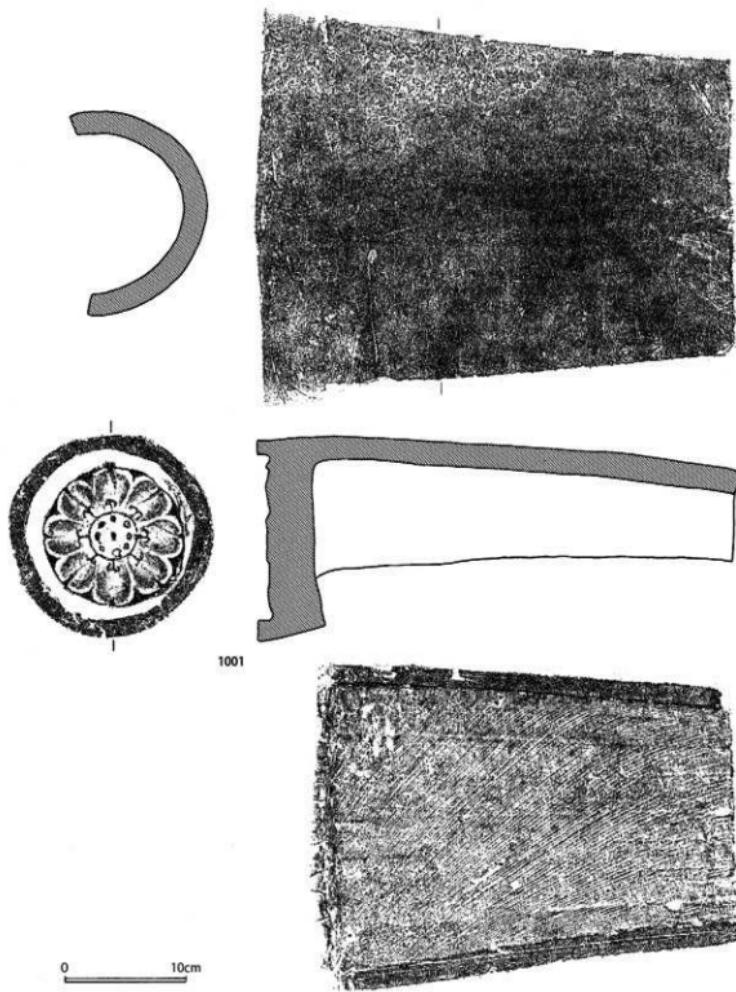
1081は丸瓦である。ナデ調整が施されているが、凸面に縦方向の平行する筋状の痕跡があり、縄目タタキの痕跡である可能性がある。しかし、ナデ調整のために明確ではない。

1082は、今回の調査で唯一1点だけ確認された玉縁を有する丸瓦片である。玉縁部分で剥離しているが、凸面はナデ調整、凹面は布目痕が認められる。

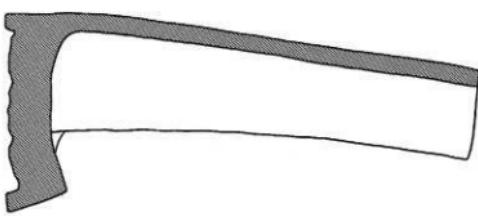
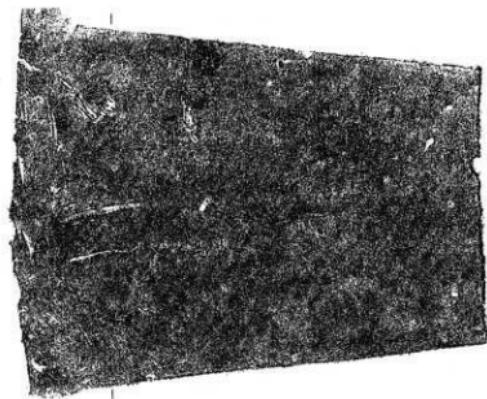
1078～1082の時期については、1081の丸瓦はやや不確定な側面もあるが、おそらくは前述の7世紀後半から8世紀初頭の瓦よりも時期は下り、概ね古代の枠内に属するものではないかと考えられる。

以上のように、7世紀後半から8世紀初頭の瓦が大量に出土したが、これらの瓦については、完形品あるいは完形品に近いものが多数あり、屋根に葺かれていたという使用の痕跡が明確に認められるものがなかった⁽¹⁰⁾。また、どのような理由で完品である瓦とともににあるのかという点は検討課題となるが、不良品ともいえる歪んだ瓦や癒着した瓦が比較的多く出土した。

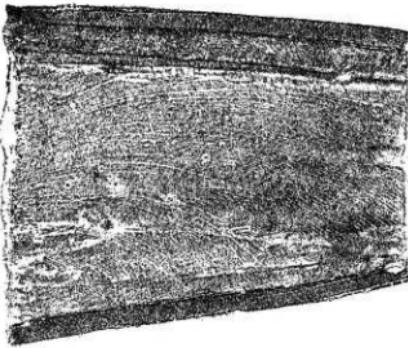
(注) 摂河泉瓦研究会の方々からのご教示による。



第93図 瓦①(軒丸瓦)

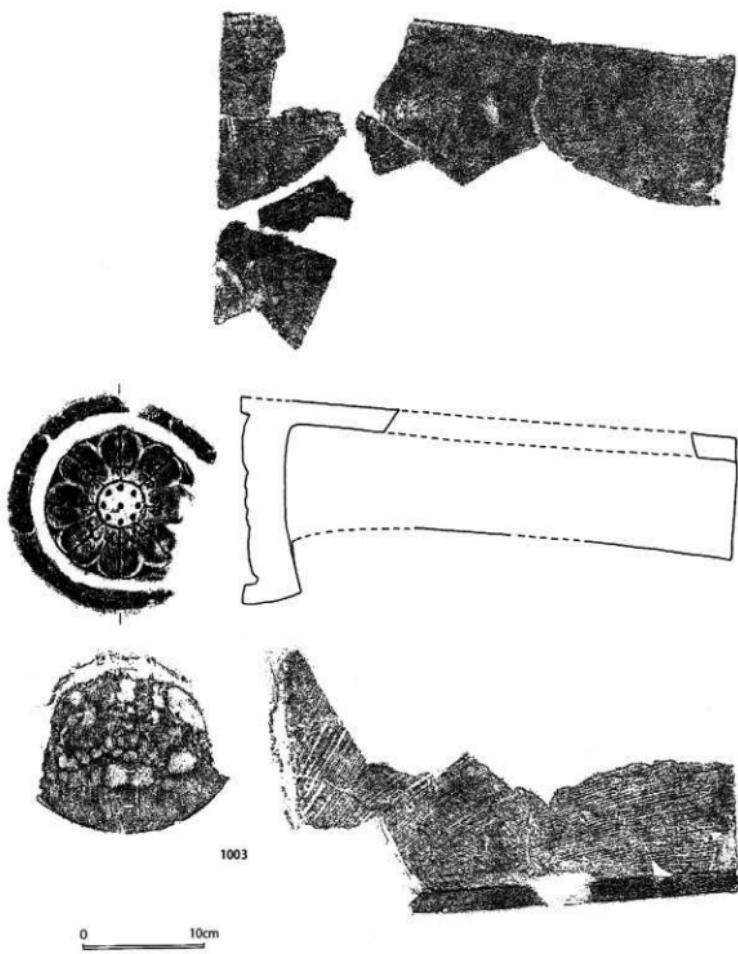


1002

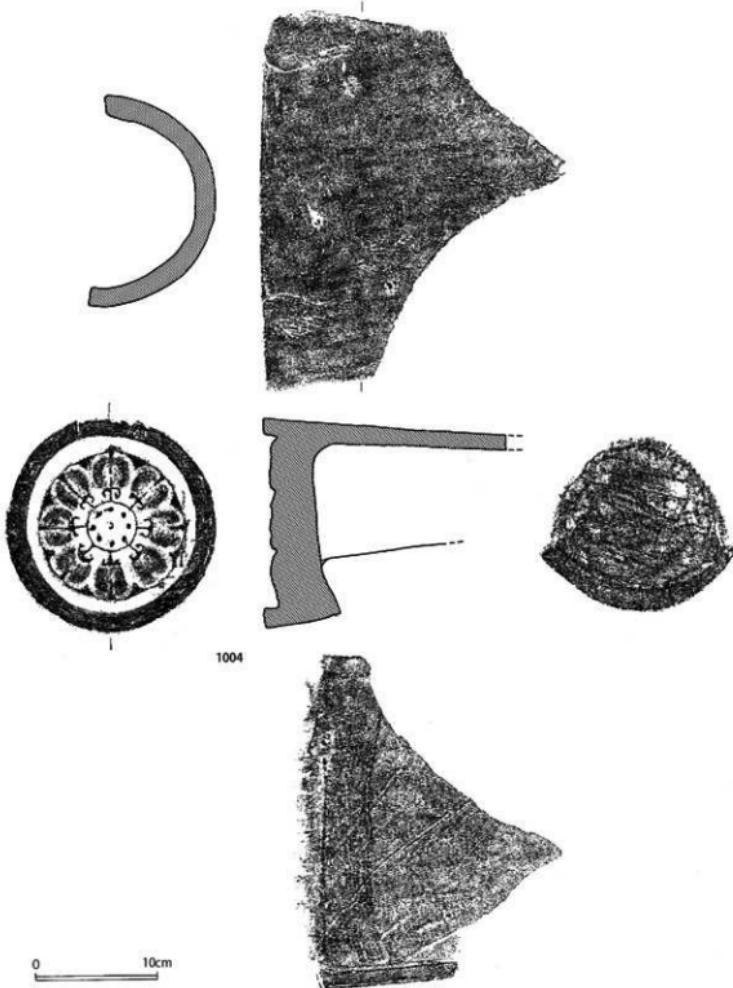


0 10cm

第94図 瓦②(軒丸瓦)



第95図 瓦③(軒丸瓦)

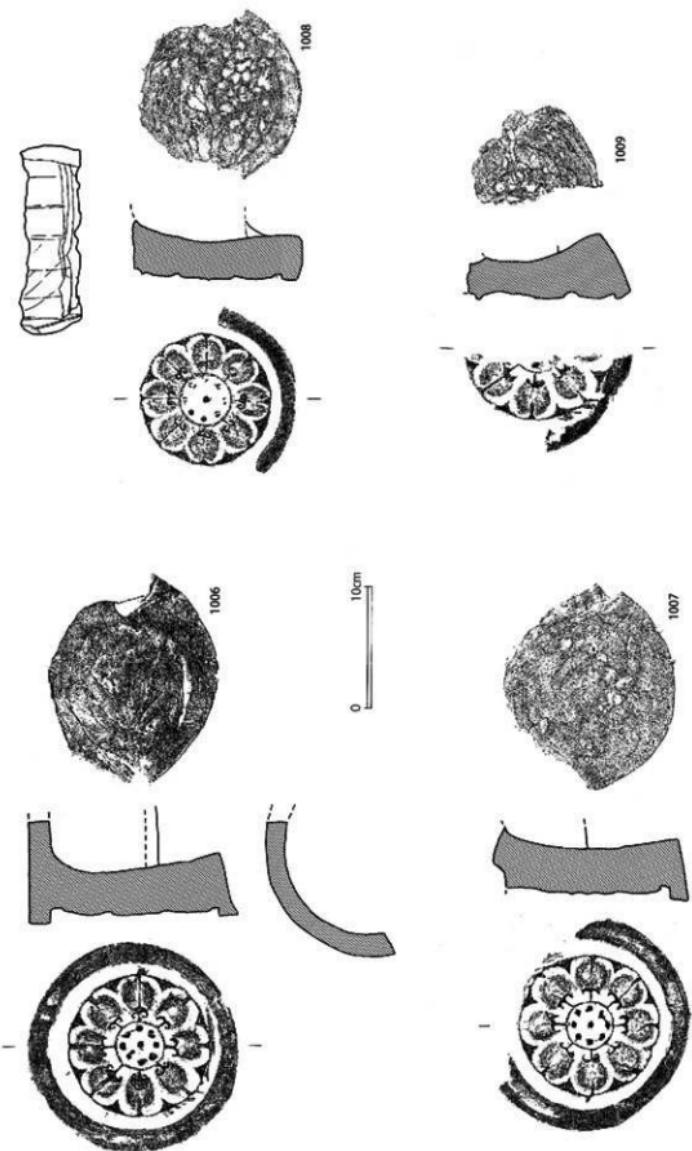


第96図 瓦④(軒丸瓦)

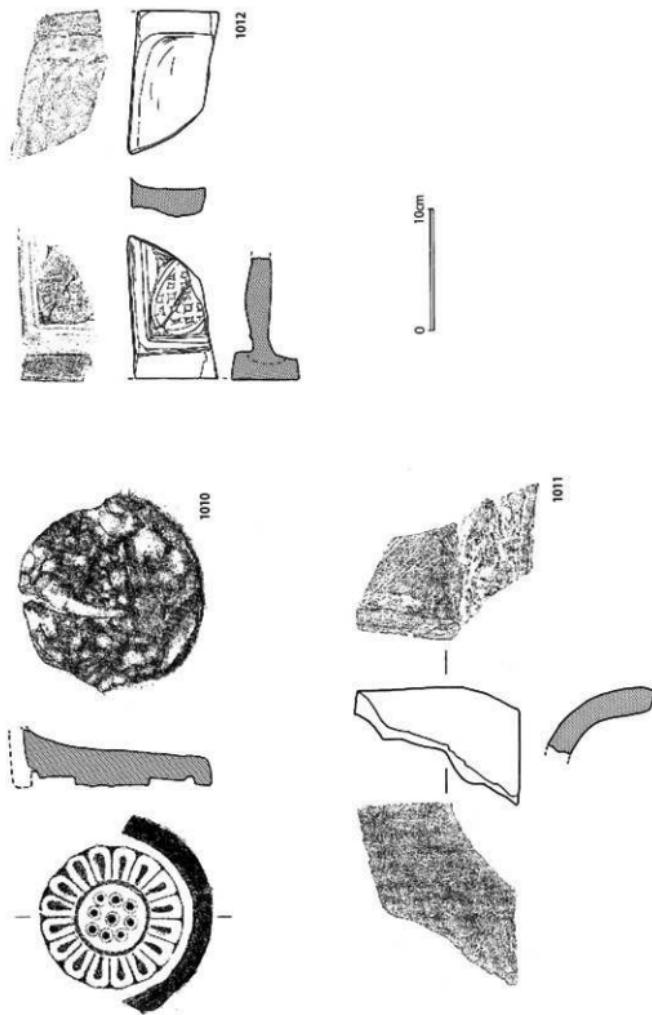


第97図 瓦⑤(軒丸瓦)

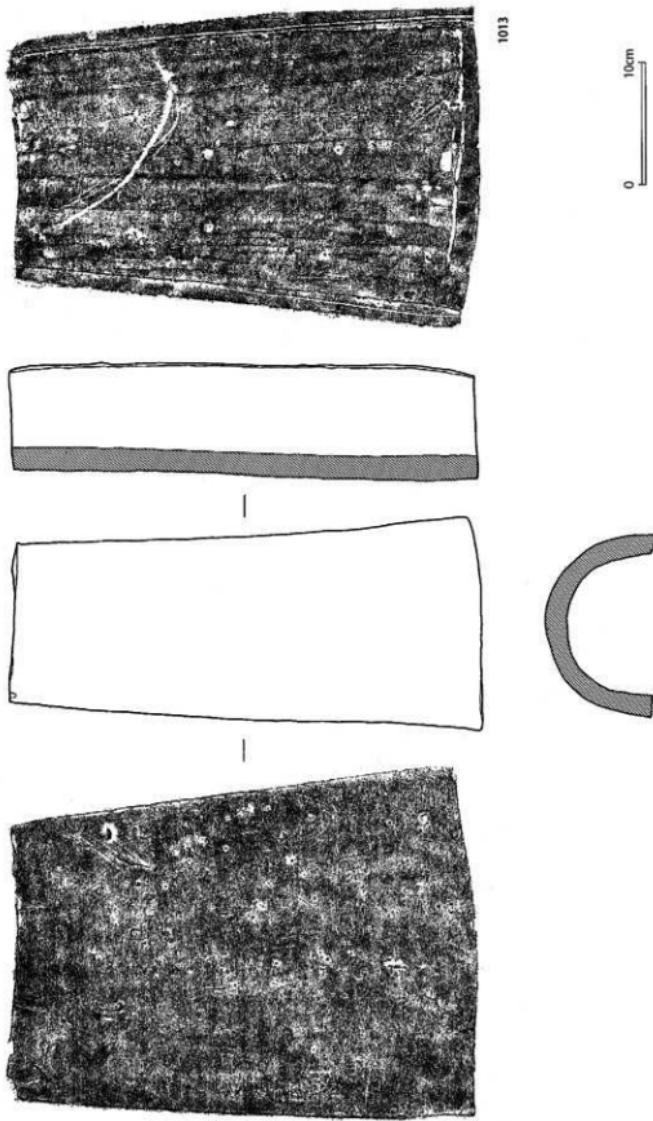
第98図 瓦⑥(軒丸瓦)



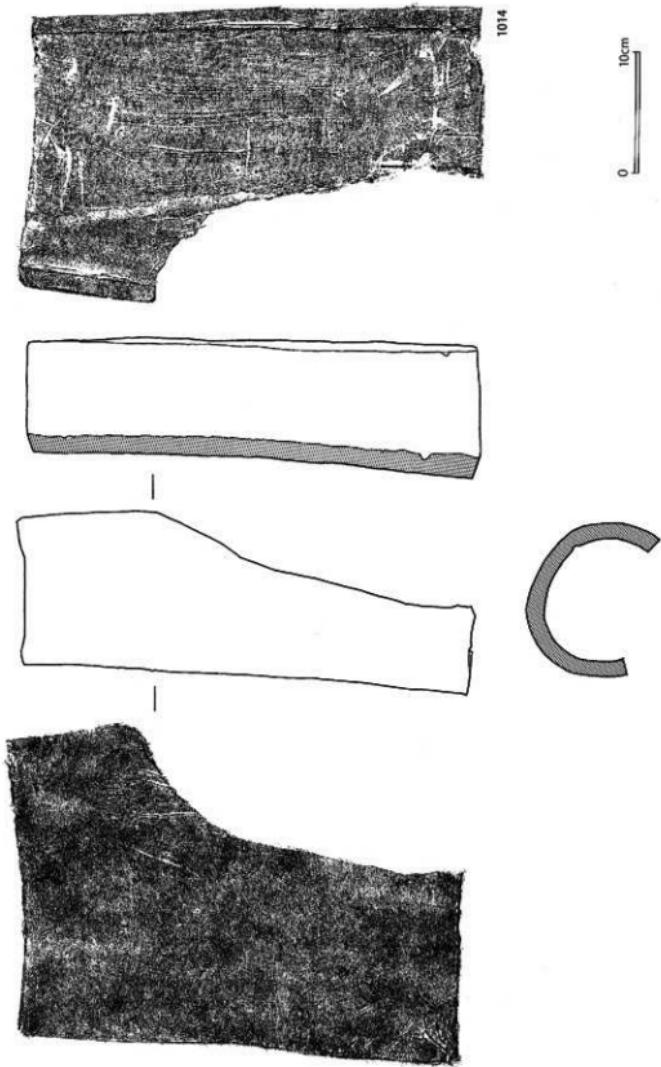
第99図 瓦⑦(軒丸瓦他)



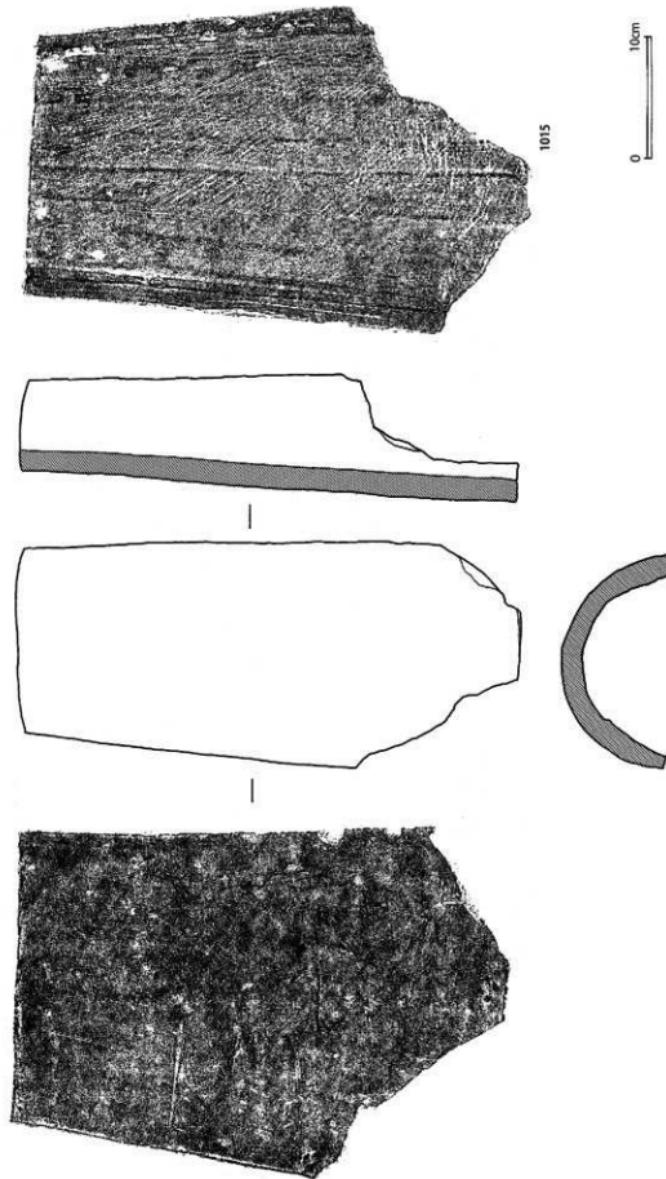
第100図 瓦⑧(丸瓦)



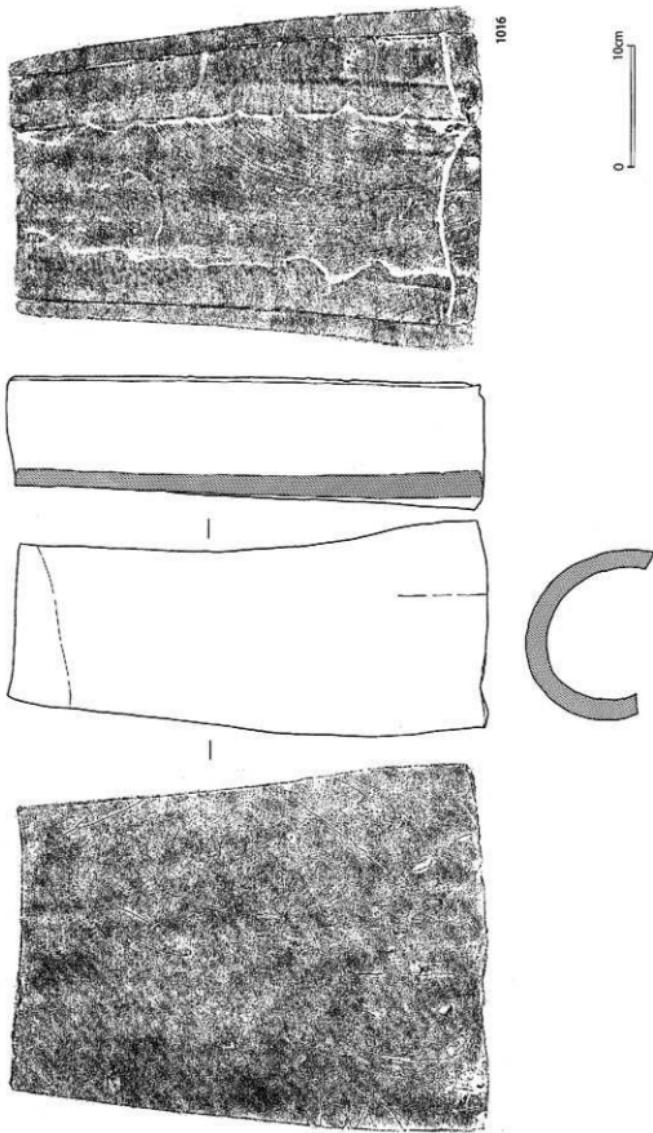
第101図 瓦⑨(丸瓦)



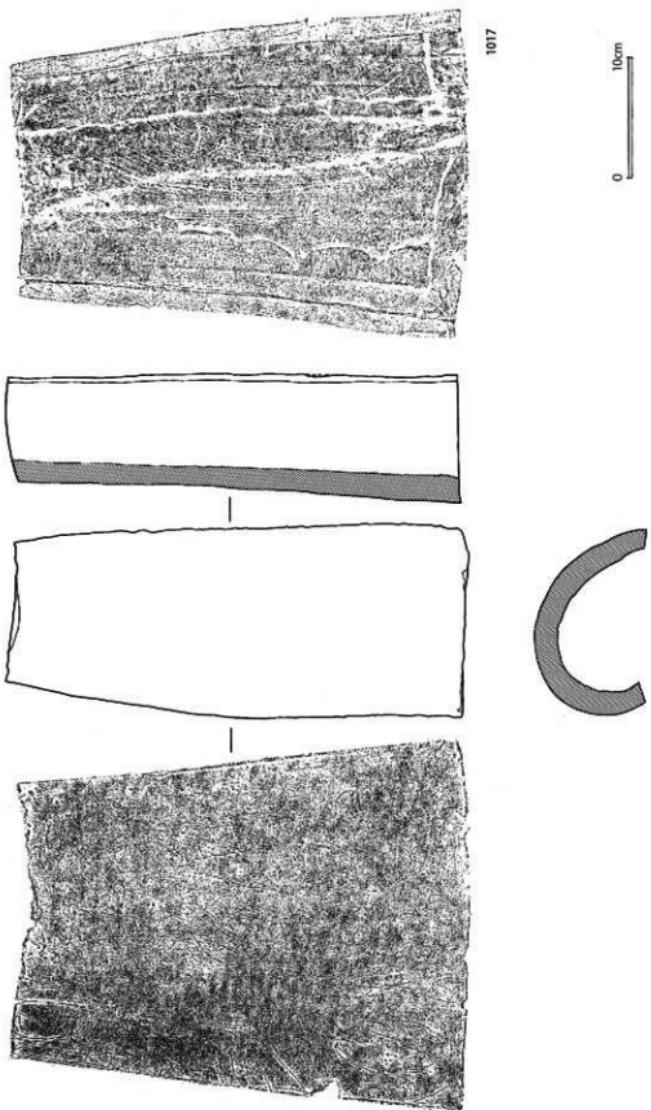
第102図 瓦⑩(丸瓦)



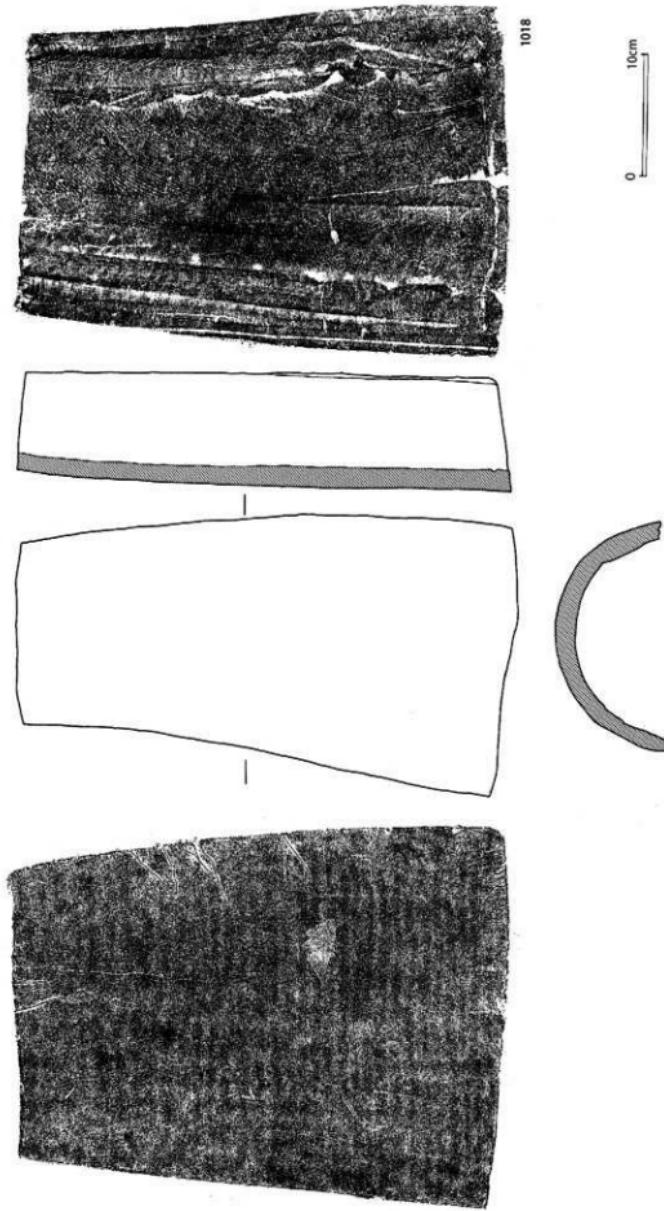
第103図 瓦①(丸瓦)



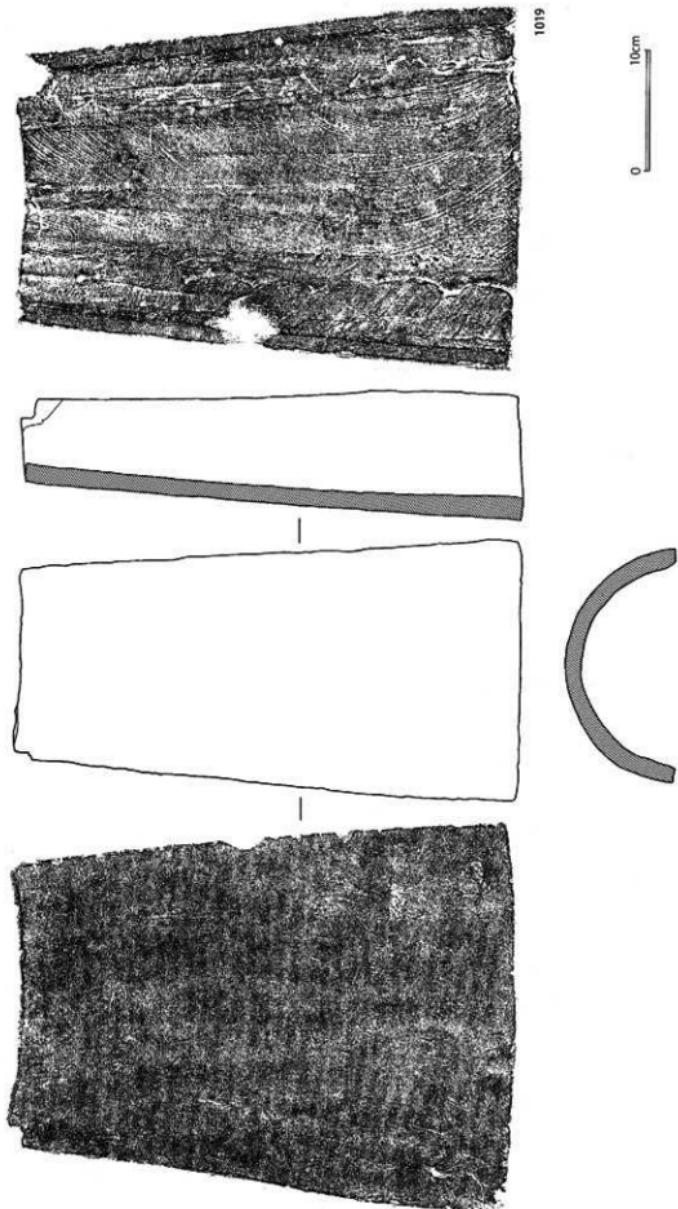
第104図 瓦②(丸瓦)



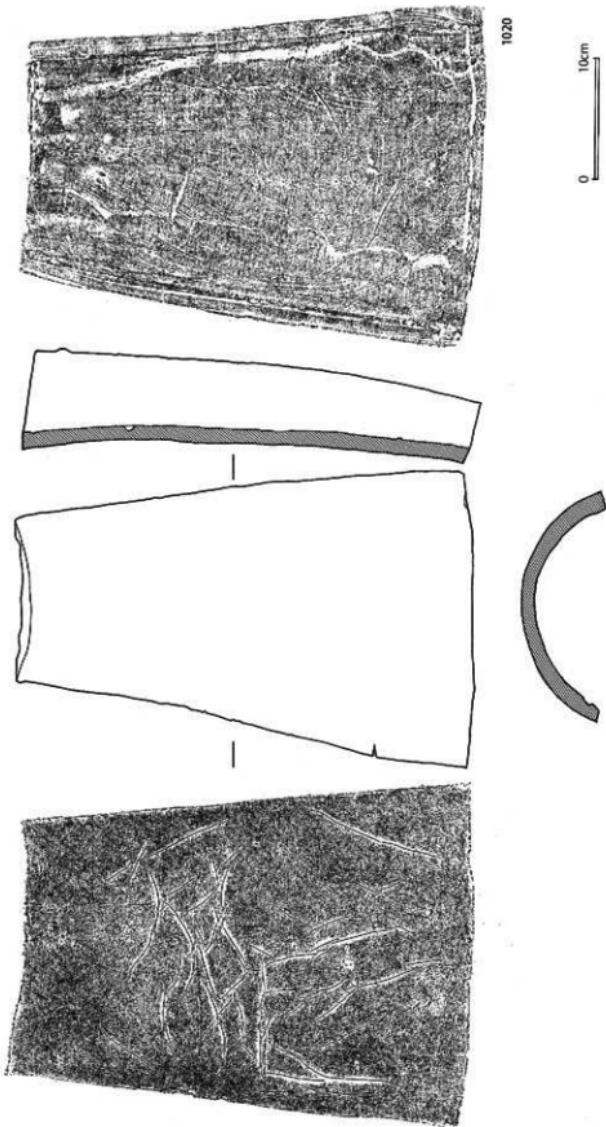
第105図 瓦⑬(丸瓦)

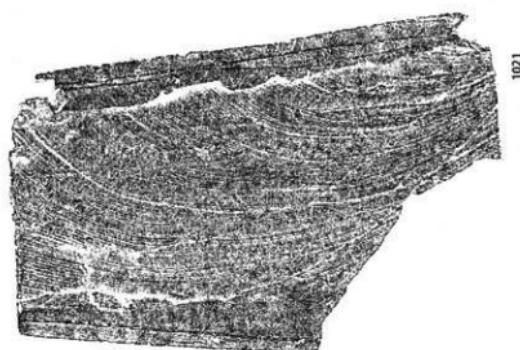


第106図 瓦④(丸瓦)



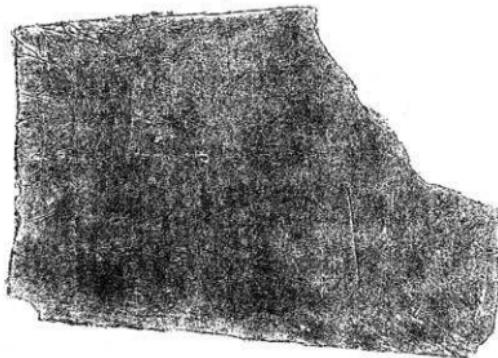
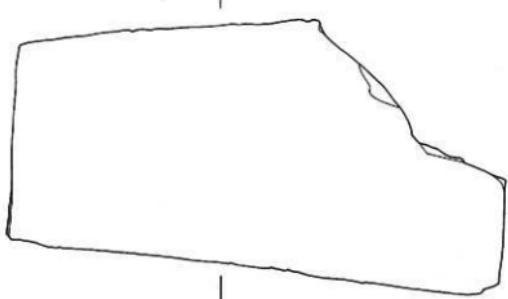
第107図 瓦⑮(丸瓦)





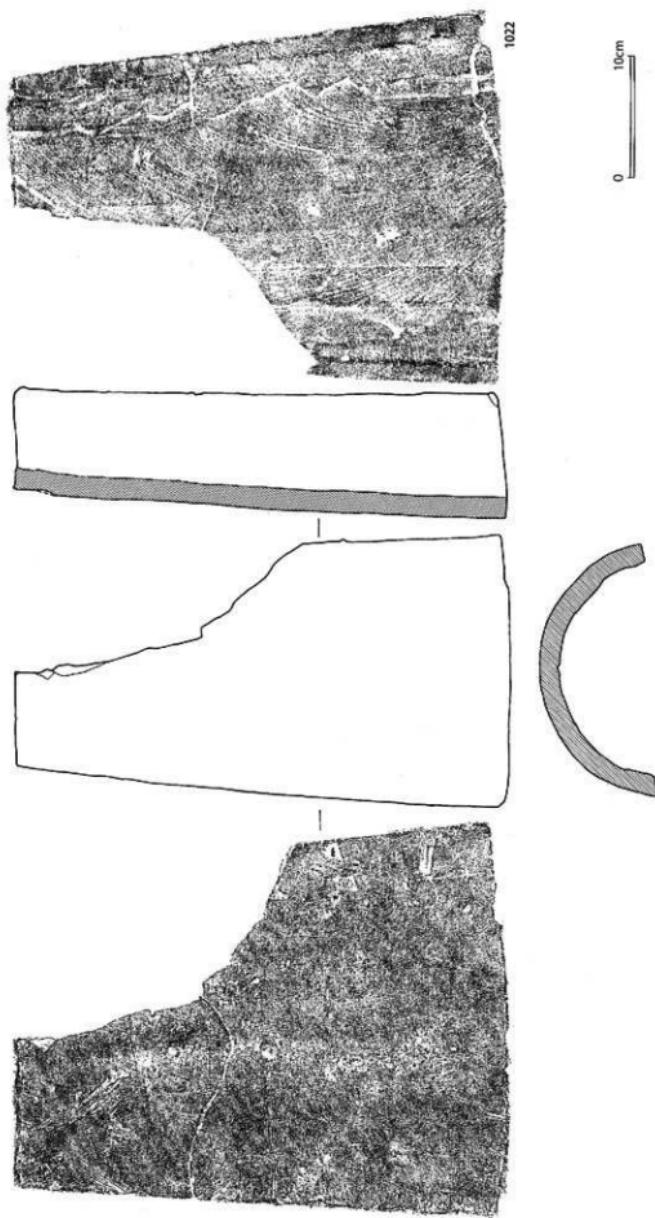
1021

0 ————— 10cm

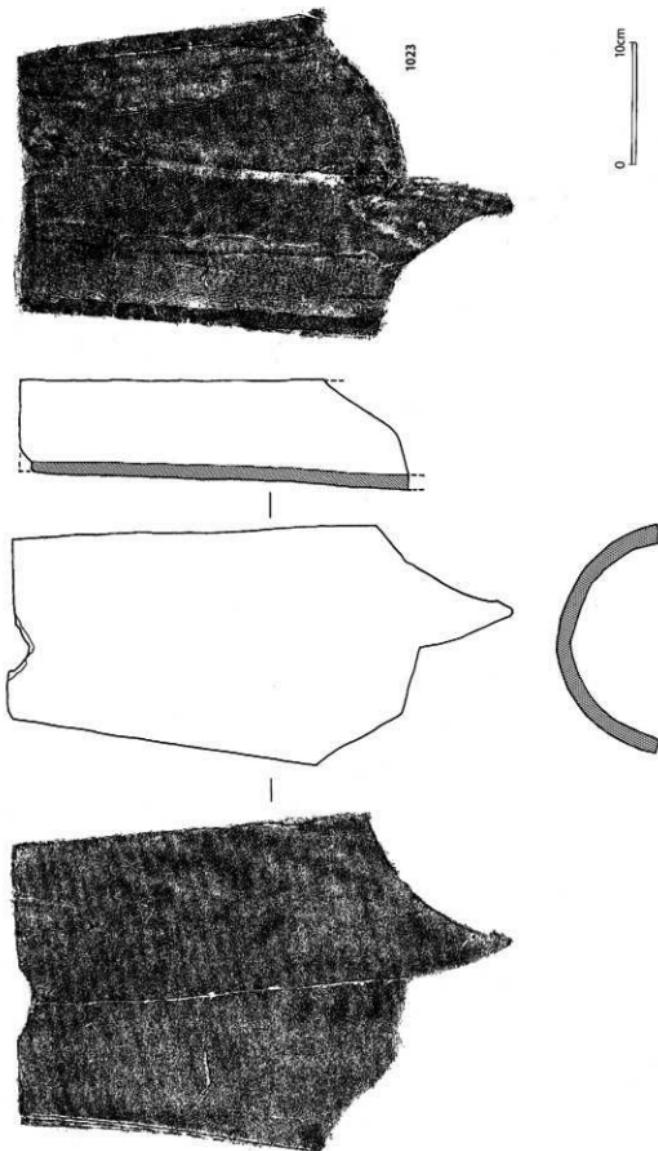


第108図 瓦⑯(丸瓦)

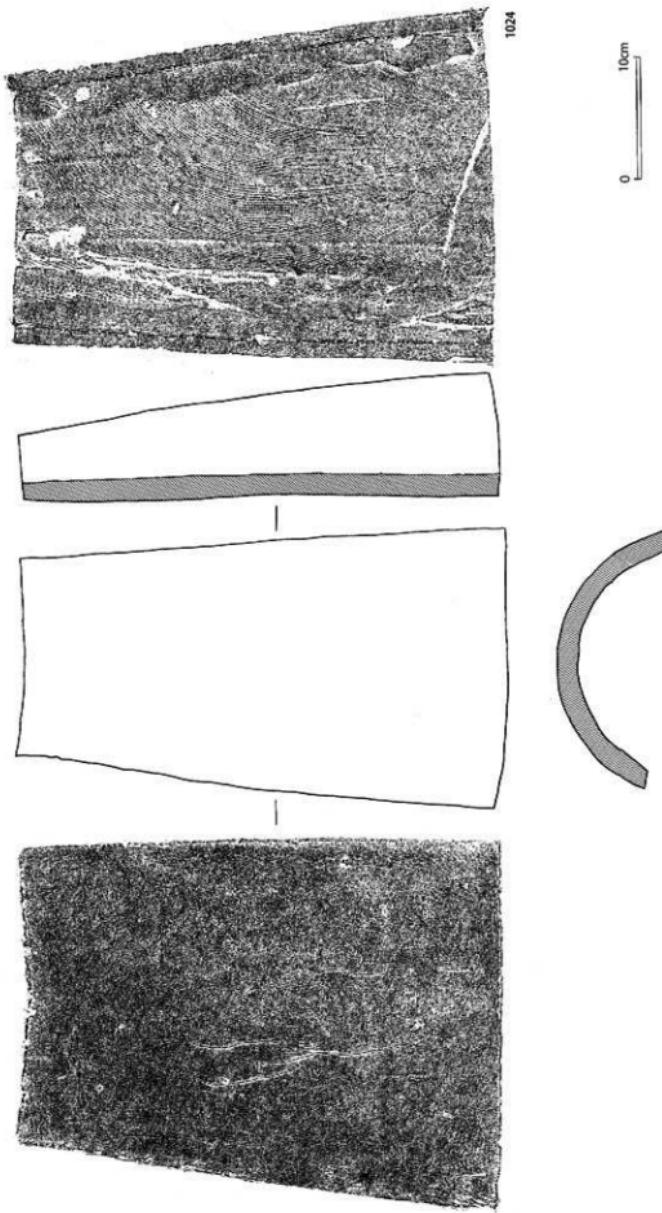
第109図 瓦⑦（丸瓦）



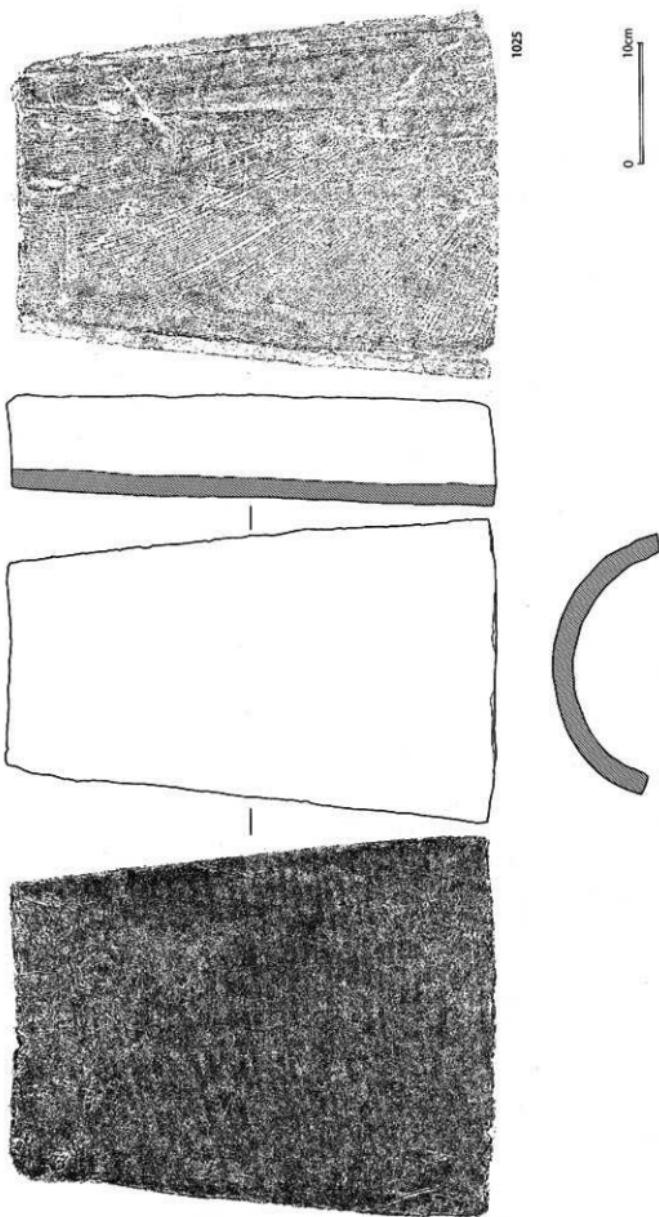
第110図 瓦⑯（丸瓦）



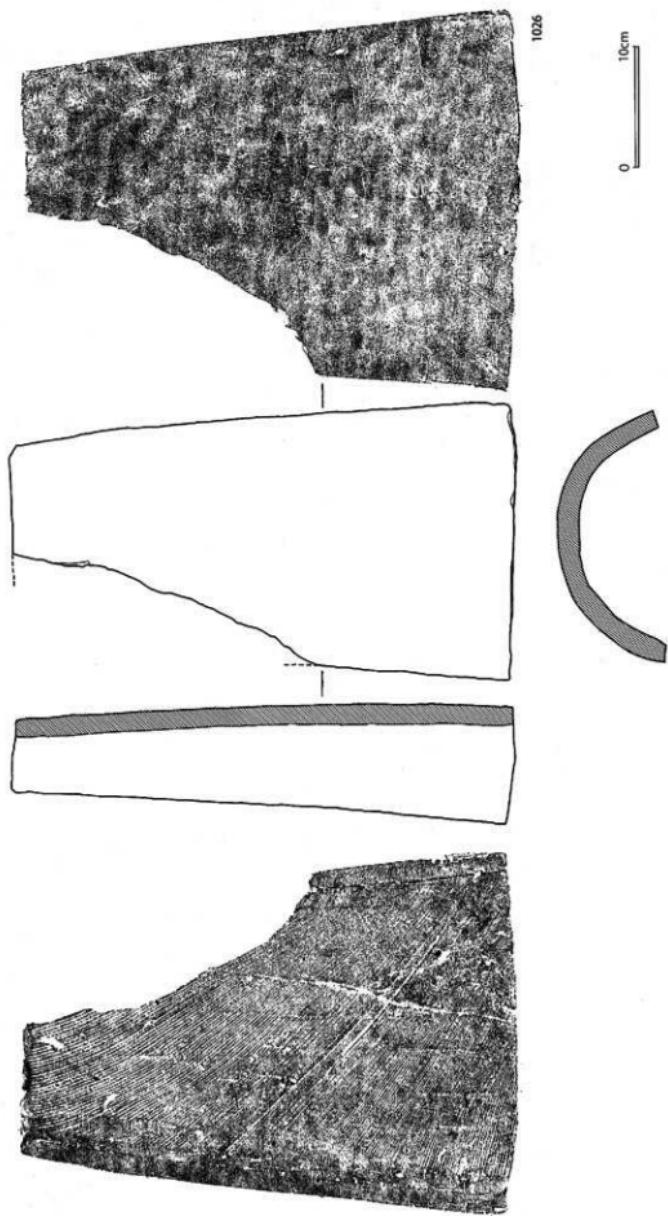
第111図 瓦⑯（丸瓦）



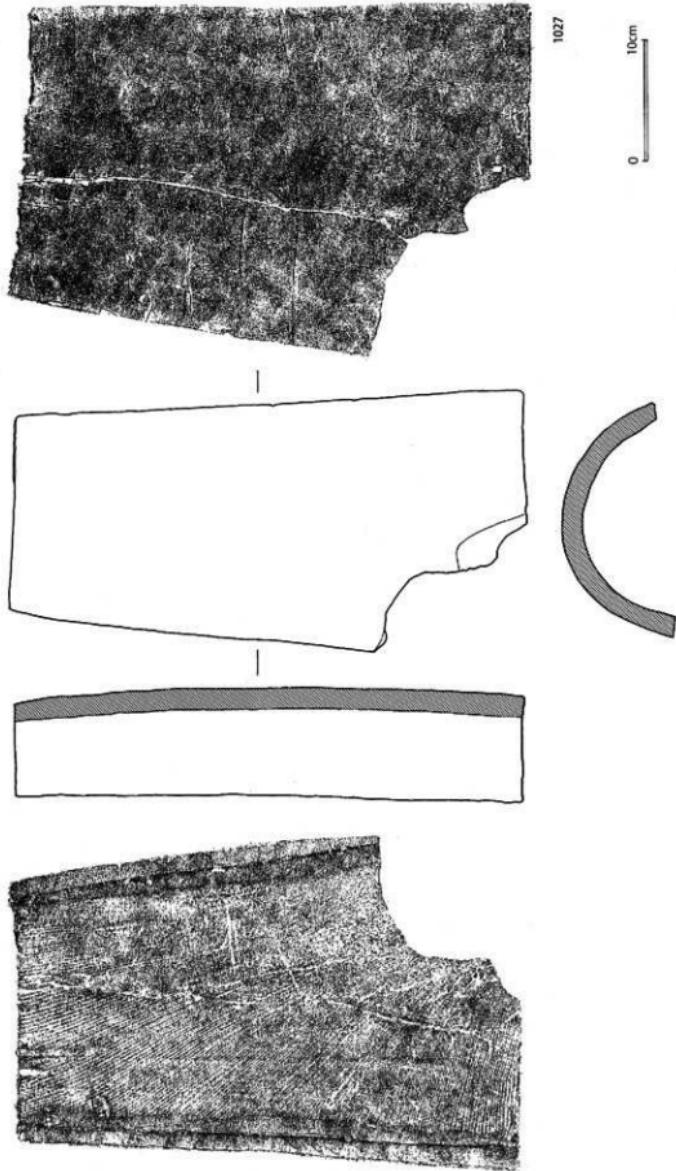
第112図 瓦②(丸瓦)



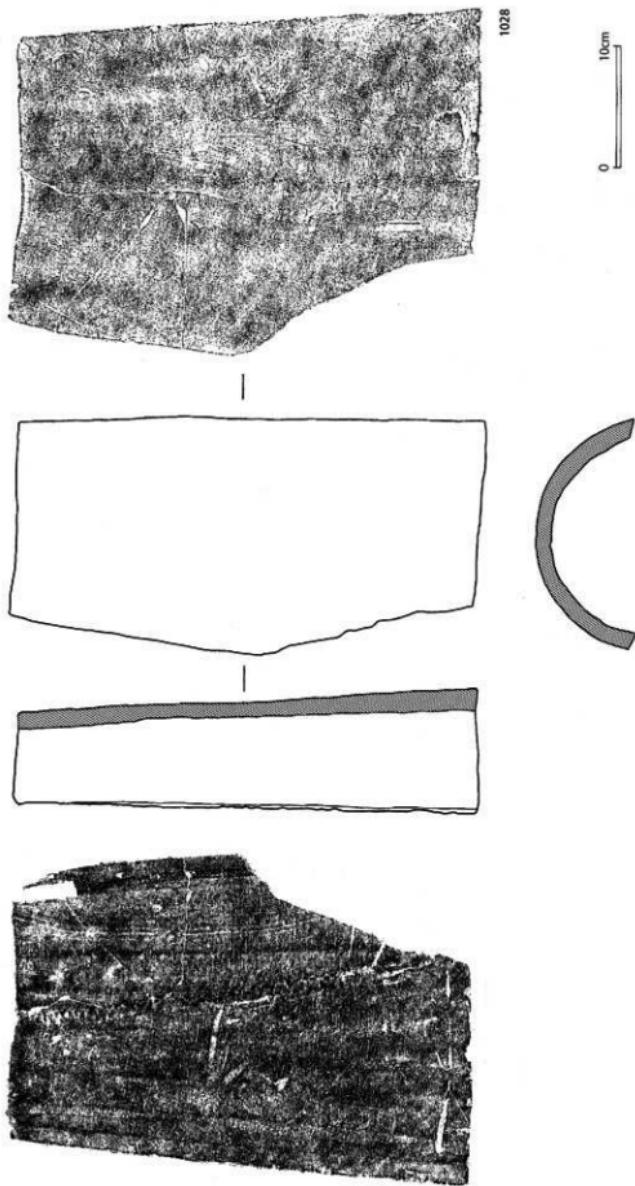
第113図 瓦②(丸瓦)



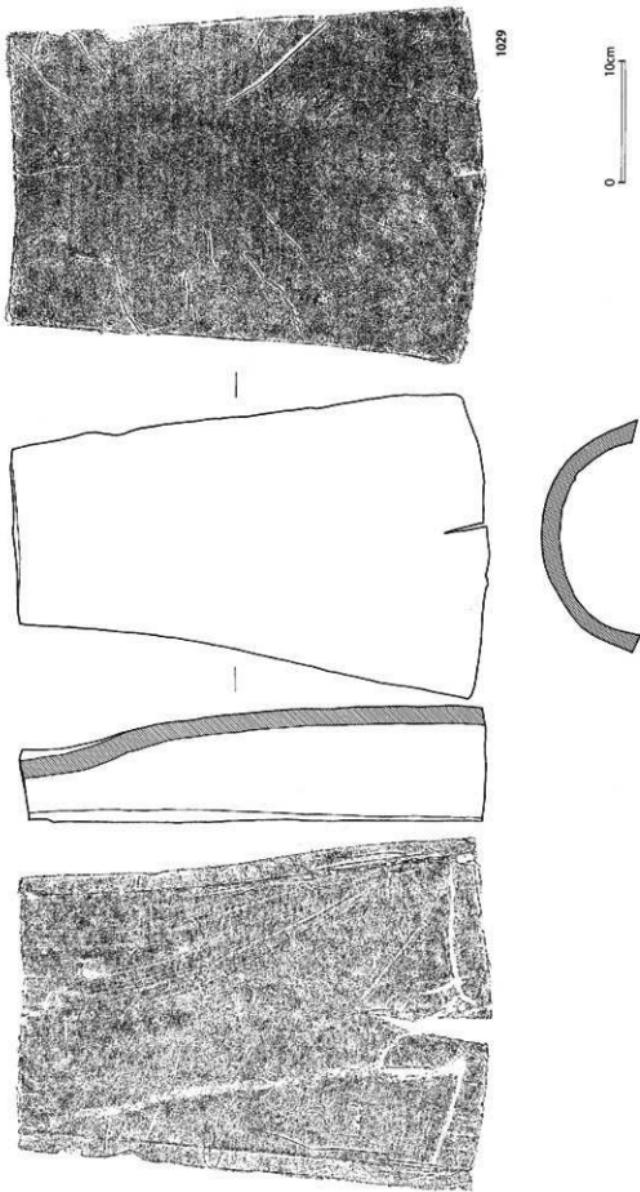
第114図 瓦②(丸瓦)



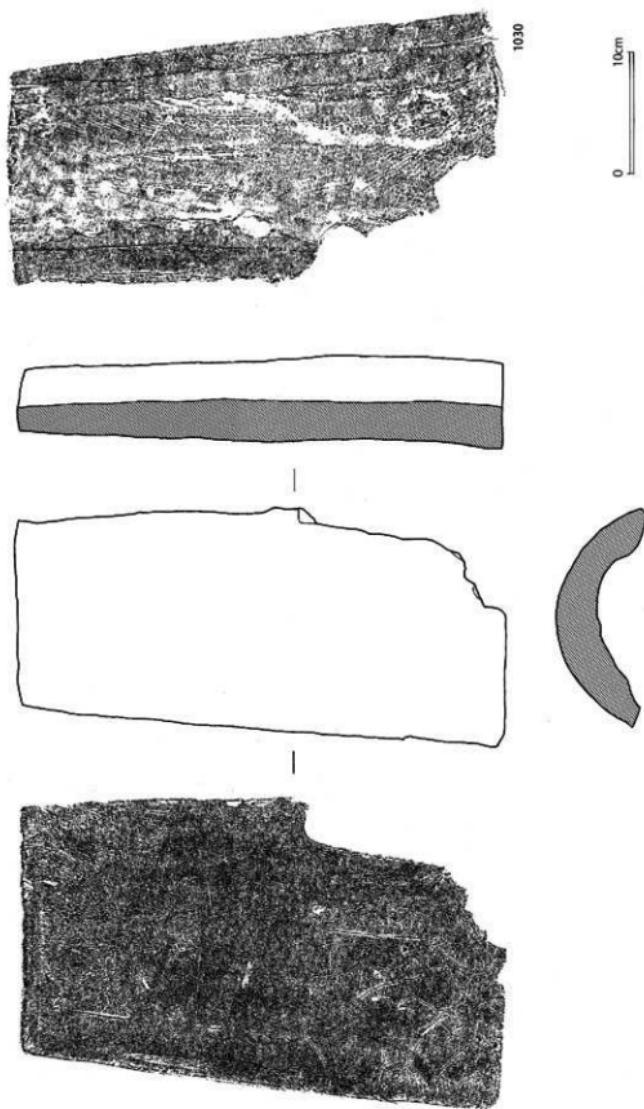
第115図 瓦③(丸瓦)

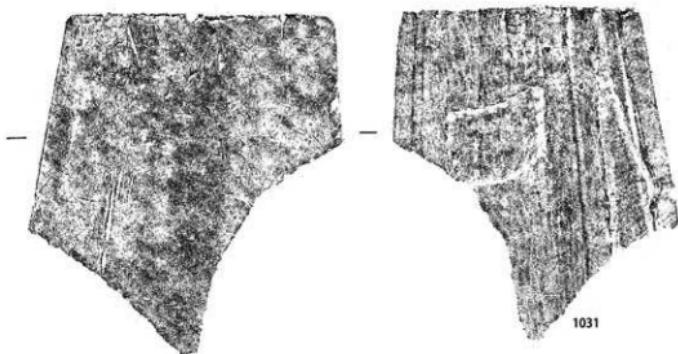


第116図 瓦②(丸瓦)

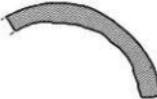
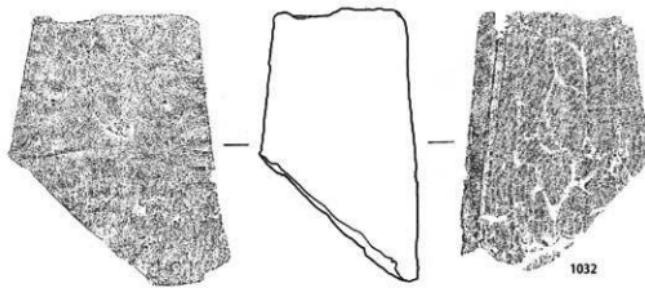


第117図 瓦⑮(丸瓦)





0 10cm



第 118 図 瓦 ⑯ (丸瓦)